

平成 31（令和元・2019）年度

年 報
Annual Report

公益財団法人 山階鳥類研究所
Yamashina Institute for Ornithology

はじめに

本冊子は、公益財団法人山階鳥類研究所の令和元年度（平成31年度）の年報です。この年報は、当研究所の研究員、専門員による、この年度に行った研究の成果、調査、社会活動の報告です。

文部科学省や環境省、公益財団法人、自治体、企業などからいただいている研究助成、業務委託には、それぞれ個々に報告書を提出していますので、この冊子は当研究所の研究活動を概括的にまとめたものです。

外部の関係機関、関係者の方々に本冊子をご拝読いただき、率直なご評価をいただけると幸いです。

近年、他の研究機関、大学、博物館で、こうした年間の成果報告書を出すことが定着しています。しかし、日本学術会議などでも、各研究機関が、成果報告書を毎年詳細に記録・作成することを、あらためて検討しなおそうという動きがあるときいています。これは、自己の報告の作成、評価のために、研究員や編集担当者、事務局が、本来の研究や活動のために使うべき時間と労力を必要以上に割くことになってしまっているため、それらの問題点を見直して、効率化をはかろうということのようです。

これらのことは今後、山階鳥研でも検討していかなければなりません、もちろんそれによって、成果報告の意義を軽視するものではないでしょう。こうした年報の刊行によって外部からの多数の評価をいただきやすくし、それを研究所が受けとめ改善を図ることによって、研究所がより社会貢献できる方針を打ち出せます。また、年報の作成過程で、各研究員、専門員が自分の研究、社会活動を振り返り、自省して、今後の自己の業務の目標を明確にできます。

本年報をご覧いただけるとわかるように、自然誌研では標本・資料の整理が一層進み、さらにその電子化に努めてきました。他の博物館、動物園、大学などとの連携も進めてきています。保全研では、標識調査をさらに継続させ、長期的な調査の総合化の結果もえられてきていますし、アホウドリなどの保全活動も広報活動の成果もあり、国際的に高く評価していただけるようになりました。

山階鳥研では、今後さらに、現在の自然誌研究室、保全研究室のそれぞれの研究を相互に連携させ、また研究成果の公開をいっそう進めて、SDGs、生物多様性の実現をめざす国際社会に貢献できるように努めたいと思います。

この年報の作成、編集にご協力いただきました皆様方にお礼申し上げます。あらためて皆様からの忌憚のないご意見をいただくようお願いいたします。

令和2年8月

公益財団法人山階鳥類研究所
所長 奥野卓司

目次

I	おもなできごと	1
II	トピックス	
	● ジョン・グールド展に特別協力	4
	● ナスカの地上絵の鳥の種を同定	5
	● 日本で繁殖する海鳥類 10 種の長期的な個体数変化を解明	6
	● 鳥類標識調査に関するシンポジウムを共催	7
	● カムチャツカ半島で繁殖したミヤコドリが日本に渡来	8
	● ミャンマー人研究者が来日し実習	9
III	事業内容	
	III-1. 事業活動要約	11
	III-2. 事業活動概要	12
	III-3. 保全研究室の事業活動	27
	III-4. 科学研究費補助金（特定奨励費）の研究事業	29
	III-5. 研究所員の論文・講演等活動成果	60
	III-6. 所蔵資料の利用実績・その他	73
	III-7. 新聞・雑誌・メディア記事掲載記録	74
IV	資料編	
	IV-1. 組織図	79
	IV-2. 人員構成	80
	IV-3. 評議員名簿	81
	IV-4. 役員名簿	82
	IV-5. 特任研究員・特任専門員・客員研究員・フェロー名簿	83
	IV-6. 意見交換会記録	85
	IV-7. 研究成果発表会記録	87
V	平成 31（2019）年度決算資料	
	V-1. 正味財産増減計算	106
	V-2. 貸借対照表	108
	V-3. 財産目録	109
VI	ご寄附・賛助等に関する資料	111

I おもなできごと

【令和元（2019）年】

- 5月1日 峰崎善次事務局長就任
- 5月12日 Enjoy 手賀沼！バードウィーク手賀沼探鳥会開催（手賀沼、千葉県我孫子市）（後援）
- 5月16～17日 尾崎副所長、韓国鳥学会で発表（演題「日本鳥学会と山階鳥類研究所の紹介」、国立大邱科学館、韓国大邱）
- 5～6月 海鳥野外調査実習実施（合計2回、青森県八戸市蕪島、富田研究員）
- 5～8月 陸鳥野外調査実習実施（合計6回、福島県相馬市、仲村研究員が担当）
- 6月1日 水田拓保全研究室室長就任
- 6月1日 イセ食品たまご研究所公開セミナーが開催（有楽町朝日ホール、東京都千代田区）（協力）
- 6月17日 中国科学院大学人文学院の黄荣光さんが来所
- 6月20日 定時評議員会・臨時理事会（東京都内）
- 6月20日 北海道大学総合博物館の江田真毅准教授、山崎自然誌研究室長らの研究グループ、ナスカの地上絵に描かれた鳥種同定に関する研究を論文発表
- 6月29日～9月1日 萩博物館特別展「危険生物大迷宮」（萩博物館、山口県萩市）（協力）
- 7月6日～9月8日 名古屋市科学館特別展「絶滅動物研究所」（名古屋市科学館、愛知県名古屋市）（協力）
- 7月27日～10月20日 奥野所長、「描かれた鳥たち いろとりどり」展で講演（演題「『鳥獣戯画』から『火の鳥』まで」、8月10日、嵯峨嵐山文華館、京都市右京区）（協力）
- 7月31日 北條前事務局長退職、吉安専門員が定年退職
- 8月19日 東京農工大学ほか国際研究グループに加わった出口前保全研究室長（現・兵庫県立大学大学院）らが報道発表（「海鳥が食べたプラスチック片から添加剤を検出」）
- 8月8～11日 尾崎副所長、中国鳥学会で発表（演題「日本における標識調査によるモニタリングで明らかとなったシマアオジとその他のホオジロ属の種の減少」、東北師範大学、中国吉林省長春）
- 8月14～25日 「ちばアート祭2019」のデジタルナイトサファリ（イルミネーション）、小原典子さんによる「鳥の交差点CHIBA」（千葉県立美術館、千葉県中央区）（協力）
- 9月2日 保全研究室の富田研究員と佐藤研究員（現・フェロー）が、北海道大学大学院の先崎理之助教や綿貫特任研究員らと共同で論文発表し、報道発表（「日本で繁殖する海鳥類10種の長期的な個体数変化を初めて解明」）
- 9月3日 標識事業検討会（商工会館、東京都千代田区）
- 9月5～6日 奥野所長、山崎自然誌研究室長、第23回全国鶉飼サミット京都嵐山大会で講演。シンポジウムにて奥野所長解説、富田研究員・奥野所長撮影による「天売島ウミウコロニー映像」上映（レストラン嵐山特設会場、京都市）（特別協力）
- 9月13～16日 所員、日本鳥学会2019年度大会で発表（帝京科学大学、東京都足立区）
- 9月17日 日本鳥学会大会のエキスカッションで収蔵庫を案内（山階鳥研、千葉県我孫子市）（協力）
- 10月3日 意見交換会（所員、特任研究員ほか参加）（東京大学中島ホール、東京都文京区）
- 10月4日 山階鳥類学雑誌編集委員会（北大東京オフィス、東京都千代田区）

10月5日～13日

玉川学園創立90周年記念特別展「ジョン・グールドの鳥類図譜—19世紀 描かれた世界の鳥とその時代」が池袋で開催。奥野所長、黒田フェロー、シンポジウムで登壇（10月8日、東京芸術劇場、東京都豊島区）（特別協力）

10月19日～29日

齋藤研究員、ミャンマー・ヤンゴン大学の若手研究者を招致し、福島潟、山階鳥研で標識調査とDNA実験の実習を実施（新潟県新潟市、千葉県我孫子市）

10月26日

第23回手賀沼流域フォーラム「顕微鏡を作って、手賀沼のプランクトンを見よう」開催（アビスタ、我孫子市）（後援）

10月28～2月2日

玉川学園創立90周年記念特別展「ジョン・グールドの鳥類図譜—19世紀 描かれた世界の鳥とその時代」が玉川大学で開催（玉川大学教育博物館、東京都町田市）（特別協力）

11月2～3日

水田保全研究室長、高木特任研究員、尾崎副所長、ジャパンバードフェスティバル（JBF）の第29回鳥学講座「島の鳥類学—南西諸島の鳥をめぐる自然史—」で講演

11月10日

岩見研究員、鳥類標本作製技術講習会で講師（福井市自然史博物館、福井県福井市）

11月21日

山階鳥学セミナー～捕獲技術入門編～を開催（山階鳥研、千葉県我孫子市、森本研究員・千田専門員担当）

12月13日

岩見研究員、鳥類標本作製技術講習会で講師（山階鳥研、千葉県我孫子市）

12月14日

2019年度日本鳥類標識協会全国大会公開シンポジウムを開催（我孫子市南近隣センター9Fホール）（共催）

12月18日

関西地区賛助会員の集い開催（リーガロイヤルホテル、大阪市北区）（主催）

12月19日

「カムチャツカ半島で繁殖したミヤコドリが日本に渡来したことがカラーフラッグの調査により初めて判明しました」報道発表（担当千田専門員）

12月22～23日

鳥類標識調査講習会開催（山階鳥類研究所、我孫子市）

【令和2（2020）年】

1月26日

水田保全研究室長、京都市動物園・山階鳥研連携記念シンポジウム「動物園を通して野生動物の世界を知る」で講演（京都市動物園、京都市左京区）

1月27日

科学研究費補助金（特定奨励費）研究成果発表会（六本木アカデミーヒルズ、東京都港区）

1月29～30日

水田保全研究室長、仲村研究員、日ロ二国間渡り鳥等保護条約会議に参加（宮城県栗原市）

2月1日

我孫子市鳥の博物館 第86回企画展「バンディング展—足環でわかる鳥の渡り—」（我孫子市鳥の博物館、千葉県我孫子市）（共催）

2月21日

森本研究員と亀谷辰朗（自然誌研非常勤職員）、鳥博セミナーで講演（演題「ハクセキレイの標識調査」、我孫子市鳥の博物館、千葉県我孫子市）

3月6日

信州大学、山階鳥研（森本研究員）らの共同研究チームが共同で報道発表（「日本の河川で繁殖する渡り鳥、コチドリの渡り時期と越冬期の利用環境は水田だった！」）

3月27日

山階武彦助成事業選考委員会・定時理事会

Ⅱ トピックス

平成31（令和元）年度にあつたできごとから、トピックを、広報紙「山階鳥研NEWS」から抜粋して紹介します

●ジョン・グールド展に特別協力

玉川大学教育博物館が主催した「ジョン・グールドの鳥類図譜～19世紀 描かれた世界の鳥とその時代」展に山階鳥研が特別協力しました。この展覧会はグールドの鳥類図譜を中心に、同時代に制作された他の鳥類図譜、ジョン・グールドのスケッチ、レイアウト画などによる図譜の制作過程や石版画の制作方法、グールドの標本、鳥類の進化の様子をグールドの図版で示した鳥類の系統樹マンダラ（長谷川政美山階鳥研特任研究員製作）などが展示され、芸術性と科学性を兼ね備えたグールドの図譜の魅力をさまざまな角度から堪能できるものとなりました。入場者数は池袋会場（2019年10月5～13日、東京芸術劇場ギャラリー1）では1,291名、玉川学園会場（10月28日～2020年2月2日、玉川大学教育博物館）では2,967名でした。山階鳥研からこの展覧会にグールドの図譜3点と標本6点を出品しました。また、2019年10月8日に東京芸術劇場で開催されたシンポジウム「19世紀のジョン・グールド鳥類図譜から今何がわかるのか」は、荒俣宏氏（作家・博物学研究者・京都国際マンガミュージアム館長）の基調講演、荒俣氏、黒田清子山階鳥研フェロー、奥野卓司山階鳥研所長によるパネルディスカッションがあり、91名の参加者がありました。

（山階鳥研NEWS 2019年9月号・2020年5月号より）



池袋会場（東京芸術劇場ギャラリー1）の展示の様子（写真提供：玉川大学教育博物館）（山階鳥研NEWS 2020年5月号より）



シンポジウム「19世紀のジョン・グールド鳥類図譜から今何がわかるのか」（2019年10月8日、東京芸術劇場ギャラリー2、写真提供：玉川大学教育博物館）（山階鳥研NEWS 2020年5月号より）

Special Support for John Gould Exhibition

The Yamashina Institute for Ornithology (YIO) provided special assistance to the exhibition "John Gould no chorui zufu～19 seiki egakareta sekai no tori to sono jidai (John Gould's Folio Bird Books - Illustrated Birds of the World in the 19th Century and That Time)" organized by the Tamagawa University Museum of Education. The exhibition focused on Gould's ornithological monographs, as well as other ornithological

monographs from the same period, John Gould's sketches, the process of making monographs and lithography by layout drawing, Gould's specimens, and a phylogenetic tree mandala showing the evolution of birds with Gould's illustrations (made by Dr. Masami Hasegawa, invited researcher of YIO) allowing visitors to enjoy the artistic and scientific appeal of Gould's monographs from various perspectives.

The number of visitors was 1,291 at the Ikebukuro venue (October 5-13, 2019, Tokyo Metropolitan Theatre, Gallery 1) and 2,967 at the Tamagawa Univ. venue (October 28-February 2, 2020, Tamagawa University Museum of Education). The YIO provided three monographs and six specimens for this exhibition. In addition, the symposium "19 seiki no John Gould chorui zufu kara nani ga wakaru noka (What can we learn now from John Gould's ornithological monographs in the 19th century?)" was held at the Tokyo Metropolitan Theatre on October 8, 2019, with a keynote speech by Mr. Hiroshi Aramata (writer, natural historian, and director of the Kyoto International Manga Museum), and a panel discussion by Mr. Aramata, Ms. Sayako Kuroda (a fellow of YIO), and Dr. Takuji Okuno (Director General of YIO) with 91 people attending.

(Excerpt from September 2019 and May 2020 issues of Yamashina Choken News)

●ナスカの地上絵の鳥の種を同定

山崎剛史自然誌研究室長が加わった、北海道大学総合博物館の江田真毅准教授らの研究グループは、ナスカの地上絵に描かれた鳥を鳥類学の観点から同定し、ナスカ周辺に生息しない鳥が描かれていることなどを発見し、論文発表しました。ナスカの地上絵はペルー南部の海岸から内陸に50キロメートルの砂漠台地の地上に描かれた巨大な絵で、直線、幾何学図形、動植物の図像が2,000点以上あります。制作目的やモチーフについてはよくわかっていません。これらの鳥類の地上絵はこれまで、図像の全体的な印象や、ごく少数の形態的な特徴を根拠に同定されてきましたが、研究グループは各図像の形態的特徴を可能なかぎり抽出し、現在ペルーに生息する鳥の形態的特徴と比較して、いっそう厳密に同定しました。その結果、16点の中から、ペリカン類2点と、カギハシハチドリ類1点が確認されました。研究グループは今後、同じ時代の土器に描かれた図像や、遺跡から出土する鳥類遺体などを調査して、その結果を比較・統合することで、制作の目的などの謎に迫ることができると期待しています。

(山階鳥研 NEWS 2019年11月号より)



カギハシハチドリ亜科と同定された地上絵 (左: 航空写真、右: 描き起し) (山階鳥研 NEWS 2019年11月号より)

Identification of bird species in the Nazca Geoglyphs

A research group led by Dr. Masaki Eda (Associate Professor, Hokkaido University Museum), joined by Dr. Takeshi Yamasaki (Chief of Division of Natural History, YIO) identified the birds depicted in the Nazca Geoglyphs from an ornithological point of view and discovered that birds depicted do not distribute in the vicinity of Nazca. They have published a scientific paper on their findings. The Nazca Geoglyphs are huge drawings on a desert plateau 50 kilometers inland from the coast of southern Peru, and there are more than 2,000 drawings of linear lines, geometric shapes, and iconography of flora and fauna. The purpose and motifs of their creation are not well known. While the geoglyphs of these birds have previously been identified on the basis of overall impressions and a small number of morphological features, the research group extracted as many morphological features of each image as possible and compared them to the morphological features of the birds presently found in Peru to identify them more closely.

As the result, they identified two pelicans and one hook-billed hummingbirds among the 16 images. The research group hopes to investigate pottery from the same period and bird remains excavated from the site and compare and integrate the results to get closer to revealing the mystery of Nazca Geoglyphs.

(Excerpt from November 2019 issue of Yamashina Choken News)

● 日本で繁殖する海鳥類 10 種の長期的な個体数変化を解明

保全研究室の富田直樹研究員と佐藤文男研究員（現・フェロー）は、北海道大学大学院の先崎理之助教や綿貫豊教授らと共同で、日本で繁殖する海鳥10種類の過去36年間の個体数変化を解析し、ウミガラスやエトピリカといった絶滅危惧種だけでなく、ウミネコやオオセグロカモメといった国内に広く分布し個体数が多いと思われていた種類も長期的に減少していることを明らかにしました。海鳥の個体数は世界で長期的に減少し続けており、日本で繁殖している海鳥40種についても半数以上の22種類が環境省レッドリストの絶滅危惧種に指定されています。しかし、日本産の海鳥類の個体数が長期的にどのように変化してきたかは詳しく分かっていませんでした。発表された成果は、論文、Senzaki, M. et al. (2019) Long-term declines in common breeding seabirds in Japan.として、Bird Conservation Internationalに2019年8月28日付でオンライン公開され、同年9月2日付けで、北海道大学と山階鳥類研究所の同時発表で報道発表されました。これらの結果は、絶滅危惧種だけでなく、広域分布種の保全の在り方を議論する必要性があることを示しています。

(山階鳥研NEWS 2020年1月号より)



今回の分析で長期的な減少が認められた4種（ウミガラス（左上）、エトピリカ（右上）、ウミネコ（左下）、オオセグロカモメ（右下））（山階鳥研NEWS 2020年1月号より）

Elucidation of long-term population changes in 10 breeding seabird species in Japan

Dr. Naoki Tomita (researcher of Division of Avian Conservation of YIO) and Mr. Fumio Sato (currently a fellow of YIO), in collaboration with Assistant Professor Dr. Masayuki Senzaki and Professor Dr. Yutaka Watanuki (Graduate School of Hokkaido University), have analyzed the population changes of 10 species of seabirds breeding in Japan over the past 36 years. The study revealed that not only endangered species such as the Common Murre and the Tufted Puffin, but also species such as the Black-tailed Gull and the Slaty-backed Gull which are generally considered as widely distributed and abundant in Japan, are in long-term decline. Seabird populations as a whole are in long-term decline around the world, and of the 40 seabird species that breed in Japan, more than half (22 species) are listed as endangered by the Red List of the Ministry of the Environment. However, the long-term changes in Japanese seabird populations have not been well understood. The results were published online as a scientific paper in Bird Conservation International on 28 August 2019, (Senzaki, M. et al. 2019. Long-Term declines in common breeding seabirds in Japan). The study was later sent out as a joint press release on September 2 by Hokkaido University and the YIO. The results of this study indicate that there is an urgent need to discuss the way of conservation for not only endangered species but also widely distributed species. (Excerpt from January 2020 issue of Yamashina Choken News)

●鳥類標識調査に関するシンポジウムを共催

日本鳥類標識協会の全国大会が、山階鳥研との共催で、2019年12月14・15日の両日開催され、それにあわせて、14日に公開シンポジウム「バンディングでわかること～鳥類標識調査の成果と未来」が開催されました。シンポジウムでは、環境省生物多様性センターの職員の方々等のほか、山階鳥研からは尾崎清明副所長、保全研究室の仲村昇研究員が講演を行いました。このシンポジウムは、日本鳥類標識協会の主催、山階鳥研と我孫子市鳥の博物館の共催、我孫子市教育委員会、我孫子野鳥を守る会、環境省生物多様性センターの後援で開催されました。

(山階鳥研 NEWS 2020年3月号より)



シンポジウムの様子 (山階鳥研 NEWS 2020年3月号より)

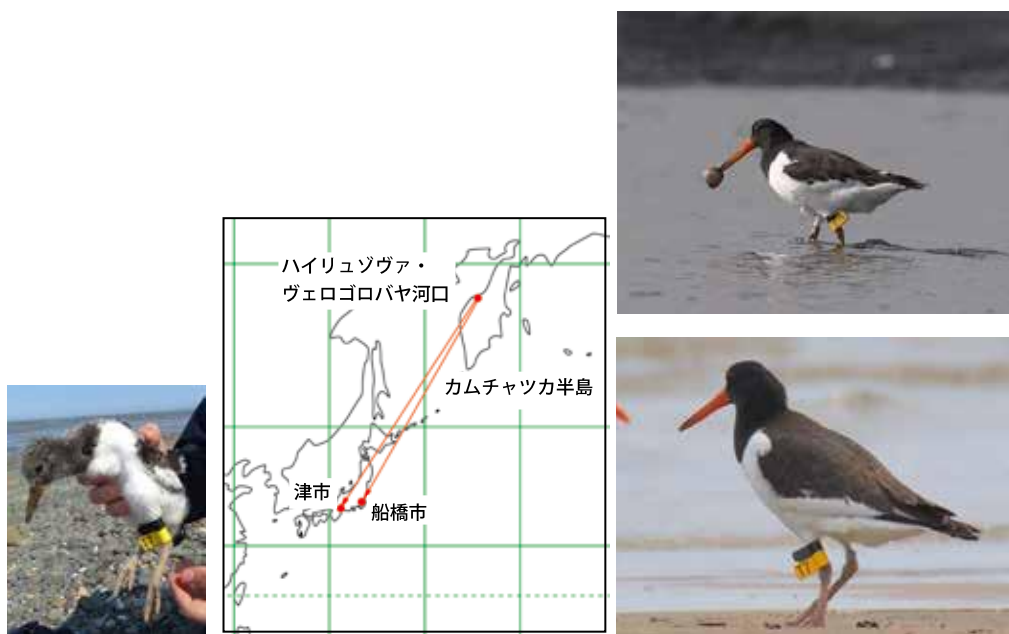
Co-organized a symposium on bird banding surveys

The annual meeting of the Japanese Bird Banding Association was held on December 14-15, 2019, co-organized by the YIO, and the public symposium "Banding de wakaruru koto~chorui hyoshiki chosa no seika to mirai (What the banding studies tell us - achievements and the future of bird banding survey)" was held on December 14. In the symposium, in addition to the staff members of Biodiversity Center of Japan,

Ministry of the Environment and others, Dr. Kiyooki Ozaki (deputy director General, YIO) and Mr. Noboru Nakamura (researcher of Division of Avian Conservation, YIO) gave lectures. The symposium was organized by the Japan Bird banding Association, co-organized by the YIO and the Abiko City Museum of Birds, and supported by the Abiko City Board of Education, the Abiko Wild Bird Society, and the Biodiversity Center of Japan, the Ministry of the Environment.
(Excerpt from March 2020 issue of Yamashina Choken News)

●カムチャツカ半島で繁殖したミヤコドリが日本に渡来

2019年秋に千葉県と三重県で、刻印付きのカラーフラッグを装着したミヤコドリが観察・撮影され、いずれも2019年7月にカムチャツカ半島西部で孵化した個体であることがわかりました。日本に渡来するミヤコドリの繁殖地や渡りのルートはこれまで不明であり、今回、カラーフラッグ等を装着された場所が繁殖地と判断できることから、今回の観察によって、日本に渡来するミヤコドリの繁殖地の一カ所が明らかになりました。この成果は、2019年12月19日付けで、環境省自然環境局と山階鳥類研究所の同時発表で報道発表されました。
(山階鳥研 NEWS 2020年3月号より)



(左) 刻印 T7 の黄色のフラッグを装着した直後のようす (2019年7月15日ロシア・カムチャツカ半島ハイリュゾヴァ・ヴェロゴロバヤ河口、ドミートリー・ドロフェーエフ氏提供)、(中) 今回のミヤコドリの足環装着場所と渡来地、(右上) 黄色のフラッグ、刻印 T6 の個体 (千葉県船橋市三番瀬干潟、2019年11月13日、伊東紘氏撮影)、(右下) 黄色のフラッグ、刻印 T7 の個体 (三重県津市安濃川河口、2019年9月27日、Katsuta K.氏撮影) (山階鳥研 NEWS 2020年3月号より)

Oystercatchers breeding on the Kamchatka Peninsula come to Japan

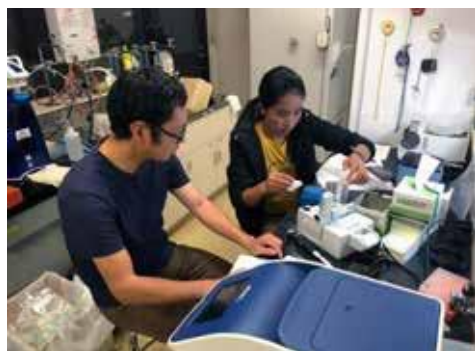
Eurasian Oystercatchers with engraved coloured flags were observed and photographed in Chiba and Mie prefectures in the autumn of 2019. Both individuals were later found to have hatched in the western Kamchatka Peninsula in July 2019. The breeding sites and migration routes of Eurasian Oystercatchers coming to Japan have been largely unknown to date, but these observations have revealed one of the breeding sites of the oystercatchers that migrate to Japan. The results were published in a joint press release on December 19, 2019, by the Nature Conservation Bureau of the Ministry of the Environment and the YIO.

(Excerpt from March 2020 issue of Yamashina Choken News)

●ミャンマー人研究者が来日し実習

ミャンマーの動物学研究者が2019年10月に来所し、山階鳥研で実習を行いました。来日したのは、ヤンゴン大学（ミャンマー）動物学科のビア・クン・エー（Biak Khun Aye）助講師で、博士課程に進みながら大学で働いている若手研究者です。10月19日から29日の11日間、日本に滞在しました。まず、新潟県豊栄市の福島潟の調査地で鳥類標識調査の研修を受け、滞在の後半は山階鳥研で、DNA実験の実技講習を受けました。この実習は山階武彦助成事業の助成を得て実施され、実施にあたっては齋藤武馬研究員が中心になって対応しました。

（山階鳥研 NEWS 2020年5月号より）



DNA 実験を行うビア・クン・エー助講師（右）と齋藤研究員（山階鳥研 NEWS 2020年5月号より）

Myanmar researchers visit Japan for practical training

A young zoology researcher from Myanmar, Biak Khun Aye, an assistant lecturer in the Department of Zoology at the University of Yangon, pursuing her PhD, visited Japan for 11 days from October 19 to 29, 2019. First, she received training in bird banding at the Fukushima-gata Banding Station in Toyosaka City, Niigata Prefecture, and in the latter half of her stay, she underwent a practical training of DNA experiments at the YIO. These trainings were supported by the Takehiko Yamashina Grant Program, and Dr. Takema Saitoh (researcher of Division of Natural History, YIO) played a central role in supporting her stay and trainings.

(Excerpt from May 2020 issue of Yamashina Choken News)

Ⅲ 事業内容

Ⅲ-1. 事業活動要約

【公益目的事業】

I 一般会計による事業	研究責任者／担当者
1 アホウドリの人為的コロニー計画に関する研究（継続）	富田直樹
2 皇居調査－吹上御苑を中心とした皇居内鳥類相を明らかにする	浅井芝樹、小林さやか、 岩見恭子、齋藤武馬、 黒田清子
3 普及・広報事業 (1) PR誌刊行事業 (2) 講習会事業 (3) 顕彰事業	平岡 考
4 山階武彦助成事業（対象7名）	事務局
II 文部科学省科学研究費補助金（特定奨励費）による研究事業	研究責任者
事業名：日本最大の鳥類関連資料の維持管理・拡充・公開に関する研究事業 0 班：総括 1 班：資料の維持管理 2 班：資料の拡充 3 班：情報公開とネットワーク構築	0 班：奥野卓司（所長） 1 班：鶴見みや古 2 班：山崎剛史 3 班：平岡 考
III 科学研究費補助金（除 特定奨励費）による研究事業	研究代表者／分担者
1 「島の鳥の適応放散はなぜ起きるか－数理モデルと幾何学的形態測定学によるアプローチ」－基盤研究C	代表者 山崎 剛史
2 「構造色由来の色彩個体差の発生機構～性選択における構造色の意味を探る～」－基盤研究C	代表者 森本元
3 「電柱鳥類学：電柱・電線を介した都市における人と鳥との共生関係の実態解明」－基盤研究B、分担事業「野外調査、行動解析」	代表者 三上 修（北海道大学准教授） 分担者 森本 元
4 「河川の砂礫地減少の影響を受ける鳥類の渡り経路、越冬地および重要な中継地の解明」－基盤研究C、分担事業「野外調査での追跡装置装着」	代表者 笠原里恵（弘前大学農学生命科学部研究機関研究員） 分担者 森本 元
5 「高山帯ガレ場に生息するヒバリ個体群の生活史適応と遺伝構造の解明」－基盤研究C、分担事業「野外調査」	代表者 上田恵介（立教大学名誉教授） 分担者 森本 元
6 「微細構造を活用した生物のやわらかい飛翔と遊泳の原理解明と実装（略称：ソフトロボット学）」－新学術領域、分担事業「鳥類標本の形態計測と比較生物学的解析」	代表者 田中博人（東京工業大学准教授） 分担者 山崎剛史
IV 民間助成金による研究事業	研究責任者
1 嵐山通船 「鵜飼に関する比較文化誌的研究(2022年まで)」	奥野卓司（所長）
2 経団連自然保護基金 「絶滅危惧種アホウドリの2集団の保全単位の再検討」	富田直樹
3 公益信託サントリー世界愛鳥基金 活動助成 「琉球諸島のアジサシ類の保全」	尾崎清明
V 保全研究室 受託・請負事業	責任者
受託事業3件（環境省1件、東京都1件、国立大学法人1件）、 請負事業10件（環境省関連8件、国立大学法人1件、民間1件）、 合計13件（詳細別紙）	水田拓（保全研究室長）
【収益事業】	
不動産賃貸事業（東京都渋谷区南平台町に所有するマンション3室の賃貸）	事務局

Ⅲ-2. 事業活動概要

【公益目的事業】

I. 一般会計による事業

1. アホウドリの人為的コロニー計画に関する研究（継続）

責任者 富田直樹研究員

（注：通信機器不使用状態のため、一般会計を原資とする通信費はゼロであった。以下に報告する活動はアホウドリの新コロニー調査を伊豆諸島鳥島において、令和2（2020）年2月から3月に17日間行った。定点観察の結果、アホウドリの雛359羽（2019年2月：285羽）が確認された。この結果、今年度の鳥島総雛数は770羽（前年度：732羽）で前年度比5.2%（前年度：3.4%）の増加となった。新コロニーではアホウドリの同時着地数が779羽（前年度：639羽）を記録した。また、新コロニーの内部及び外縁部におけるアホウドリの飛翔障害となるハチジョウグワを伐採した。これらの結果から、アホウドリの鳥島推定個体群は概ね6,200羽となり、順調に増加していることが確認された。また、新コロニーにおいてアホウドリの次回繁殖期の飛来状況や抱卵状況をモニタリングするため、自動撮影カメラ12台を設置した。

2. 皇居調査 — 吹上御苑を中心とした皇居内鳥類相を明らかにする

担当者：齋藤武馬、黒田清子（フェロー）、小林さやか、浅井芝樹、岩見恭子

事業費 220 千円

皇居内の鳥類相を調べるため、4/9、5/7、6/4、7/2、8/6、9/3、10/1、11/5、12/10、1/14、2/4、3/3を調査日として、9:00 から 12:00 の間に約 4.3km のコースを 3 人の調査員で歩き、確認された鳥種を個体数とともに記録した。

同様の目的で、例年は5月と10月の二回、標識調査を行っているが、2019年は、天候の都合で両方とも実施することができなかった。

3. 普及・広報事業 責任者 平岡 考（広報コミュニケーションディレクター） 事業費総額 5,771 千円

（1）PR 誌刊行事業 事業費 4,817 千円

（1-1）PR 誌

広報紙「山階鳥研 NEWS」を5、7、9、11、1、3月に刊行し、各号3,500部印刷した。NEWSの内容については、ウェブサイト「刊行物」に目次を掲載している。

（1-2）ウェブサイト

ウェブサイトについて、平成31年度は、随時行った「イベント情報」の更新と結果報告、論文の発行や人事異動に伴うお知らせ、事業案内、助成事業、山階芳曆賞関連の更新を行った。また、「山階鳥研 NEWS」

から

- ・ バードウォッチングでも増加を実感！ アホウドリ 新たな保全へ
 - ・ 鳥の死体は語る ～ハシボソガラス連続死の謎～
 - ・ 北海道大学の鳥類標本と山階鳥研
 - ・ 出口智広・前保全研究室長による「山階鳥研での研究活動と今後の抱負について」
 - ・ 北條前事務局長による「退任のごあいさつ」
 - ・ 日本にたどり着いたジョン・グールドの鳥類標本
 - ・ ナスカの地上絵の鳥を鳥類学の観点から初めて同定
 - ・ 年頭挨拶
 - ・ 日本で繁殖する海鳥類 10 種の長期的な個体数変化を初めて解明
 - ・ 海鳥が食べていたプラスチック片から添加剤 体内蓄積の実態が明らかに
 - ・ 水田新保全研究室長による「忙しき」と「後ろめたさ」を振り払うために」
 - ・ カムチャツカ半島で繁殖したミヤコドリ 日本に渡来 カラーフラッグにより初めて判明
- などの記事をピックアップして掲載した。

(1-3) ブログ、SNS

「山階鳥研 広報ブログ」では、1年で 27 件の情報発信を行った。2015 年秋に開始した SNS サービスの Facebook、Twitter は引き続き発信を行い、Facebook では 39 の国と地域から 2,100 人を超えるファンを、Twitter では 2,500 人を越えるフォロワーを獲得した。

(1-4) 報道発表

下記 4 件のリリースを行った。

8 月 19 日 海鳥が食べたプラスチック片から添加剤を検出（東京農工大学と共同）

9 月 2 日 日本で繁殖する主要海鳥種の個体数変化を初めて解明（北海道大学と共同）

12 月 19 日 カムチャツカ半島で繁殖したミヤコドリが日本に渡来したことがカラーフラッグの調査により初めて判明

3 月 6 日 日本の河川で繁殖する渡り鳥コチドリの渡り時期と越冬期の利用環境は水田だったことが判明（信州大学・東京都市大学・弘前大学と共同）

(2) 講習会事業 事業費 535 千円

(2-1) 所内見学会

所内見学会は、講堂で約 1 時間、スライドと口頭説明で山階鳥類研究所について紹介するもので、原則として第 4 金曜日の午前と午後に行っている。さらに、おもに環境保全や生物学関係の団体や学校教科の一環としての学生生徒の見学希望について、第 4 金曜日以外であっても日程その他の調整がつく範囲で限定的に対応している。これらの見学を平成 31 年度は合計 10 回行い、合計 51 名の参加者があった。個人のほか、団体として春日部市いきがい大学いきがい専科その他の参加があった。なお、2 月 28 日、3 月 27 日については新型コロナウイルス感染症予防の観点から中止として、ウェブサイトにもその旨表示した。

(2-2) ジャパン・バード・フェスティバル

ジャパン・バード・フェスティバルは我孫子市、日本鳥類保護連盟、山階鳥類研究所、市民団体等で構成する実行委員会が我孫子市内を会場に実施するイベントである。

平成 31 年度は 11 月 2 日～3 日に実施した。山階鳥類研究所では、30 分ごと 40 名の総入れ替え制により、講堂で研究員が研究紹介をする「山階鳥研 見にレクチャー11」を実施した。11 タイトル、22 講演。2 日間でのべ 769 名の入場者があった。

鳥学講座は、山階鳥類研究所と我孫子市鳥の博物館の共催により、鳥類学の第一線で活躍する研究者が分かりやすく研究を紹介するものである。ジャパン・バード・フェスティバル会期中の 11 月 2 日（土）に、アビスタ（我孫子市生涯学習センター）で今回の講座は、「島の鳥類学—南西諸島の鳥をめぐる自然史—」と題し、北海道大学教授の高木昌興氏・水田保全室長による二つの講演のあと、尾崎副所長を交えた質疑応答とディスカッションを行った。多数の入場者が予想されることから、1 階ホール本会場にくわえて液晶テレビによる講演の同時上映を行う会場を 2 階に準備した。これらに合わせて 172 名の入場者があった。

(2-3) 鳥の博物館におけるテーマトーク

山階鳥類研究所職員が研究の成果などについて約 30 分のレクチャーでわかりやすく紹介する「テーマトーク」を、毎月 1 回（第 2 土曜日）我孫子市鳥の博物館との共催で、同博物館を会場に実施し、入場者数は 9 回でのべ 312 名だった。（今年度から、我孫子市鳥の博物館の学芸員もテーマトークの演者となる）タイトル、日付と演者は次のとおり。※3 月のテーマトークは新型コロナウイルス拡散防止のため中止。

- ・ フラッグ付きシギ・チドリの観察記録 ～窓口担当者のよもやま話～（4 月 20 日 千田万里子）
- ・ 日本に渡って来るハマシギの亜種はどれ？（5 月 18 日 茂田良光）
- ・ 万国共通な学名が図鑑によって違うわけ～キジやコウノトリはどうなってる？（6 月 15 日 平岡 考）
- ・ 渡り鳥のふしぎ：春と秋で違うルートを使う種類がいるのはなぜ??（7 月 20 日 仲村 昇）
- ・ 鳥類標本の作り方—いろんな標本を作ってみよう—（8 月 17 日 岩見恭子）
- ・ 我孫子駅前におけるイソヒヨドリの繁殖調査（10 月 19 日 岩本二郎）
- ・ 実は日本のカモメ類が減っています（12 月 21 日 富田直樹）
- ・ 絶滅寸前？オガサワラカワラヒワの特徴とその保全（1 月 18 日 齋藤武馬）
- ・ 鳥の色彩と構造色（2 月 15 日 森本元）

(2-4) 問合せ対応

山階鳥類研究所では、一般、行政、警察、マスメディア等から電話、電子メール、郵送等で多数の問い合わせを受ける。平成 31 年度は、一旦受けた後に別の部署に回したものも含め、542 件の問い合わせに対応した。これは所内の別の部署で直接受けた問い合わせ件数を含まない。

平成31(令和元)年度広報対応質問内訳(分野別、科別、質問者別、通信手段別)

	件数	百分率
分野		
生態	197	36%
識別同定	176	32%
救護/保護、	31	6%
形態・構造・体色・器官	24	4%
鳥害	12	2%
標識	11	2%
学名・英名・和名	8	1%
生理	6	1%
飼育	5	1%
鳥の生物学一般	3	1%
保全	3	1%
分類	3	1%
鑑定	2	0%
名称・文化・歴史・伝説(伝承)	2	0%
監修	2	0%
標本	2	0%
放射線	0	0%
鳥インフルエンザ	0	0%
(その他) ※1	55	10%
合計	542	100%
対象分類群(科)		
カモ	53	10%
ヒタキ	31	6%
タカ	30	6%
ハト	23	4%
ツバメ	23	4%
カモメ	23	4%
キジ	18	3%
カラス	15	3%
鳥類全般/鳥一般	14	3%
ホオジロ	12	2%
アホウドリ	11	2%
スズメ	10	2%
フクロウ	10	2%
シギ	9	2%
キツツキ	8	1%
コウノトリ	8	1%
ミズナギドリ	8	1%
ハヤブサ	7	1%
チドリ	7	1%
ウ	7	1%
地域の鳥	6	1%
クイナ	6	1%
アトリ	6	1%
セキレイ	6	1%
カワセミ	6	1%
シジュウカラ	5	1%
ヒヨドリ	5	1%
インコ	5	1%
ツル	4	1%
カッコウ	3	1%
モズ	3	1%
ムクドリ	3	1%
ヒバリ	3	1%
ペンギン	3	1%
トキ	3	1%
メジロ	2	0%
渡り鳥(全般)	2	0%
フラミンゴ	2	0%
海鳥全般	2	0%
ムシクイ	2	0%
ダチョウ	2	0%
チメドリ	2	0%
ヤツガシラ	2	0%
カイツブリ	2	0%
サギ	1	0%
エナガ	1	0%
アメリカムシクイ	1	0%
ウミツバメ	1	0%
ウグイス	0	0%
カササギヒタキ	0	0%
その他	126	23%
合計	542	100%
質問者		
個人	319	59%
報道出版関係(内NHK関係 60件)	159	29%
一般事業会社、諸団体	39	7%
官公庁・警察	19	4%
教育関係(学校、博物館、動物園など)	6	1%
合計	542	100%
通信手段		
電話	293	54%
e-mail/FAX	235	43%
手紙・葉書	6	1%
来所面談	5	1%
Facebook, Twitter	3	1%
合計	542	100%

(3) 顕彰事業 事業費 420 千円

山階芳麿賞は、我が国の鳥学研究の発展と鳥類の保護活動に寄与された個人あるいは団体を顕彰する目的で設けられた賞で、現在は隔年に贈呈している。自薦または他薦による公募と選考委員会内部からの推薦との両方から受賞者を決定する。応募締切を令和元年 11 月 30 日とした応募要領をウェブサイトに掲載し、「山階鳥研ニュース」においては、9 月号で予告し、11 月号で改めて告知した。共催の朝日新聞紙上でも告知が掲載された。公募からの応募者がなかったため、選考委員会内部からの推薦をもとに、2020 年 1 月 9 日と 3 月 12 日に選考委員会を開催し、その結果、第 21 回山階芳麿賞を渡辺茂慶應義塾大学名誉教授に贈呈することを決定した。

4. 山階武彦助成事業 (事務局) 事業費 1,917 千円

7 名に対し合計 1,998 千円の助成を行った。昭和 59 年度～平成 31 年度累計で 162 人に対し総額 55,527 千円の助成を行ったことになる。なお、公益という観点から、平成 24 年度の申請分（平成 25 年度実施分）からは助成対象者を外部（山階の所員ではない）者に限定している。平成 31 年度助成対象者 7 名の氏名、所属、出席した会議等の名称、開催地、助成金額を以下の表にまとめる。

助成対象者	所属機関及び職位	会議等名称・開催地・目的	助成金額 (千円)
小田谷 嘉弥	我孫子市鳥の博物館 主任学芸員	チュウジンギの分類学的研究 のための標本調査と 分類学的研究 ロシア ウラジオストク ロシア モスクワ	250
シンシア アデリーン Cynthia Adeline A.	ISLA Biodiversity Conservation Inc. Program Director	ヤンバルクイナとカラヤンク イナの保全に関する情報交換 会 日本 沖縄県国頭郡 無飛翔性鳥類カラヤンクイナ の保全について	300
植村 慎吾	北海道大学大学院理 学院 多様性生物専攻博士 課程	2nd R&D Congress on East Asian-Australasian Flyway for Wetlands and Migratory Birds フィリピン バコロド市 GPS データロガーを使った ローブ林) での生態について 調査と捕獲を行う	298

		越冬地（フィリピン国内小島 嶼マングローブ林）での生態 について調査と捕獲を行う	
水野 米利子	東京農業大学大学院 生物産業学研究科 博士後期課程	The Society for Marine Mammalogy. 2nd World Marine Mammal Science Conference. スペイン バルセロナ 日本産ハーバーシールの繁殖 集団の遺伝的多様性および分 集団について発表する	300
キンレイ テンジン Kinley TENZIN	ブータン王国自然保 護学士院 Executive Director	ブータン王国における絶滅危 惧鳥類シロヘラサギ保全手法 研修 日本 茨城県つくば市 日本国内で鳥類独自のマイク ロサテライト遺伝子解析の手 法討議とトキの保護の方法を 修得する	300
吉川 翠	国立科学博物館 動物研究部鳥類研究 室 技術補佐員	アッサムモンキーの生息環境 と社会の基礎的研究 タイ王国 ピッサクロヌ県 アッサムモンキーの生息環境 と社会の基礎的研究	250
ビキ ユン エー Biak Khun Aye	ヤンゴン大学理学修 士 助講師	鳥類標識調査の技術研修 日本 新潟県福島潟 ミャンマーでは鳥類標識事業 がないので、鳥類の捕獲技術 を学ぶ機会がない。 日本で捕獲技術と標識調査の 概要を学び、自国の鳥学発展 に役立てるために研修が必要 である	300

なお、H31 年度助成対象の次の 3 名から余剰金の入金があった。

水野米利子氏 金 14,491 円、Kinley TENZIN (キンレイ テンジン) 氏 金 23,839 円、

Biak Khun Aye (ビキ ムン エー) 氏 金 42,685 円

その結果本年度の支出は 1,916,985 円となった。

I I. 文部科学省科学研究費補助金（特定奨励費）による研究事業

研究事業名：日本最大の鳥学関連資料の維持管理・拡充・公開に関する研究事業

（採択年度 平成 30～令和 2 年度 3 年間 各年度事業費 56,000 千円）

目 的：

当研究所には、鳥学とその関連分野の発展を支える基盤として、国内はもとより世界的にも第一級の重要性を持つ資料が保管されている。このため当研究所はこの分野を専門とする日本人研究者、東アジア・太平洋地域の鳥類に興味を持つ外国人研究者にとって、欠くことのできない研究の拠点となっている。しかし、当研究所が保有する資料の中には、例えば剥製標本のように、適切な管理を怠れば、昆虫による食害やカビの発生等によって、その価値がすぐに失われてしまうものが多数含まれている。そこで次の目的を設定する。

- ① 維持管理のための適切な処置を資料に施し、それを時代に受け継ぐ。
- ② 資料群の拡充に注力する。人間の活動の影響を受け、鳥類の世界が急速に変わりつつある現代の資料を収集し、次代に託すことは、資料の作成と長期保管のノウハウを持つ当研究所が果たすべき責務である。
- ③ 当研究所が保有する資料の一層の活用の促進、当研究所が蓄積してきた知識・技術の社会への還元を企図し、情報公開とネットワーク構築に取り組む。

実施体制：

- (0) 総括班 責任者 奥野卓司（所長）
- (1) 資料の維持管理班 責任者 鶴見みや古（コレクションディレクター）
- (2) 資料の拡充班 責任者 山崎剛史（自然誌研究室室長）
- (3) 情報公開とネットワーク構築班 平岡考（広報コミュニケーションディレクター）

令和元年度実施状況：

(0) 総括班

令和元年度意見交換会の開催

開催日：令和元年 10 月 3 日（木）

開催場所：東京大学農学部フードサイエンス棟

出席者：特任研究員、総括班メンバー、客員研究員、フェロー、外部有識者、総裁、職員等

令和元年度研究成果発表会の開催

開催日：令和 2 年 1 月 27 日（月）

開催場所：六本木ヒルズアカデミー49F カンファレンス 7

出席者：公官庁幹部、総括班メンバー、特任研究員、客員研究員、フェロー、総裁、顧問、理事・監事、評議員、職員等

(1) 資料の維持管理班

資料の保守：標本庫・書庫の温湿度を一定に保ち、清掃を定期的実施した。庫内およびその周辺での害虫の出現状況をモニタリングした。薬剤による庫内燻蒸を実施した。劣化・破損資料（図書資料 99 点）の修復を実施した。

資料の整理：標本 1,258 点、組織サンプル 687 点、図書資料 1,211 点について、管理番号の付与、管理に必要な情報のデジタル化、資料の状態を記録した写真の撮影（標本と一部図書資料のみ）を実施した。既存資料との重複品の整理（図書資料のみ）を行った。

利用者対応：標本・図書資料の閲覧者数はのべ 219 人であった。博物館等 6 館に展示素材として標本 966 点を貸し出した（うち 953 点は前年度から継続）。博物館 6 館、図書館 1 館、出版社 1 社、テレビ局 1 社に対し、177 点の写真・映像資料を提供した。文献複写依頼 13 件 25 文献を受け付けた。組織サンプルについては 6 件の提供を行った。

(2) 資料の拡充班

資料の拡充：1,313 点の標本、687 点の組織サンプル、845 点の図書資料を新たに入手した。

データの拡充：150 点の X 線 CT 画像、96 点の電子顕微鏡画像、100 点の紫外線画像、70 点の DNA バーコードデータを作成した。

(3) 情報公開とネットワーク構築班

インターネットによる情報公開：

- ・ウェブサイト『標本データベース』を運営した。平成 31 年度の閲覧者数はのべ 996,976 人であった。同サイトに 352 点の標本データを追加した。
- ・ウェブページ『組織サンプルの利用』に現在の組織サンプルの在庫状況を示すエクセルファイルをアップロードした。
- ・ウェブサイト『蔵書検索システム』を運営した。平成 31 年度の閲覧者数はのべ 174 人であった。同サイトに 1,217 点の書誌情報を追加した。
- ・150 点の X 線 CT 画像、96 点の電子顕微鏡画像、100 点の紫外線画像を『標本データベース』に追加した。

その他の情報公開：

- ・『山階鳥類学雑誌』の第 51 巻 1 号、2 号を発行した。J-Stage に公開した PDF の今年度閲覧者数は 17,012 人であった。
- ・毎週月曜日、水曜日、金曜日に専任のスタッフ（ボランティアスタッフ）を置き、一般からの質問（電話および E メール）に答えた。
- ・鳥学を一般向けにやさしく解説するセミナーを、我孫子市鳥の博物館（千葉県）にて年 8 回開催した。のべ 248 人が参加した。また、2019 年 11 月 2 日から 3 日にかけて、当研究所のある千葉県我孫子市にて開催されたジャパンボードフェスティバルのイベントの一つとして、当研究所敷地内にて同様のセミナーを 22 回行った。のべ 769 人が参加した。

- ・野外調査講習会を当研究所（11月21日、12名参加）にて開催した。野外調査実習は、陸鳥を対象とするものを福島県にて5月から8月にかけて6回開催し、のべ17人が受講した。海鳥を対象とした野外調査実習は、青森県にて5月から6月にかけて2回開催し、のべ7人が受講した。
- ・標本作製講習会を福井市自然史博物館（11月10日、10名参加）、当研究所（12月13日、2名参加）にて開催した。
- ・新和名の整備について、山崎剛史・亀谷辰朗『鳥類の目と科の新しい和名（2）鳴禽類』の原稿を『山階鳥類学雑誌』に投稿した。

ネットワーク構築：

- ・我孫子市鳥の博物館が保有する標本851点について標本とラベルの写真を撮影した。データの整形作業を進め、コンソーシアムデータベースのデザインについて検討した。

I I I . 科学研究費補助金（除 特定奨励費）による研究事業

1 「島の鳥の適応放散はなぜ起きるか—数理モデルと幾何学的形態測定学によるアプローチ」

- ・基盤研究 C（基金）H30～R2
- ・代表者：山崎剛史 自然誌研究室室長
- ・平成31年度 直接経費：167,358円

本研究は、高度な海上分散力を持つはずの鳥類が小群島内で適応放散を起こすのはなぜかを問うている。令和元年度には、島嶼域によく侵出しているが、くちばし形態の多様化をあまり示さないクイナ科鳥類の頭骨についてX線CTデータの作成を進めた。くちばし形態の進化に強い制約がかかり、多様化が阻止されている可能性を、令和2年度中に幾何学的形態測定学の手法を用いて検討する予定である。

また、令和元年度中には、海上分散力が遺伝的要因によってコントロールされている数理モデルを作成し、島間に分岐自然選択が働いているとすると、速やかに島間の移動が失われ、各島に固有の発端種が生み出されることを確認した。さらに、非常に興味深いことに、このモデルのもとでは、連続する2回の種分化のタイムラグが頻繁にゼロになることが確認された。種分化はこれまでふつう二分岐的に起きると信じられてきたが、3つ以上の種が同時に誕生する多分岐の種分化も、自然界ではふつうに起きている可能性がある。これは島の適応放散において、種分化と種分化のあいだのタイムラグが短縮される理由をはじめで説明する成果である。

なお、本研究課題の研究体制は、当研究所の山崎研究員を代表者、東京大学の荻原直道教授、帝京科学大学の島田将喜准教授、東邦大学の土岐田昌和講師、高知工科大学の小林豊准教授を分担者となっている。

2 「構造色由来の色彩個体差の発生機構～性選択における構造色の意味を探る～」

- ・基盤研究 C（一般）H30～R2
- ・代表者：森本 元 保全研究室兼自然誌研究室
- ・31年度 直接経費：1,300千円

本研究課題は、当研究所の森本研究員を代表者、東京大学博物館の松原始特任准教授と長崎大学の山口典

之准教授を分担者とした研究体制で3年間（2018-2020年度）実施される。本研究は鳥類の色彩における構造色の発生機構の個体差を調べ、さらに、性選択といった動物の行動に関わる事象において、色彩という視覚信号がどのような機能を有しているかを探索する研究テーマである。構造色は様々な生物で見られる発色様式だが、鳥類の羽毛における発色機構は、鳥類ゆえの特徴を示す。代表者である森本研究員は総括、野外調査、顕微鏡解析、色彩分析を担う。研究プロジェクト2年目である今年は、野外観察によるデータの収集、およびサンプルとしての羽毛の収集、各種鳥類の構造色の情報整理と測定、特定種における羽毛微細構造の解明に重点をおいて研究を推進した。加えて、アウトリーチといった社会への情報発信も重視した。雑誌での記事および学会発表等、講演等で成果を発表した。

3 「電柱鳥類学：電柱・電線を介した都市における人と鳥との共生関係の実態解明」

- ・基盤研究 B（補助金）H29～R2
- ・代表者：三上 修 北海道教育大学 教育学部准教授
- ・分担者：森本 元 保全研究室研究員
- ・分担事業：野外調査、行動解析
- ・31年度 直接経費：50千円

本研究課題は、北海道教育大の三上修准教授を代表者、石川県立大の上野裕介准教授と山階鳥研の森本元研究員を分担者とした研究体制で4年間（2017-2020年度）実施される。本研究は電柱・電線の存在が、鳥類多様性に影響する良い面・悪い面を総合的に評価する研究課題である。日本の全国のあらゆる都市に見られる、電柱・電線は、どの都市にも必ず存在する主要な構成要素の一つである。このような環境を、鳥類は巧みに利用しており、さえずる場所・餌を探す場所・巣場所等に使用している。これは、人間が作り出した環境が野生生物へ提供され、利用されるという都市生態系が構築されているといえよう。分担者である森本研究員は、野鳥による電柱電線利用状況の、関東地方での野外調査を担うと共に、日本鳥学会において電柱・電線を利用する鳥類の構成と利用傾向を発表するなど本課題を遂行した。その成果について学会発表を実施した。

4 「河川の砂礫地減少の影響を受ける鳥類の渡り経路、越冬地および重要な中継地の解明」

- ・基盤研究 C（基金）H29～R1
- ・代表者：笠原 里恵 弘前大学 農学生命科学部 研究機関研究員
- ・分担者：森本 元 保全研究室研究員
- ・分担事業：野外調査での追跡装置装着
- ・31年度 直接経費：50千円

本研究課題は、弘前大学の笠原里恵研究員を代表者、東京都市大の北村亘准教授と山階鳥研の森本元研究員を分担者とした研究体制で3年間（2017-2019年度）実施される。本研究は、絶滅危惧種であるシロチドリ・コチドリを中心的な研究対象として、河川の砂礫地に生息するチドリ類の生息上の重要地を明らかにし、水辺環境の保全や生態系管理の提言へ繋がる研究成果を目指すものである。日本の河川の多くは、洪水対策の護岸など、人間の管理下にある。他方、護岸管理が進み、攪乱・反乱環境が減少したことにより、河川の

砂礫地の多くでは、砂や石が裸出した河川敷の樹林化が進行している。その結果、かつては普通種であったこれらの環境を利用する前述のチドリ類は、繁殖地や渡りの中継地を失う危機に瀕している。本研究は、追跡装置の装着により、こうした重要地の解明を明らかにすることを旨とする。森本研究員は分担者として、本年度は野外調査補助などを担った。現在、得られた成果が、代表者を筆頭著者、分担者を共著者とする論文として、国際誌に掲載された。この成果は、新聞等多数のメディアに報道された。

5 「高山体ガレ場に生息するヒバリ個体群の生活史適応と遺伝構造の解析」

- ・基盤研究 C (基金) H30～R2
- ・代表者：上田 恵介 立教大学「名誉教授
- ・分担者：森本 元 保全研究室研究員
- ・分担事業：野外調査での追跡装置装着
- ・31年度 直接経費：300千円

本研究課題は、立教大学の上田恵介名誉教授を代表者、北海道教育大学の三上修准教授、東京農業大学の白木彩子准教授、東海大学の松井晋講師と山階鳥研の森本元研究員を分担者とした研究体制で4年間（2018-2021年度）実施される。本研究は、里の鳥と考えられているヒバリについて、山地のガレ場に生息するという特徴的な生態を明らかにするとともに、山地における生息状況や生活史適応といった知見の蓄積、および山地におけるヒバリ集団の遺伝構造の解明を目的とした研究成果を目指すものである。森本研究員は分担者として、本年度は野外調査補助などを担った。主に富士山地域において、標高2000m近くに生息するヒバリ集団の野外調査を実施した。

6 「微細構造を活用した生物のやわらかい飛翔と遊泳の原理解明と実装」

- ・新学術領域研究 (補助金) H30～R4
- ・代表者：田中博人 東京工業大学准教授
- ・分担者：山崎剛史 自然誌研究室室長
- ・分担事業：形態学的解析
- ・平成31 (令和元) 年度 直接経費：900千円

本研究は新学術領域「ソフトロボット学の創生：機電・物質・生体情報の有機的融合」(領域代表鈴木康一東京工業大学教授)の計画研究の一つとして実施された。鳥類の高度な飛翔力、遊泳力について理解を深めるため、研究所の所蔵標本を用いた3つのケーススタディを実施した。(1) ハチドリおよびその近縁種を対象にして翼のどの部位が相対的に硬く、どの部位が相対的に柔らかいかを測定した。(2) ペンギンの体表の微細をレーザー顕微鏡で観察した。(3) フクロウの翼の前縁部にある鋸歯構造の発達を種間で比較した。(1)～(3)のいずれについても、得られたパターンを高度な飛翔力、遊泳力に関連づけ、考察した。

I V. 民間助成金による研究事業

1 嵐山通船株式会社

- ・活動名：「鶺鴒」に関する比較文化誌的研究

- ・責任者：奥野卓司 所長
- ・31 (R1) 年助成額：500 千円 (H31/1～R1/12)
- ・R2 年助成金：100 千円 (R2/1～R2/3) R2/3 で中途解約

2 年度である平成 31 年は、9/5 から 9/6 に京都嵐山にて 2019 全国鶴飼サミット嵐山大会が開催され、ここで北海道天売島でのウミウ現地撮影映像を上映し、山崎が「ウミウの生態」について学術講演を行った。その後も、国際的な視点で鶴飼文化を継続的に調査するとともに、鶴飼サミットなどでの世界で鶴飼文化の報告をしていく予定であったが、R2 年 3 月末までの業務をもって嵐山通船の都合により、中途解約となった。(R2/6/24 合意解約済)

2 経団連自然保護基金

- ・活動名：絶滅危惧種アホウドリの 2 集団の保全単位の再検討
- ・責任者：富田直樹 研究員
- ・助成額：2,730 千円 (H31/4～R2/3)

2020 年 2 月～3 月に鳥島のアホウドリ繁殖地で現地調査を行った。2019 年 2 月～3 月に、鳥島内の 3 ヶ所のアホウドリ繁殖地に設置した定点 (モニタリング) カメラを回収し、2018-2019 年繁殖期の成鳥および雛の渡去時期を示した。さらに、2019-2020 年繁殖期の成鳥の帰島時期も示し、繁殖地におけるアホウドリの飛来・着地状況や抱卵状況のモニタリングにおける定点カメラの有効性と課題を明らかにした。さらに、新規にカメラを設置し、モニタリングを継続している。これらのカメラは、2021 年 2 月～3 月に回収する予定である。

3 公益信託サントリー世界愛鳥基金 活動助成

- ・活動名：琉球諸島のアジサシ類の保全
- ・責任者：尾崎清明 副所長
- ・31 年度助成額：2,000 千円

琉球諸島の無人島で繁殖するアジサシ類 (ベニアジサシ・エリグロアジサシ：絶滅危惧Ⅱ類など) の営巣数は近年、減少傾向が著しい。マリンレジャーの活発化などによる営巣阻害が一因と推測されるが、情報不足である。また越冬地、渡り中継地に関する詳細は分かっておらず、効果的な保全ができない。そこで 31 年度は渡嘉敷村慶伊瀬島での繁殖状況調査を実施し、4 種合計で約 730 羽が確認された。また、過去にジオロケータを装着し再捕獲したデータを解析した。その結果エリグロアジサシはインドネシアのスラウェシ島や小スンダ列島、ボルネオ島などに渡っていることが判明し、論文として発表した。さらにスラウェシ島北東部のタンココ国立公園周辺の海域で、エリグロアジサシの越冬個体を観察した。これらは日本で繁殖する本種の初めての越冬地確認例であり、謎であった生態の一部が解明された。

V. 保全研究室 受託・請負事業

平成 31 (R1) 年度の受託および請負事業は以下の通りである。

	発注者	受託・請負事業等の名称	金額 (円)	備考
1	環境省 自然環境局 生物多様性センター	平成 31 年度鳥類標識調査委託業務	37,000,000	受託随意契約
2	東京都小笠原支庁	平成 31 年度アホウドリ保全調査委託	11,303,600	受託随意契約
3	国立大学法人沖縄大 学	奄美・琉球における遺産価値の高い森 林棲絶滅危惧種に対応する保全技術開 発・ヤンバルクイナの野生復帰技術開 発	4,500,000	受託 環境研究総合 推進費研究分 担
4	環境省	令和元年度シギ・チドリ類追跡業務	2,035,000	請負随意契約
5	環境省自然環境局 生物多様性センター	平成 30 年度重要生態系監視地域モニタ リング推進事業 (海鳥調査)	13,640,000	請負参加者確 認公募
6	環境省 自然環境局 生物多様性センター	令和元年度鳥類標識足環の購入	4,985,000	請負随意契約
7	環境省 自然環境局 生物多様性センター	平成 31 年度調査用具 (かすみ網) の調 達及び管理業務	198,000	請負随意契約
8	環境省 自然環境局 生物多様性センター	令和元年度調査用具 (かすみ網) の追加 調達及び保管業務	2,717,000	請負随意契約
9	関東地方環境事務所	令和元年度国内希少野生動植物種 (ア ホウドリ) 保護増殖事業	6,160,000	請負一般競争 入札
10	九州地方環境事務所 沖縄奄美自然環境事 務所	クイナ用発信機の購入	484,000	請負随意契約
11	九州地方環境事務所 沖縄奄美自然環境事 務所	令和元年度ヤンバルクイナ生息地位置 情報整理業務	440,000	請負随意契約
12	国立大学法人鳥取大 学	野鳥捕獲及び検体採取業務 (鳥取、兵 庫、岡山、千葉)	3,696,000	請負随意契約
13	株式会社総合環境計 画	北陸新幹線、中池見湿地環境調査	354,200	請負事業 (再 委託)
	合計 13 件		87,512,800	

(注) 第 13 項 環境計画は、独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構 からの再委託である

H31 (R1) 年度 事業報告 保全研究室 補足説明

保全研究室が行っている鳥類標識調査講習会（通称バンダー講習会）について：

イ) バンダーとは鳥類標識調査（バンディング）を行う調査員のことであり、バンダー講習会は、山階鳥類研究所が委託を受けて行っている環境省事業の鳥類標識調査を支えているボランティアバンダー育成のため、山階鳥類研究所が行っているものである。

ロ) 講習は2回の実技講習と1回の講義講習で構成されており、実技講習は山階鳥類研究所職員が実施する鳥類標識調査中に個人指導を受ける形で行われる。講義講習は年1回山階鳥類研究所で行われ、鳥学の基礎から捕獲方法、種や性齢の識別、データ入力、法令、海外情報など調査に必要な広範囲の講義内容である。

ハ) 今年度は実技講習として、10～11月に新潟県で6名が受講し、その内5名が12月に山階鳥類研究所で行われた講義講習に参加した。すべての講義を修了した受講生全員5名が令和2年4月から新バンダーとして活動を開始する。

ニ) さらに今年度から、すでに活動しているベテランのバンダーを対象に、技術や知識を更新し、新規バンダーの育成に携わってもらうことを目的とした講習会を開催している。この講習会は10月に新潟県、1月に鹿児島県で開催し、それぞれ3名と7名のバンダーが参加した。

VI. その他

1 職場体験学習生受け入れ

職場体験学習生3名を受け入れた。

- ・令和元年11月27日 流山市立おおたかの森中学校2年生1名
- ・令和元年12月5日 流山市立南部中学校2年生2名

2 Bernice Pauahi Bishop Museum（米国、ハワイ州）との連携協定

平成31年締結した連携協定に基づき、継続してハワイミツスイ類の適応放散の研究と保護に焦点を定めた連携を継続。

3 京都市動物園との連携協定締結

京都市動物園締結した協定書に従って、令和2年1月2日から1月26日に京都市動物園イーストギャラリーにて、山階鳥類研究所を紹介するポスター展示企画展を開催。

1月26日には京都市動物園レクチャールームにて、連携記念シンポジウム「奄美大島のオオトラツグミを通して、生物多様性と稀少種の保全について考える」を開催した。

4 全国鶺鴒サミットとの連携

2019全国鶺鴒サミットにおいて北海道天売島で行ったウミウの巣の観察、撮影した映像を上映し、「ウミウの生態」について学術講演を行った。

【収益事業】

●東京都渋谷区南平台町に所有するマンション3室を賃貸し、その収益を公益目的事業の用に供する。

1. 103号室

専有面積：104.81平方メートル

賃料月額：350千円

敷金：700千円（賃料の2ヶ月相当額）

更新料：なし（賃料に含む）

契約期間：平成29年9月23日～令和元年9月22日（2年間）

自動更新後、令和元年9月23日～令和3年9月22日（2年間）

2. 104号室

平成29年5月1日をもって収益事業財産となった（旧公益目的事業財産）。

専有面積：122.57平方メートル

賃料月額：500千円

敷金：2,000千円（賃料の4ヵ月相当額）

更新料：500千円（新賃料の1ヵ月分相当額）

契約期間：平成29年7月1日～令和元年6月30日（2年間）

自動更新後、令和元年7月1日～令和3年6月30日（2年間）

3. 204号室

専有面積：113.27平方メートル。

賃料月額：360千円

敷金：720千円（賃料の2ヶ月相当額）

更新料：新賃料の0.5ヶ月分

契約期間：平成29年11月20日～令和元年11月19日（2年間）

自動更新後、令和元11月20日～令和3年11月19日（2年間）

以上

Ⅲ-3. 保全研究室の事業活動

平成31年度は以下の内容で業務を受託または請負、調査・研究を行った。()内は業務の委託者および担当者。

1. 鳥類標識調査・モニタリング

- ・鳥類標識調査委託業務（環境省自然環境局生物多様性センター）

鳥類の渡り状況の推移を把握するため、全国各地のボランティア調査員約400名の協力を得て、野鳥を捕獲し個体識別用金属足環を装着、放鳥した。主要ステーションでは定量評価の可能な調査を実施し、得られた放鳥回収データはデータベース化した。鳥類観測ステーションの建築物および物品・消耗品類の点検を行った。検討会を実施し事業の評価と改善点の検討を行った。ボランティア調査員育成のための講習会を開催した。業務報告書・調査報告書を作成した。（尾崎・水田・仲村・富田・森本・吉安・千田）
- ・重要生態系監視地域モニタリング推進事業（海鳥調査）（環境省自然環境局生物多様性センター）

検討会を開催し、調査結果および第3期とりまとめ素案等について検討した。北海道ユルリ島・モユルリ島、青森県蕪島、岩手県日出島、宮城県足島、山形県飛島・御積島、京都府冠島・沓島、島根県隠岐諸島、島根県経島の各海鳥繁殖地において、繁殖数および個体数をモニタリングした。調査結果を過年度のデータと比較解析し、経年変化を明らかにした。第3期調査結果のとりまとめ素案を作成した。業務報告書・調査報告書を作成した。（富田・油田）
- ・鳥類標識足環の購入（環境省自然環境局生物多様性センター）

鳥類標識調査に必要な個体識別用金属足環を購入し、全国の協力調査員に配布した。（仲村）
- ・調査用具（かすみ網）の調達及び管理業務（環境省自然環境局生物多様性センター）

鳥類標識調査に必要な捕獲用かすみ網を購入し、全国の調査協力員に貸与した。老朽化等により使用不能となった網の返納分については、直接処分場に運んで廃棄した。（仲村）
- ・調査用具（かすみ網）の追加調達及び保管業務（環境省自然環境局生物多様性センター）

鳥類標識調査に必要な捕獲用かすみ網を追加購入した。（仲村）

2. 保全

ヤンバルクイナ

- ・奄美・琉球における遺産価値の高い森林棲絶滅危惧種に対応する保全技術開発・ヤンバルクイナの野生復帰技術開発（学校法人沖縄大学）

ヤンバルクイナの野生復帰技術開発のため、行動追跡装置の開発、試験区域内への放鳥試験を実施し、行動や環境利用などの生態情報、生存率・死亡原因などに関する資料を収集した。（尾崎）
- ・クイナ用発信機の購入（環境省九州地方環境事務所）

ヤンバルクイナ追跡のための小型発信機の選定と入手を行った。（尾崎）

- ・ヤンバルクイナ生息地位情報整理業務（環境省九州地方環境事務所）

ヤンバルクイナ保護増殖事業計画に基づき、発信機を装着した野生個体・飼育繁殖個体の追跡データをとりまとめた。（尾崎）

アホウドリ

- ・アホウドリ保全調査委託（東京都小笠原支庁）

アホウドリ保護増殖分科会の資料を作成し、参加した。アホウドリ繁殖地の復元を図るため、雛移送が実施された聳島において、デコイや音声を使用して積極的なアホウドリの誘引を行った。また実地調査による飛来状況等のモニタリングを実施した。調査結果の取りまとめ・解析を行い、課題の整理と調査等の方向性に関する提言を行った。（油田）

- ・希少野生動植物種（アホウドリ）保護増殖事業（環境省関東地方環境事務所）

伊豆諸島鳥島においてアホウドリのヒナに標識を装着した。アホウドリの生息状況の把握および環境地の評価を行った。業務報告書を作成した。（富田）

シギ・チドリ類

- ・シギ・チドリ類追跡事業（環境省自然環境局野性生物課）

国内外のシギ・チドリ類渡り経路追跡のため、千葉県三番瀬、北海道コムケ湖、千葉県/茨城県利根川下流域、宮城県鳥の海において、シギ・チドリ類を捕獲し、カラーフラッグを付けて放鳥した。また全国から寄せられたカラーフラッグ観察情報および回収情報の解析を行った。（水田・仲村・千田）

ノジコ

- ・北陸新幹線、中池見湿地環境調査（株式会社総合環境計画）

中池見ノジコ標識調査の結果をもとに、生息環境ごとの飛来個体数の比較を行った。着工前の結果と比較し、新幹線等の影響を分析した。ノジコの繁殖地の記録と比較し、個体数の増減傾向の特异性を解析した。（仲村）

カモ

- ・野鳥捕獲及び検体採取業務（鳥取、兵庫、岡山、千葉）（国立大学法人鳥取大学）

高病原性インフルエンザウィルスの持ち込みの可能性を検証するため、野生水禽 80 羽を捕獲し、検体を採取した。鳥取県で捕獲したオナガガモ 10 羽を大学担当者に引き渡した。（仲村）

Ⅲ-4. 科学研究費補助金（特定奨励費）の研究事業

令和元年度科学研究費助成事業（特定奨励費）状況報告書

1. 研究事業名等	日本最大の鳥学関連資料の維持管理・拡充・公開に関する研究事業					
学術研究諸団体の名称	公益財団法人山階鳥類研究所					
学術研究諸団体の代表者職名・氏名	職名		理事長			
	氏名	(フリガナ)	ミブ モトヒロ			
		(漢字等)	壬生 基博			
研究事業期間	平成 30 年度～令和 2 年度 (3 年間)					
交付(予定)額 (単位:千円)	平成30年度	令和元年度	令和2年度	総計		
	56,000	56,000	56,000	168,000		
令和元年度 実支出額 (単位:円)		合計	費目別内訳			
			物品費	旅費	人件費・謝金	その他
		【計画額】 (交付申請書に記載の使用内訳)	56,000,000	5,376,000	3,079,000	35,898,000
【実支出額】 ()内は利子で内数	56,000,301 (301)	6,456,073	1,783,480	36,032,453	11,728,295	
事務担当者 連絡先	職名		事務局長			
	氏名	(フリガナ)	ミネザキ ヨシツグ			
		(漢字等)	峰崎善次			
	〒270-1145		(住所) 千葉県我孫子市高野山115			
	電話番号: 04-7182-1101			F a x 番号: 04-7182-1106		
	E-mail: minezaki@yamashina.or.jp					

2. 研究事業の目的

本欄には、事業計画書に記載の研究事業の全体構想及びその中での本研究事業の具体的な目的について記述してください。

山階鳥類研究所は、創設者である故・山階芳麿博士が皇籍を離脱した後、1932（昭和7）年に設立した山階家鳥類標本館を前身とする、アジアで最も古い鳥学専門の学術研究機関である。85年にわたるその歴史の中、当研究所は一貫して鳥学関連資料の収集に取り組み、鳥学およびその関連分野の発展を支えてきた。

標本資料については、現在、国内最大・約7万点を有するが、これは約1万種を数える世界の鳥種のほぼ半数をカバーする充実したコレクションで、とくに日本・韓国・台湾・太平洋地域の標本に富んでいる（同地域産の標本の保有数は世界最大である）。絶滅種や希少種の標本も多数含み、ミヤコショウビンの標本、カンムリツクシガモの雄標本は、世界で唯一、当研究所のみが保有している。また、新種や新亜種の報告の際の証拠とされ、動物の学名に関する規定集『国際動物命名規約』により、永続的な保管が求められるタイプ標本についても、上記の地域のものを中心に、230点もの資料を有している。



絶滅鳥カンムリツクシガモの標本（雌雄）。手前が世界に1つだけの雄標本

4万冊を数える図書資料についても世界的な稀覯書が含まれている。例えば、下図は19世紀のイギリスで活躍したジョン・グールドの鳥類図譜である。石版印刷で刷られたモノクロの図に職人が1点1点色を塗ることにより、カラーの図譜に仕上げられている。



このように、当研究所は、鳥学とその関連分野の発展を支える基盤として、国内はもとより、世界的にも第一級の重要性を持つ資料を保有している。このため、当研究所は、この分野を専門とする日本の研究者、あるいは、東アジア・太平洋地域の鳥類に興味を持つ外国人研究者にとって、欠くことのできない研究の拠点となってきた。しかし、当研究所が保有する資料には、例えば剥製標本のよう、適切な管理を怠ると、昆虫による食害やカビの発生等により、その価値がすぐに失われるものが多数含まれている。

そこで本研究事業の第一の目的は、**(1) 維持管理**のための適切な処置を**資料**に施し、それを次代に受け継ぐことに置かれる。また、本研究事業では、**(2) 資料の拡充**にも注力する。人間の経済活動の影響を受け、鳥類の住む世界が急速に変わりつつある現代の資料を収集し、次代に託すことは、資料の作成と長期保管のノウハウを持つ当研究所が果たすべき責務である。さらに、本研究事業では、当研究所が保有する資料の一層の活用の促進、当研究所が蓄積してきた知識・技術の社会への還元を企図し、**(3) 情報公開とネットワーク構築**にも取り組む。

3. 研究事業期間を通して行う研究事業の内容

本欄には、研究事業の目的を達成するための具体的な事業内容について、事業計画・方法等（実施体制を含む）を記述してください（研究項目を設定している場合は、研究項目ごとに記述してください。）。また、採択時の審査結果の所見及びその対応策等についても記述してください。

【事業計画・方法等】

「2. 研究事業の目的」に対応する3つの研究項目 **(1) 資料の維持管理班**、**(2) 資料の拡充班**、**(3) 情報公開とネットワーク構築班**を設ける。また、**(0) 総括班**を組織し、進捗状況の自己点検と全体の統括にあたらせる。(1)～(3)の具体的な事業内容は以下の通りである。

(1) 資料の維持管理班：研究所が保有する (a) 標本、(b) 遺伝解析用組織サンプル（肉片・血液等）、(c) 図書資料の品質劣化を防ぐために日常的に必要となる保守業務、整理業務に従事する。また、これらの資料の利用を希望する国内外の研究者をサポートし、資料の品質維持と研究への活用を両立させる。

(2) 資料の拡充班：野外採集、寄贈受け入れ、国内外の博物館等との交換、購入等により、(a) 標本、(b) 組織サンプル、(c) 図書資料の在庫を増やす。また、保有する資料と人材の活用により、学術的重要性と社会的ニーズが高いが、当研究所でなければ作成の難しい各種データの作成を進める（(d) 鳥体内部構造のX線CT画像、(e) 羽毛の走査電子顕微鏡画像、(f) 羽色の紫外線画像、(g) DNA バーコード）。これらのデータは、研究活動の振興のため、速やかにインターネット上に公開され、広く一般の利用に供される（下記(3)参照）。

(3) 情報公開とネットワーク構築班：当研究所が保有する資料、データの活用促進のため、情報公開を進める。具体的には、当研究所が運営するウェブサイト『標本データベース』^{*1}、『組織サンプルの利用』^{*2}、『蔵書検索システム』^{*3}において、(a) 標本、(b) 組織サンプル、(c) 図書資料の在庫状況を公開する。標本については、標本の写真、標本ラベルの写真をあわせて配信する。また、(2)で作成した(d) X線CT画像、(e) 走査電子顕微鏡画像、(f) 紫外線画像を上記『標本データベース』にて公開し、誰もが自由にダウンロードし、研究に利用できるようにする。(g) DNA バーコードデータについては、Consortium for Barcode of Lifeが運営するデータベース『Barcode of Life Data System (BOLD)』^{*4}から公開を行う。

^{*1} <http://decochan.net>; ^{*2} http://www.yamashina.or.jp/hp/hyohon_tosho/soshiki_sample.html; ^{*3} http://www.yamashina.or.jp/hp/hyohon_tosho/toshoDB/toshoDB_toppage.html; ^{*4} <http://www.boldsystems.org>

また、当研究所に蓄積された鳥学の知識・技術を社会に還元するため、以下の事業を行う。(h) 学術雑誌『山階鳥類学雑誌』の年2回刊行。(i) 一般からの質問を受け付ける窓口の開設。(j) 鳥学を一般向けにやさしく解説するセミナー、(k) 鳥類を対象にした野外調査のプロフェッショナルを育成するための講習会・実習、(l) 博物館・動物園等の関係者や生物系の学生に鳥類標本の作製技術を伝える実習の開催。(m) 『世界鳥類和名辞典』（山階、1986）の改訂作業。

『世界鳥類和名辞典』は、現生のすべての鳥種について和名を整備した大著で、広く用いられてきたが、近年の分類学的研究の進展により、種の学名が変更になったり、多くの新種が報告されたりした結果、内容の古さが目立つようになってきた。平成 27～29 年度の特定奨励費事業にて作成し、意見の公募が行われた素案をもとに新和名を考案し、山階鳥類学雑誌上にて公表する。

さらに、当研究所は (n) 地方博物館とのネットワークの強化に取り組む計画を立てた。地方博物館には、鳥類標本コレクションを持つものの、予算の制約から、その在庫状況について十分な情報発信を行っていない機関も少なくない。将来的にこれらの博物館と当研究所がコンソーシアムを作り、標本コレクションの情報発信を共同で行うことを視野に入れた活動を開始する。具体的には、これまでに特定奨励費の支援を受けて構築してきたウェブサイト『標本データベース』のソースコードをもとにして、これらの博物館の情報発信が行えるデータベースの開発を進める。平成 30～令和 2 年度は、パイロットケースとして、我孫子市鳥の博物館の標本コレクションを対象にこの作業を進める。

【採択時の審査結果の所見およびその対応策】

「貴団体は、昭和 7 年に設立された国内最大の鳥類研究所として、多数の鳥類標本と鳥類関係の文献収集を行い、それをデータベースにして広く国内外の研究者に公開している。7 万点におよぶ鳥類標本は、世界のほぼ半数の鳥類をカバーする貴重な資料である。

また、4 万点を越える図書資料にも世界的な稀覯書が含まれている。これらの資料には学術的に大きな価値があり、散逸させることなく適切に維持管理し、更なる資料の拡充を図ることが求められる。

平成 30 年度から平成 32 年度の事業計画では、資料群の維持管理、拡充、及び情報公開を計画している。それぞれの研究事業の遂行に向けて、資料維持管理班、拡充班、情報公開とネットワーク支援班を組織し、それらの進捗管理と自己評価を総括班が行う体制を整えている。いずれの活動も他の競争的資金にはなじみにくく、特定奨励費による支援が妥当であると考えられる。

今後は、若手研究者の育成に力を入れるなど、貴重な資料の長期的な維持、拡充に向けた取組が進められることを期待する。」

この所見を受け、本研究事業では、資料の維持管理、拡充の長期的継続に向けた取り組みとして、若手研究者の育成に力を入れてきた。具体的には、「情報公開とネットワーク構築班」において関連の講習会・実習を開催したほか（野外調査講習会、野外調査実習、標本作製実習）、大学・大学院での専門教育にも積極的に参画してきた。これまでに東邦大学、帝京科学大学、東北大学から、資料を用いた研究に興味を持つ大学院生・学部学生 3 名を受け入れ、指導した。東邦大学、日本獣医生命科学大学、神戸学院大学にて、博物館学、野外採集、標本作製に関する集中講義・実習を行った。また、当研究所スタッフの将来の世代交代の円滑化のため、平成 30 年度には 20 代、30 代の職員各 1 名を新たに採用し、資料整理と標本材料の野外採集に関するトレーニングを開始した。令和 2 年 6 月には 30 代の職員をさらに 1 名を増やし、野外採集の任にあたらせる予定である。

4-1. 令和元年度の研究事業の実施体制			
研究事業の内容 (研究責任者等が担当する研究事業の内容について、研究項目名を記入してください。)	研究者氏名		所要額 (千円)
	研究責任者 (職・氏名を記入してください。)	研究者及び補助者 (研究者と補助者に分けて職・氏名を記入してください。)	
(0) 総括班	奥野卓司 (所長)	遠藤秀紀 (東京大学教授) 小川博 (東京農業大学教授) 真鍋真 (国立科学博物館標本資料センターコレクションディレクター) 美濃導彦 (京都大学教授) 綿貫豊 (北海道大学教授) 高橋敏之 (所員・事務担当)	24,228
(1) 資料の維持管理班	鶴見みや古 (コレクションディレクター・図書担当)	山崎剛史 (自然誌研究室室長・標本担当) 浅井芝樹 (研究員・組織サンプル担当) 齋藤武馬 (研究員・組織サンプル担当) 森本元 (研究員・図書担当)	10,506
(2) 資料の拡充班	山崎剛史 (自然誌研究室室長・CT/紫外線画像担当)	岩見恭子 (研究員・標本/CT担当) 小林さやか (専門員・標本担当) 鶴見みや古 (コレクションディレクター・図書担当) 浅井芝樹 (研究員・組織サンプル担当) 齋藤武馬 (研究員・組織サンプル/DNAバーコード担当) 森本元 (研究員・電顕担当)	13,727

<p>(3) 情報公開とネットワーク構築班</p>	<p>平岡考（広報コミュニケーションディレクター・質問対応/セミナー担当）</p>	<p>山崎剛史（自然誌研究室室長・標本データベース/和名整備/コンソーシアム担当）</p> <p>鶴見みや古（コレクションディレクター・蔵書検索システム担当）</p> <p>浅井芝樹（研究員・雑誌編集担当）</p> <p>仲村昇（研究員・野外調査実習（陸鳥）担当）</p> <p>富田直樹（研究員・野外調査実習（海鳥）担当）</p> <p>千田万里子（専門員・質問対応/野外調査講習会担当）</p> <p>森本元（研究員・野外調査講習会担当）</p> <p>岩見恭子（研究員・標本作製実習担当）</p>	<p>7,538</p>
---------------------------	---	---	--------------

4-2. 令和元年度の進展状況及び主な成果

本欄には、上段に令和元年度の事業計画を、令和元年度に行った研究事業の進展状況及び主な成果について記述してください（研究項目を設定している場合は、研究項目ごとに記述してください。）。その際、所見の反映状況、経費の効率化に向けた取組についても記述してください。

【事業計画】

(1) 資料の維持管理班

【資料の保守業務】 標本庫・書庫について、温湿度管理、害虫・カビの発生状況のモニタリングと発生時の速やかな除去、清掃、破損資料の探索と修理を行う。

【資料の整理業務】 未整理の標本、組織サンプル、図書資料に管理番号を与え（ラベル装着作業等を含む）、管理番号・種名・性別・齢・採集地名・採集年月日などの情報をデジタル化する。標本と、古文書等の図書資料について、写真撮影を行い、状態を記録する。既存図書資料の重複品処分（譲渡・交換・廃棄など）を行う。一連の作業を終えた資料を標本庫・冷凍庫・書庫等に配架する。今年度は、標本400点、組織サンプル400点、図書資料1,000点について作業を行う。

【利用者対応】 資料の利用申請（閲覧・貸出）を受け付け、審査し、適切な場合には、利用許可を与える。資料の利用に伴う準備や後片付け、借用書の取り交わし、梱包・発送、殺虫・殺カビ処理等を行う。

【進展状況および主な成果】

【資料の保守業務】 すべての目標を達成した。

破損資料の修復については、図書資料99点を処理した。

【資料の整理業務】 すべての目標を達成した。

標本1,258点、組織サンプル687点、図書資料1,211点を新たに保管庫に配架した。標本の配架が目標の400点を大幅に上回ったのは、後述の「経費の効率化に向けた取り組み」の成果である。

【利用者対応】 すべての目標を達成した。

のべ219人の閲覧者を受け入れた。博物館等6館に展示素材として標本966点を貸し出した（うち953点は前年度から継続）。博物館6館、図書館1館、出版社1社、テレビ局1社に対し、177点の写真・映像資料を提供した。文献複写依頼13件を受け付けた。組織サンプルについては6件の提供を行った。

【事業計画】

(2) 資料の拡充班

【資料の拡充】 標本：野外捕獲や遺体拾得による個体からの作製、交換、購入、寄贈受け入れ等により、380点の増加を目指す。**組織サンプル**：保管されている冷凍遺体からの作製、交換、寄贈受け入れ等により、400点の増加を目指す。**図書資料**：交換、購入、寄贈の受け入れ等により、80点の増加を目指す。なお、これら標本や資料の受け入れでは、大型コレクションの寄贈があれば、目標点数を大幅に上回る可能性がある。

【データの拡充】 鳥体内部構造のX線CT画像：保管されている冷凍遺体や標本をX線CTシステムで撮影することにより、150点を作成する。**羽毛の走査電子顕微鏡画像**：骨格標本作製時に除去される羽毛を活用することにより、75点のデータを作成する。**羽色の紫外線画像**：紫外線画像撮影装置と剥製標本を用いることにより、50点のデータを作成する。**DNAバーコード**：COI遺伝子の塩基配列を全生物で決定する国際プロジェクトBarcode of Lifeに協力するため、日本産鳥類を主な対象として70点のデータを揃える。

【進展状況および主な成果】

【資料の拡充】 すべての目標を達成した。

大型コレクションの寄贈受け入れがあったため、目標を大幅に上回る点数の資料（標本1,313点、組織サンプル687点、図書資料845点）を入手できた。

【データの拡充】 すべての目標を達成した。

目標を上回る点数のデータ（X線CT画像150点、電子顕微鏡画像96点、紫外線画像100点、DNAバーコード70点）を作成した。

【事業計画】

(3) 情報公開とネットワーク構築班

【インターネットによる情報公開】**標本**：ウェブサイト『標本データベース』を運営し、400点の標本データを追加する。**組織サンプル**：ウェブページに在庫状況のリストをアップロードする（年1回更新）。**図書資料**：ウェブサイト『蔵書検索システム』を運営し、1,000点の書誌情報を追加する。**X線CT画像、電子顕微鏡画像、紫外線画像**：『標本データベース』にそれぞれ150点、75点、50点のデータを追加する。**DNAバーコード**：ウェブサイト『Barcode of Life Data System (BOLD)』に70点のデータを追加する。**【その他の情報公開】雑誌刊行**：『山階鳥類学雑誌』を2回刊行する。**質問対応**：一般からの質問を電話・Eメールで受け付ける窓口を開設する。**セミナー開催**：鳥学の一般向けセミナーを、我孫子市鳥の博物館（千葉県）にて8回開催する。我孫子市が中心となって開催するジャパンバードフェスティバルで同様のセミナーを行う。**講習会・実習開催**：野外調査の講習会を2回開催する。野外調査実習は、陸鳥の捕獲について福島県で6回、海鳥の捕獲について青森県にて1回開催する。鳥類標本の作製技術実習を1回開催する。**和名整備**：新和名の整備については、目または科を単位にして『山階鳥類学雑誌』上で公表する。**【ネットワーク構築】**我孫子市鳥の博物館が保有する標本のうち、約1,000点について標本とラベルの写真を撮影する。撮影した画像とデータを『標本データベース』のフォーマットに合わせ、コンソーシアムのデータベースを作成する。データベース設計を当研究所で行い、ソースコードの修正を九州大学工学部に委託する。

【進展状況および主な成果】

【インターネットによる情報公開】一部の目標を達成できなかった。

標本：計画通り、ウェブサイト『標本データベース』を運営した。令和元年度の本サイトの閲覧者数はのべ996,976人であった。また、計画には挙げなかったが、同サイトから配信されている情報、データに対し、クリエイティブ・コモンズライセンスCC-BY-NCが適用されることを利用規約に明記する改善も行った。非営利目的、クレジット明記の条件を満たす場合、利用者は当研究所に使用の許可を求めることなく、これらの情報、データを自由に活用できるようになった。

一方、同サイトへの標本データのアップロード数は目標の400点より少ない352点にとどまった。これは主に後述の「経費の効率化に向けた取り組み」で述べるシステム開発を優先したことによる。なお、昨年度については目標を上回る650点をアップロードできているので、2カ年で見た場合、当初計画からの遅れはない（目標800点に対し、1,002点のアップロード）。

組織サンプル：計画通り、ウェブサイト『組織サンプルの利用』に現在の在庫状況を示すエクセルファイルをアップロードした。

図書資料：計画通り、ウェブサイト『蔵書検索システム』を運営した。令和元年度の本サイトの閲覧者数はのべ174人であった。目標を上回る1,217点の書誌情報を追加した。

X線CT画像、電子顕微鏡画像、紫外線画像、DNAバーコード：目標を上回る150点、96点、100点、70点のデータ公開を行った。

【その他の情報公開】一部の目標を達成できなかった。

雑誌刊行：計画通り、『山階鳥類学雑誌』の第51巻1号、2号を刊行した。J-Stageに公開したPDFの令和元年度のべ閲覧者数は17,012人であった。

質問対応：計画通り、実施した。毎週月、水、金曜日に専任のスタッフ（ボランティアを含む）を置いて質問に答えた。

セミナー開催：計画通り、我孫子市鳥の博物館にて一般向けセミナー（90分）を年8回開催し、のべ248人が参加した。また、2019年11月2～3日に開催されたジャパンバードフェスティバルにおいても同様のセミナー（30分）を22回行い、のべ769人が参加した。

講習会・実習開催：野外調査講習会の開催は目標の2回より少なく、1回のみであった。この講習会は2019年11月21日に当研究所にて開催され、参加者は12名であった。2020年2月29日には2回目の講習会の開催を予定していたが（会場：神奈川県自然環境保全センター）、新型コロナウイルスの蔓延を受け、会場側判断で中止された。

陸鳥を対象にした野外調査実習は計画通り、6回実施され、17名が受講した。海鳥を対象にした野外調査実習は、受講者の希望があったことと、審査部会所見にて若手研究者育成への注力に期待が示されたことから、回数を増やし、2回実施した。7名が受講した。

標本作製実習も同様に回数を増やし、2回実施した。初回は2019年11月10日に福井市自然史博物館にて開催し、同館職員と同館ボランティア10名が受講した。2回目は2019年12月13日に当研究所内で行われ、環境省鳥類標識調査員2名が受講した。なお、要望があったため、3回目の実習を2020年2月に我孫子市鳥の博物館にて開催する予定であったが、新型コロナウイルス蔓延を受け、会場側判断で中止された。

和名整備：『鳥類の目と科の新しい和名（2）鳴禽類』と題した原稿を『山階鳥類学雑誌』に投稿したが、年度内の出版には至らなかった。これは『山階鳥類学雑誌』の刊行スケジュールが変更われたことによる。公表を予定していた同誌2号の発刊は2月末から12月末に前倒しされた。

【ネットワーク構築】一部の目標を達成できなかった。

標本・ラベルの撮影点数は、目標の1,000点に到達せず、851点であった。

これは我孫子市鳥の博物館側が準備したラベルにエラーが多く見つかったためである。データ整形、コンソーシアムデータベースの開発については、計画通りに実施した。

このほか、当初計画には挙げていなかったが、ネットワーク構築の一環として、来日中のミャンマー・ヤンゴン大学の教職員1名を対象に、DNA バーコーディング実験、鳥類捕獲調査の実習を行った（会場：当研究所および新潟県福島潟バンディングステーション。2019年10月19～29日）。

【経費の効率化に向けた取り組み】

鳥類標本を学術研究に役立てるには、種名・採集地名・採集年月日・採集者・性別等の情報をラベルに記載し、標本とともに保管することが必要である。当研究所では複数のスタッフ（野外採集担当、寄贈受入担当、標本作製担当等）の分業により、これら各種情報を集めている。また、これらの情報をもとに実際にラベルを作成し、標本に装着するのは、さらに別のスタッフである（配架担当）。かつては、この配架担当スタッフが各担当者に問い合わせを行うことで情報の最終確認とし、手書きにてラベルを作成していた。

当研究所では、経費の効率化のため、情報処理技術に長けたスタッフ3名により、この工程の見直しを行い、情報を一元的に管理するデータベースの構築を進めた。令和元年度にこのシステムが本格的に稼働を開始した結果、印刷によるラベルの作成が可能になるとともに、ラベル作成時の確認作業をすべて割愛できるようになった。これまでこの工程がボトルネックとなり、処理がストップしていた多数の標本の整理を、令和元年度中に一挙に進めることができた。

また、当研究所では、撮影した標本写真・ラベル写真をオリジナルサイズにて外付けハードディスクに保存することを長年続けてきた。この点についても上記3名のスタッフが中心となって見直しを行った。縮小画像を作成してクラウドに保存するシステムの運営を開始したところ、『標本データベース』へのアップロード前の画像の最終確認作業を複数スタッフが同時に行えるようになるなど、作業効率が格段に向上した。

5-1. 経費の使用状況（単位：円）

研究事業の内容 <small>（研究責任者等が担当する研究事業の内容について、研究項目名を記入してください。）</small>	合 計	費 目 別 内 訳			
		物品費	旅 費	人件費・謝金	その他
(0) 総括班	24,228,427	0	936,927	22,957,333	334,167
(1) 資料の維持管理班					
(2) 資料の拡充班	10,506,050	1,715,454	16,802	7,353,840	1,419,954
(3) 情報公開とネットワーク構築班	13,727,633	3,924,776	298,210	3,520,740	5,983,907
	7,538,191	815,843	531,541	2,200,540	3,990,267
合 計	56,000,301	6,456,073	1,783,480	36,032,453	11,728,295

5-2. 研究項目ごとの明細 (単位:円)

「5-1. 経費の使用状況」に即し研究項目ごとに記入してください。

研究項目名		(0) 総括班	
物品費	品名	数量	金額
	計		0
旅費	事項 (積算内訳)	数量	金額
	10月総括班会議		448,133
	1月総括班会議		488,794
	計		936,927
人件費・謝金	事項 (積算内訳)	数量	金額
	研究員・専門員・嘱託職員給料 (9名)		20,946,056
	1. 山崎剛史 (研究員) : 標本管理・利用者対応、CT・電顕・紫外線データ作成・登録、『標本データベース』運営、和名整備、外部組織との連携、野外採集		
	2. 浅井芝樹 (研究員) : 組織サンプル管理・提供、雑誌編集・発行、野外採集		
	3. 鶴見みや古 (専門員) : 図書資料の収集・管理・利用者対応担当、『蔵書検索システム』運営		
	4. 岩見恭子 (研究員) : 遺体受入、野外採集、標本作製、標本修復、CTデータ作成、標本作製実習		
	5. 小林さやか (専門員) : 遺体受入・法的手続き、標本管理		
	6. 齋藤武馬 (研究員) : DNAバーコード実験・登録、野外採集、外部組織との連携		
	7. 平岡 考 (専門員) : 質問対応、一般向けセミナー、広報担当		
	8. 森本 元 (研究員) : 資料情報管理システム開発、野外調査講習会・実習、電顕データ作成		
	9. 古川寿子 (嘱託職員) : 理化学機器操作補助		
	その他給料 (1名)		1,629,269
	1. 高橋敏之 : 経理事務担当		
	社会保険料		358,008
10月総括班会議・パートタイマー謝金 (2名)		12,000	
1. 土開明子 : 会場設営・受付			
2. 山田陽子 : 会場設営・受付			
1月総括班会議・パートタイマー謝金 (2名)		12,000	
1. 土開明子 : 会場設営・受付			
2. 山田陽子 : 会場設営・受付			
計		22,957,333	

	品 名	数 量	金 額
その他	10月総括班会議 会議費		141,926
	1月総括班会議 会議費		122,918
	振込手数料		69,323
	計		334,167

研究項目名		(1) 資料の維持管理班	
物品費	品名	数量	金額
	卵標本保管用スチール棚	10 個	616,000
	図書資料保管容器		551,376
	資料整理用消耗品（収納、清掃、防虫、修復、文具、OA 機器用品等）		379,254
	パソコン	2 台	120,464
	標本収蔵庫用除湿器	1 台	48,360
計			1,715,454
旅費	事項（積算内訳）	数量	金額
	資料整理に関する意見交換、貸出資料展示状況確認（近隣 交通費）		16,802
計			16,802

	事項（積算内訳）	数 量	金 額
人 件 費 ・ 謝 金	標本関連パートタイマー謝金（7名）		5,662,320
	1. 斉藤知子：標本管理、利用者対応、臨時職員業務管理（第2班にて採集地名等データ入力、紫外線・CTデータ作成、第3班にて我孫子市鳥の博物館所蔵標本撮影作業にも携わる）		
	2. 日置 睦：標本管理、利用者対応、会計補助（第3班にて我孫子市鳥の博物館所蔵標本撮影作業にも携わる）		
	3. 草間久美子：標本管理、利用者対応、会計補助（第3班にて我孫子市鳥の博物館所蔵標本撮影作業にも携わる）		
	4. 小林洋子：標本画像整理（第2班で資料情報管理システム開発にも携わる）		
	5. 橋本奈津子：標本管理（第2班にて資料情報管理システム開発、第3班にて我孫子市鳥の博物館所蔵標本撮影作業にも携わる）		
	6. 竹中ゆかり：標本管理（第2班にて標本作製、電頭データ作成にも携わる）		
	7. 山際麻里：標本管理（第2班にて標本作製、電頭データ作成にも携わる）		
	図書関連パートタイマー謝金（3名）		1,691,520
	1. 関口久実：図書管理、利用者対応、臨時職員業務管理（第2班で図書受入にも携わる）		
2. 園部浩一郎：図書管理			
3. 丸山さおり：利用者対応、会計補助（第2班で図書受入にも携わる）			
	計		7,353,840
そ の 他	品 名	数 量	金 額
	業務委託 骨格標本への標本番号の書き込み		499,950
	業務委託 写真資料（ネガ・プリント）のデジタル化		393,932
	業務委託 標本庫・書庫殺虫剤散布		367,200
	業務委託 書誌データ作成		76,194
	書籍・書類保管サービス利用料		65,400
	送料（資料貸出等）		14,729
	会議費		2,549
	計		1,419,954

研究項目名		(2) 資料の拡充班	
物品費	品名	数量	金額
	雑誌購読料	29誌	1,247,658
	DNA実験用消耗品（試薬、実験用品等）	2台	1,131,418
	バイオフィリーザー	45冊	524,304
	単行本購入費		331,505
	資料・データ拡充用消耗品（標本作製材料、解剖道具、文具、OA機器用品等）	1台	271,058
	パソコン	2台	192,024
	ソフトウェア（FileMaker、Office、Windows10Pro）		184,378
	カメラ		42,431
	計		
旅費	事項（積算内訳）	数量	金額
	標本引き取り（近隣交通費）		84,342
	ペンギン会議全国大会（長崎）		69,722
	電子顕微鏡画像撮影（近隣交通費）		69,674
	標本作製講習会（福井）		45,800
	日本鳥学会大会（近隣交通費）		28,672
	計		

	事項（積算内訳）	数 量	金 額
人 件 費 ・ 謝 金	標本関連パートタイマー謝金（6名） 1. 飯田朋子：標本作製、解剖データ入力、組織サンプル管理 2. 上沖正欣：標本作製、解剖データ入力 3. 湯田美月：標本作製、解剖データ入力 4. 小山晋平：標本作製 5. 小牧伸子：遺体受入、採集地名等データ入力、会計補助 6. 宮川貴美子：採集地名等データ整理、捕獲許可申請補助（第3班にて実習開催のための捕獲許可申請補助にも携わる）		1,645,080
	図書関連パートタイマー謝金（2名） 1. 岡野千恵：図書受入（第1班にて利用者対応にも携わる） 2. 中野 優：書誌データ入力		1,440,000
	DNA バーコードデータ関連パートタイマー謝金（1名） 1. 島田紀恵：DNA 実験補助、標本作製、解剖データ入力		435,660
	計		3,520,740
そ の 他	品 名	数 量	金 額
	業務委託 標本作製		2,632,280
	DNA実験用機材保守契約		1,080,000
	X線CT装置リース料・保守料		1,017,828
	業務委託 標本燻蒸		305,478
	送料（寄贈資料受入等）		299,171
	業務委託 雑誌製本		270,864
	業務委託 標本台帳撮影		130,000
	故障冷凍庫フロンガス回収費		85,860
	冷凍庫修理代		67,628
	業務委託 DNAシーケンスサービス		48,576
	クラウドサービス利用料		28,152
会議費		18,070	
計		5,983,907	

研究項目名		(3) 情報公開とネットワーク構築班	
	品 名	数 量	金 額
物 品 費	実習・講習会 消耗品 (捕獲、OA 機器用品)	2台	396,757
	ノートパソコン		267,862
	ソフトウェア (Office、FileMaker、Acrobat)		95,396
	野外調査実習 ガソリン代		55,828
	計		
旅 費	事項 (積算内訳)	数 量	金 額
	野外調査実習 (福島・青森)		474,075
	新潟バンダークグループ総会 (野外調査講習会についての意見交換)		34,180
	山階鳥学誌編集委員会 (近隣交通費)		15,782
	日本鳥学会大会 (近隣交通費)		7,504
計			531,541
人 件 費 ・ 謝 金	事項 (積算内訳)	数 量	金 額
	和名整備パートタイマー謝金 (2名)		1,523,440
	1. 亀谷辰朗: 文献調査補助、論文執筆補助 2. 太田紀子: 文献調査補助 (第2班にて電頭データ作成にも携わる)		
	野外調査実習パートタイマー謝金 (7名)		812,200
	1. 渡邊恵美子: 実習準備補助、野外調査データ整理 (第2班にて採集地名等データ整理にも携わる)		
2. 山形尚子: 実習準備補助、野外調査データ整理 (第2班にて採集地名等データ整理にも携わる)			
3. 嶋原良友: 現地協力者 (陸鳥)			
4. 橋本祐輔: 現地協力者 (陸鳥)			
5. 米田重玄: 現地協力者 (陸鳥)			
6. 水谷友一: 現地協力者 (海鳥)			
7. 成田章: 現地協力者 (海鳥)			
山階鳥類学雑誌パートタイマー謝金 (1名)		43,000	
1. 今西貞夫: 51巻掲載9論文の入稿前校正			
計			2,200,540

	品 名	数 量	金 額
その他	山階鳥類学雑誌 印刷費		1,506,677
	業務委託 蔵書検索システムアップロード用データ作成		1,345,932
	業務委託 標本データベースメンテナンス・プログラム修正		430,000
	業務委託 蔵書検索システムメンテナンス		392,400
	山階鳥類学雑誌 送料		113,948
	野外調査実習 レンタカー代		92,448
	業務委託 山階鳥類学雑誌 校正・校閲		72,950
	標本データベースレンタルサーバ使用料		28,512
	送料（山階鳥類学雑誌、野外調査実習関連）		7,400
		計	

6. 研究事業の成果の公表状況

本欄には、当該事業の成果の公表状況や当該研究分野への貢献度等について記述してください。なお、研究項目を設定している場合は、研究項目ごとに記述してください。

(1) 資料の維持管理班

本班は当研究所が保有する資料の劣化・散逸を防ぎ、その利用を希望する研究者や研究機関をサポートする活動を行っている。令和元年度には、資料や設備の利用者により、8編の論文が出版された。

1. Eda M, Yamasaki T, Sasaki M (2019) Identifying the bird figures of the Nasca pampas: An ornithological perspective. *Journal of Archaeological Science Reports* 26: 101875.
2. 福田道雄 (2019) 日本で最初に飼育されたペンギンに関する追加記録. *山階鳥学誌* 51: 53-61.
3. 久井貴世 (2019) 江戸時代におけるツルとコウノトリの識別の実態: 博物誌史料による検証. *山階鳥学誌* 50: 89-123.
4. 井上智博・山崎剛史 (2019) 池島・福万寺遺跡で検出された弥生時代前期のコウノトリの足跡. *大阪文化財研究* 52: 21-30.
5. 伊藤圭子・上野あや・所崎 聡 (2019) 鹿児島県で初めて観察された2例のフルマカモメ *Fulmarus glacialis*. *鹿児島県立博物館研究報告* 38: 61-63.
6. 松田 清・益満まを (2019) 神田佐野文庫所蔵 宇田川榕菴・辻蘭室筆「彩色ジャワ植物図譜」について. *神田外語大学日本研究所紀要* 11: 250-210.
7. Salvador RB, Tomotani BM, Miskelly CM, Waugh SM (2019) Historical distribution data of New Zealand endemic families Callaeidae and Notiomystidae (Aves, Passeriformes). *Check List* 15: 701-727.
8. 田中博人 (2019) やわらかさが生み出す飛翔と遊泳の運動. *日本機械学会誌* 122: 18-20.
3冊の書籍が出版された。
9. 奥野卓司 (2019) 鳥と人間の文化誌. 筑摩書房, 東京.
10. 玉川大学教育博物館 (2019) 玉川学園創立90周年記念特別展「ジョン・グールドの鳥類図譜 -19世紀 描かれた世界の鳥とその時代」図録. 玉川大学教育博物館, 東京.
11. 上田恵介 (編) (2019) 遺伝子から解き明かす鳥の不思議な世界. 一色出版, 東京.
4編の一般向け解説記事が出版された。
12. 平岡 考 (2019) 正倉院宝物でバードウォッチング. *野鳥* 84(9): 32-33.

13. 小林さやか (2019) レッドリストって何だろう?. BIRDER 33(7): 16-17. 文一総合出版, 東京.
14. 山崎剛史 (2019) メグロとメジロは「親戚」なのか?. BIRDER 33(6). 文一総合出版, 東京.
15. 山崎剛史 (2019) 鳥なら島を“ひとつ飛び”か? milsil 3(12): 9-11. 国立科学博物館, 東京.
23件の学会発表があった。
16. 平岡 考 (2019) 山階鳥類研究所の活動. 日本鳥学会 2019 年度大会 自由集会 (W11), 帝京科学大学.
17. 岩見恭子 (2019) 標本を残すためにできること —山階鳥類研究所の取り組み. 日本鳥学会 2019 年度大会 自由集会 (W01), 帝京科学大学.
18. 岩見恭子 (2019) コシジロウミツバメの消化管から発見されたマイクロプラスチック. 日本鳥学会 2019 年度大会 ポスター発表, 帝京科学大学.
19. Kawahara A, Aizawa M, Yamasaki T, Tanaka H (2019) Fabrication of a hummingbird-mimetic flexible flapping wings. 30th 2019 International Symposium on Micro-Nano Mechatronics and Human Science. Nagoya Univ., Nagoya Japan. December 1-4.
20. 岸根宏明・山崎剛史・田中博人 (2019) ペンギンの胴体の羽を模倣した微小表面構造の抗力低減効果の実験的研究. 日本機械学会第 97 期流体工学部門講演会, ホテルアソシア豊橋.
21. 小林さやか・黒田清子 (2019) 山階鳥研の所蔵標本から見つかったグールド標本とその歴史. 日本鳥学会 2019 年度大会 ポスター発表, 帝京科学大学.
22. 小林さやか・岩見恭子・加藤ゆき (2019) 第 3 回 収蔵庫は宝の山! —標本の収集と保存を考える— 日本鳥学会 2019 年度大会 自由集会 (W01), 帝京科学大学.
23. Nakao T, Yamasaki T, Ogihara N, Shimada M (2019) Okinawa Rail has relatively larger Wulst in the brain: Relationship between anvil using behavior and brain morphology. American Ornithology Meeting 2019.
24. 中尾達郎・山崎剛史・荻原直道・島田将喜 (2019) クイナ科鳥類の脳におけるウルストの発達具合の定量的分析. 日本鳥学会 2019 年度大会 ポスター発表, 帝京科学大学.
25. 西海 功・金井 裕・山崎剛史・小田谷嘉弥・亀谷辰朗・齋藤武馬・平岡考・池長裕史・板谷浩男・大西敏一・梶田 学・先崎理之・高木慎介 (2019) みんなで作ろう! 目録 8 版. 日本鳥学会 2019 年度大会 自由集会 (W10), 帝京科学大学.
26. 小田谷嘉弥・山崎剛史・齋藤武馬 (2019) チュウジシギの繁殖集団間における地理的変異と分類学的問題の解決. 日本鳥学会 2019 年度大会 ポスター発表, 帝京科学大学.

27. 長太伸章・杉田典正・山崎剛史・川上和人・西海 功 (2019) メグロの系統的位置. 日本進化学会, 北海道大学.
28. 齋藤武馬 (2019) オガサワラカワラヒワの系統位置と分類学的再検討. 日本鳥学会 2019 年度大会 自由集会(W08), 帝京科学大学.
29. 嵩原建二・佐野裕彦・庄山 守・山田真司・渡久地豊・山城正邦・辻本大地・田中 智・森河貴子 (2019) 沖縄島のリュウキュウキビタキについて. 日本鳥学会 2019 年度大会 口頭発表, 帝京科学大学.
30. 高木昌興・澤田 明・齋藤武馬 (2019) 琉球列島のリュウキュウコノハズクは多型種か二種か. 日本鳥学会 2019 年度大会 口頭発表, 帝京科学大学.
31. Tanaka I, Falkingham PL, Yamasaki T (2019) The method of estimating bipedally dinosaur's posture from the ground based on walking bird's tarsometatarsus. 67th Symposium on Vertebrate Palaeontology and Comparative Anatomy and the 28th meeting of the Symposium on Palaeontological Preparation and Conservation. Dinosaur Isle Museum, Sandown, UK.
32. 富田直樹・水谷友一・鈴木宏和・成田 章 (2019) ウミネコ雛の生存に影響する気温に関連した微気候の変化. 日本鳥学会 2019 年度大会 ポスター発表, 帝京科学大学.
33. 田谷昌仁・山崎剛史 (2019) 鳥類の小翼羽形態と生態の関係. 日本鳥学会 2019 年度大会 ポスター発表, 帝京科学大学.
34. 鶴見みや古・吉田 成 (2019) 写真に遺る失われた伝統狩猟の記録 —その保存の意義を考える—. 日本鳥学会 2019 年度大会 ポスター発表, 帝京科学大学. 33.
35. 齋藤武馬 (2019) オガサワラカワラヒワの系統位置と分類学的再検討. 日本鳥学会 2019 年度大会 自由集会(W08), 帝京科学大学.
36. 山崎剛史・江田真毅・泉 洋江・佐藤文男 (2019) アホウドリの隠ぺい種: *Phoebastria albatrus* の名を継ぐのは誰か. 日本鳥学会 2019 年度大会 口頭発表, 帝京科学大学.
- 2つの展示会が開催された。
37. 我孫子市鳥の博物館 (2019) 第 84 回企画展「世界からみた日本の鳥」(2019 年 7 月 13 日～11 月 24 日, 我孫子市鳥の博物館).
38. 玉川学園創立 90 周年記念特別展「ジョン・グールドの鳥類図譜 -19 世紀 描かれた世界の鳥とその時代」(2019 年 10 月 5～13 日 東京芸術劇場; 10 月 28 日～2020 年 2 月 2 日, 玉川大学教育博物館).

(2) 資料の拡充班

本班は当研究所が保有する資料を拡充する活動を行っている。収集した資料は、長期にわたって保存され、研究に活用される（実際、当研究所には 200 年以上前に作られた標本も保管されており、研究に用いられている）。収集した資料を活用した成果の公表状況は、「(1) 資料の維持管理班」および「(3) 情報公開とネットワーク構築班」に列挙した通りである。

(3) 情報公開とネットワーク構築班

ウェブサイト『標本データベース』は、当研究所が所蔵する標本 70,575 点について、種名・性別・採集地名・採集年月日・採集者等に関するテキスト情報と、標本画像、標本ラベル画像を配信している。また、鳥体内部構造の X 線 CT 画像 896 点、羽毛の走査電子顕微鏡画像 460 点、羽色の紫外線画像 401 点がダウンロードできる。いずれも非営利の場合、出典を明記するという条件を満たすだけで誰もが自由に使用できる。このサイトは研究や普及啓発活動だけでなく、教育や創作活動をもサポートするツールとして活用されている。4-2 に記した通り、令和元年度の利用者はのべ 996,976 人に上った。なお、『標本データベース』から配信中の上記テキスト情報は、生物の分布情報の整備と全世界的な流通促進を目指す国際プロジェクトである『GBIF (Global Biodiversity Information Facility)』のデータベースでも公開しているほか、国立科学博物館が運営し、日本国内の生物標本の所在地情報の整備を目指すウェブサイト『サイエンスミュージアムネット』でも閲覧できる。

ウェブサイト『組織サンプルの利用』では、研究への提供が可能な組織サンプル 12,299 点について、種名、採集地名、採集年月日、性別の情報をまとめたエクセルファイルが公開されている。ウェブサイト『蔵書検索システム』では、当研究所所蔵の約 4 万冊の蔵書のうち、32,993 点について、書誌情報が公開されている。ウェブサイト『Barcode of Life Data System (BOLD)』では、当研究所が提供した DNA バーコードデータ 300 種 1,015 点が公開されている。

当研究所が年 2 回発刊する『山階鳥類学雑誌』は、発刊から 1 年が経過するまでは冊子体のみの公表に限られるが（各号約 1,000 部作成）、その後は、科学技術振興機構運営のウェブサイト『J-STAGE』にて PDF が公開される。同サイトの本誌 PDF の令和元年度利用者数は 17,012 人であった。

7. 研究事業を推進する上での問題点と対応策及び今後の研究事業の推進方策

本欄には、事業を推進する上での問題点と対応策、次年度以降の計画の変更や研究事業を更に発展させるための方策等について記述してください。

【事業を推進する上での問題点と対応策】

4-2に記したように、令和元年度の目標を達成できなかった項目は、(1)『標本データベース』への標本データアップロード数、(2)野外調査講習会開催数、(3)我孫子市鳥の博物館所蔵資料標本およびラベル画像の撮影数の3点であった。そのほかの課題についてはすべて計画通りか、計画以上の成果を得た。

目標を達成できなかった上記3項目のうち、(1)については平成30年度に計画を上回る点数をアップロードしていたため、2カ年で見た場合、当初計画からの遅れはない。また、4-2の「経費の効率化に向けた取り組み」で述べた理由により、今後のスピードアップも見込まれる。この項目についてはとくに対策の必要はないと判断している。(2)は新型コロナウイルス蔓延の影響で、会場側判断による中止が起きたことによっている。同様の事態は令和2年度にも引き続き生じるおそれがあるため、対策が必要である。これについては下記「次年度以降の計画の変更」で述べる。(3)は博物館側が作成・装着した標本ラベルに情報の誤りが多数見付き、当面の撮影が不可となったことによる。情報の確認・修正は博物館側が行う必要がある一方、博物館側はこの件に十分な人員を割くことができないので、今後、撮影点数に関する遅れを取り戻すことは難しいかもしれない。そのような場合には、同館の全所蔵標本の情報公開を行うことは断念し、公開可能なデータのみで先行して配信を始める。

【次年度以降の計画の変更】

令和2年度の事業計画のうち、「情報公開とネットワーク構築班」のセミナー開催、講習会・実習開催は、新型コロナウイルス対策のため、開催困難となる事態も予想される。

その場合にはオンラインでの開催の可能性を模索するが、セミナーについては我孫子市鳥の博物館との共催行事となっていること、野外調査講習会については密猟への悪用のおそれもあること、実習についてはオンラインによる学習効果があまり期待できないこと等、課題も多い。

開催を断念せざるを得ないときには、それらに充当予定であった経費を、当研究所所蔵の哺乳類標本(約3,000点)の整理に充てる。これらの標本は、主に当研究所の創設者である故・山階芳麿博士が戦前に鳥類標本を収集した際、同時に集められたものである。鳥類標本と同様に整理し、標本写真、標本ラベル写真、テキスト情報を『標本データベース』上で公開する。

【平成30年度科学研究費助成事業「特定奨励費」進捗状況の確認に係る所見】

本研究事業の前年度進捗状況に関する科学研究費補助金審査部会の所見は次の通りであった。

「本研究事業については、鳥学関連資料の維持管理、拡充、情報公開・ネットワーク構築が着実に進むなど、状況報告書により、事業計画が十分に実施されていることを確認したが、経費の使用状況に関しては、人件費や謝金等の項目において「給料」や「臨時職員謝金」としか記載がなく、どのような職務の人を何人雇ったのか等が不明であるため、今後は具体的に記載すべきである。

事業計画のうち、特に、全国の鳥類資料を有する施設とのネットワーク構築については、その第一歩として我孫子市博物館との連携をスタートさせており、また、将来に向けた人材育成への努力も見受けられる。今後は、ネットワーク化の更なる拡充・加速と、人材育成の着実な進展を期待する。

一方で、情報公開とネットワーク支援の効果については、経時的な自己評価や分析が必要である。」

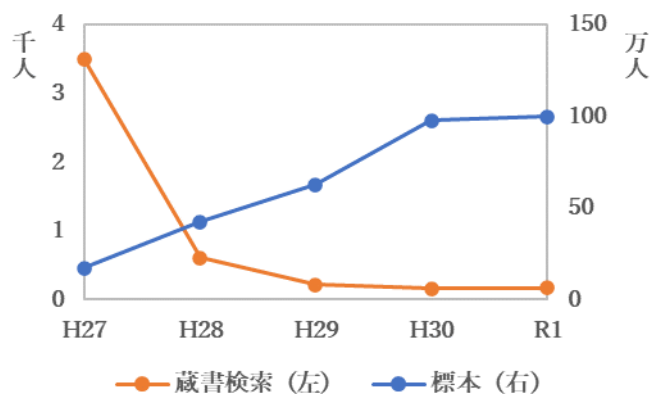
この指摘を受け、経費使用状況の明細の記述を改めた（5-2）。また、ネットワーク化のさらなる拡充・加速のため、令和2年度には鳥類標本を多数有する機関との意見交換に努める。人材育成の着実な進展については、採択時所見でも求められていたものであり、これについては3の「その対応策」で述べた努力（講習会・実習の開催、大学・大学院教育への参画、若手の採用・トレーニング）を続ける。情報公開とネットワーク支援の効果についての分析結果は次に述べる通りである。

【情報公開とネットワーク支援の効果に関する経時的自己評価・分析および研究事業をさらに発展させるための方策】

インターネットによる情報公開：

先述の通り、保有する資料に関する情報・データを配信するため、当研究所が運営しているウェブサイトは『標本データベース』、『組織サンプルの利用』、『蔵書検索システム』の3つである。このうち、『標本データベース』、『蔵書検索システム』の過去5年間の利用者数の変遷を下図に示した。

『標本データベース』はこの5年間で利用者数が増加し、令和元年度には996,976人に達した。十分な数の利用であると評価する一方、さらなる学術の振興につなげる工夫が今後も重要である。この点の対策として、当研究所では、今後、サイトの利用に関するFAQの整備を行うことを計画している。4-2で述べた通り、このサイトのデータはクリエ



タイプ・コモンズ CC-BY-NC ライセンスのもとで提供されているため、実際には FAQ を見るまでもなく許諾されている利用方法はわかるはずだが、ライセンスに詳しくない利用者も多いとの現実がある。例えば、自由研究や理科コンクール出品作に当サイトのデータを使ってよいか、小中学生から尋ねられることがよくある。FAQ の整備はさらなる活用を促進する効果があると期待できる。

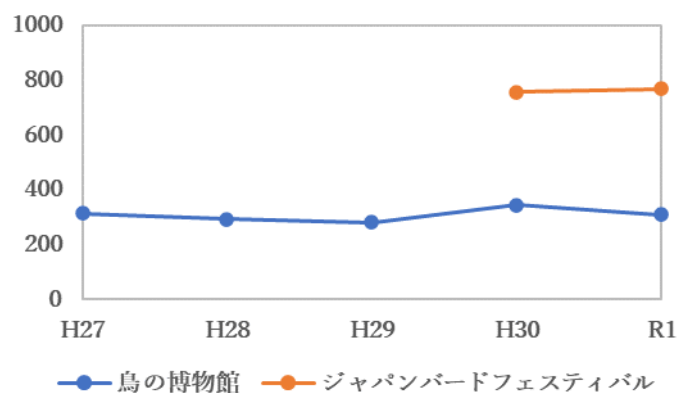
一方、『蔵書検索システム』については利用者数が年々減少しており、令和元年度はわずか 174 人となった。当研究所の所蔵図書資料の情報を公開しているのは当サイトのみなので、利用者数は少ないものの、引き続き運営を続ける必要があると考えている。しかしながら、図書資料を学術の振興につなげるには当サイトの運営とは別の方策が不可欠であることは明らかである。今後、当研究所の保有する貴重図書等のうち、著作権法上の問題のないものの PDF 配信について、検討を進める予定である。

『組織サンプルの利用』は、当研究所のウェブサイト中の 1 ページであり、個別の利用者統計は取っていない。しかし、このページが組織サンプルの利用促進を目的としたページであり、過去 5 年間の組織サンプル利用申請数が 1~9 件（平均 4.4 件）にとどまっていることから判断すると、同ページへのリンクをより目立たせる等、さらなる利用促進を図る工夫が必要であることは明らかである。

その他の情報公開：

『山階鳥類学雑誌』の掲載論文は、平成 29 年度に 11,664 回、平成 30 年度に 10,274 回、令和元年度に 17,012 回閲覧された（平均 12,983 回）。また、平成 30 年度から開始した質問対応については、初年度は 480 件、2 年目は 542 件の質問に答えた（平均 511 件）。これらについては、データの存在する期間が短いため、経時的な傾向についての判断はまだ下せない。今後も同様の情報収集を継続する。

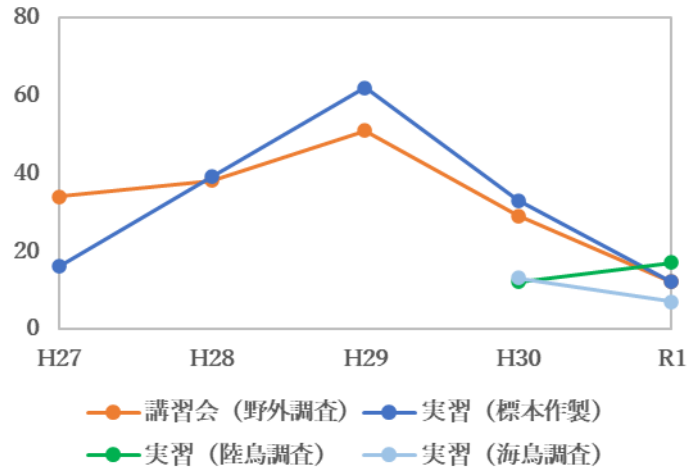
普及啓発目的のセミナー開催について、我孫子市鳥の博物館で開催しているものの過去 5 年間の参加者数の変遷を右図に示した（なお、開催数が年によって 8~12 回とばらつきがあるため、10 回開催に換算してグラフ化した）。また、平成 30 年度よりジャパンボードフェスティバル（会場：千葉県我孫子市）にて開催しているセミナーについても、参考のためにデータを示した。



た。いずれも参加者数の減少は見られないため、一定のニーズがあると判断し、今後も開催を継続す

る。ただし、すべてのセミナーが千葉県我孫子市で開催されていることは問題だろう。より広い範囲を図るため、今後、他地域での開催や、セミナーと同様の内容をまとめた書籍の出版等の方策を検討する。

若手育成目的の講習会・実習の開催について、参加者数の変遷を右図に示した。野外調査講習会と標本作製実習は過去5年間のデータをグラフ化した。陸鳥野外調査実習と海鳥野外調査実習は平成30年度からの開催なので、2カ年分のデータしかない。



5年分のデータのある野外調査講習会と標本作製実習については、平成29年度のピ

ーク以降、参加者数が減少しているように見える。しかし、これには令和元年度に新型コロナウイルス関連の中止があったことの影響が大きい。講習会・実習の開催を求める要望はいまでも全国から寄せられているので、本事業には高いニーズがあると引き続き判断する。

陸鳥と海鳥の野外調査実習は開催開始からまだ2年であり、経時的な傾向についての判断は下せない。しかし、本事業は若手の育成に対し、非常に高い効果を持つものと思われる。実際、この2年のあいだだけでも、実習参加者のなかから、環境アセスメント会社に就職した者2名、海鳥の研究のために博士課程に進学した者2名が現れた。陸鳥の実習の開催地である東北地方は、鳥類の調査者がとくに少ない地域である。海鳥の調査を学べる機会は全国的に非常にまれである。後者の開催地である青森県蕪島は初学者のトレーニングに非常に適した場所で、この「島」は埋め立てによって本州と地続きとなっており、海鳥の集団繁殖地としてはきわめて例外的に船をチャーターすることなくアクセスできる。

和名整備については、この3年間に2編の論文が出版され、1編の論文が投稿中となっている。しかし、これらの3編の論文によって整備された和名の数は、合計517個にとどまっている。和名整備が必要な鳥類の分類群は13,023個も残されている。本事業については、大幅なペースアップにつながる抜本的改革が不可欠である。これについては令和2年度中に改善策を立案する。

ネットワーク構築：

地方博物館の支援を目指すこの事業は開始からまだ2年しか経っておらず、経時的な分析を行うのは時期尚早である。テストケースとして取り組んでいる我孫子市鳥の博物館の標本データ配信もまだ実現していない。この事業の分析と自己評価は令和2年度末の配信開始後に改めて行う。

8. 当該学術団体が受け入れた研究資金等（令和2年3月末時点）

本欄には、令和元年度において、貴団体に所属する研究者が研究代表者として応募し、採択となった科研費の研究課題について、研究種目、研究代表者名、研究課題名及び金額を記入してください。令和元年度以降については、継続の研究課題で採択予定となっているもの及び応募中のものについて記入してください。その際、年度ごとに点線で区切り、各年度の最下段には件数と金額の合計を記入してください。

なお、令和元年度以降については、採択予定と応募中それぞれについて、件数と金額の合計を記入してください。また、「②他の研究資金の採択状況」には、科研費以外の研究費について記入してください。

① 科研費採択状況（特定奨励費以外）

年度	研究種目	研究課題名 (研究代表者名)	金額 (単位：千円)	特定奨励費で行う事業との相違点
令和元（令和元年度応募、令和2年度実施）	基盤C	島の鳥の適応放散はなぜ起きるのか—数理モデルと幾何学的形態測定学によるアプローチ（山崎剛史）	1,170 (分担金・間接経費含む)	鳥類が適応放散を起こす／起こさないの理由を解明しようとする研究である。本事業で収集した標本、図書を、定められた利用手続きを経て活用することはあり得るが、本事業とは目的が明確に異なる。
	基盤C	構造色由来の色彩個体差の発生機構～性選択における構造色の意味を探る（森本元）	1,040 (分担金・間接経費含む)	鳥類の構造色の発色機序を解明し、生理状態との関係を明らかにすることで、この色彩信号の意味を解き明かすための研究である。本事業で収集した標本、図書、電子顕微鏡画像データを、定められた利用手続きを経て活用することはあり得るが、本事業とは目的が明確に異なる。
	合計2件		2,210	
2	採択予定合計0件 応募中合計0件		0 0	

②他の研究資金の採択状況（府省、地方公共団体、研究助成法人、民間企業等からの研究費）					
年度	所管省庁等名	制度、助成金等名	研究課題等名 (代表者等名)	金額 (単位：千円)	特定奨励費で行う事業との相違点
令和元（令和元年度応募、令和2年度実施）	サントリーホールディングス株式会社	公益信託サントリー世界愛鳥基金	絶滅に瀕する小型鳥類における保全のための遺伝解析 (齋藤武馬)	2,000	小型の希少鳥類種の遺伝的変異を国内外において調査し、保全単位を明らかにすることを目的とする。本事業で収集した標本、組織サンプル、図書、DNAバーコードデータを、定められた利用手続きを経て活用することはあり得るが、本事業とは目的が明確に異なる。
	経団連自然保護基金	研究助成金	絶滅危惧種アホウドリの2集団の保全単位の再検討 (富田直樹)	2,730	絶滅危惧種アホウドリの鳥島繁殖集団と尖閣諸島繁殖集団は同種とみなされているが、数十万年前に分化した別種である可能性がある。この可能性の検証が目的である。本事業で収集した標本、組織サンプル、図書を定められた手続きを経て活用することはあり得るが、本事業とは目的が明確に異なる。
	合計2件			4,730	
2	サントリーホールディングス株式会社	公益信託サントリー世界愛鳥基金	絶滅に瀕する小型鳥類における保全のための遺伝解析 (齋藤武馬)	2,000	同上
	経団連自然保護基金	研究助成金	絶滅危惧種アホウドリの2集団の保全単位の再検討 (富田直樹)	2,120	同上
	採択予定合計2件 応募中合計0件			4,120 0	

9. 次年度以降の事業計画

本欄には、令和2年度以降の事業計画について記述してください（研究項目を設定している場合は、研究項目ごとに記述してください。）。

【令和2年度の事業計画】

(1) 資料の維持管理班、(2) 資料の拡充班：「4-2. 令和元年度の進展状況及び主な成果」の上段にある令和元年度事業計画と同様の業務を行う。

(3) 情報公開とネットワーク構築班：「4-2. 令和元年度の進展状況及び主な成果」の上段にある令和元年度事業計画と同様の業務を行うが、野外調査講習会、標本作製実習については受講希望者の要望を聞いて開催場所を決定する。陸鳥および海鳥の野外調査実習については、3年間に得られたすべての生データを『山階鳥類学雑誌』上に公開する。コンソーシアムデータベースについては、我孫子市鳥の博物館の標本コレクション情報のインターネット配信を開始する。

なお、セミナー、講習会、実習の開催については、新型コロナウイルス対策のため、困難となる事態も予想される。開催を断念せざるを得ないときには、それらに充当予定であった経費を、当研究所所蔵の哺乳類標本（約3,000点）の整理に充てる。これらの標本は、主に当研究所の創設者である故・山階芳麿博士が戦前に鳥類標本を収集した際、同時に集められたものである。鳥類標本と同様に整理し、標本写真、標本ラベル写真、テキスト情報を『標本データベース』上で公開する。

III-5. 研究所員の論文・講演等活動成果

1. 原著論文・総説（査読あり）

Eda M, Yamasaki T, Sasaki M (2019) Identifying the bird figures of the Nasca pampas: An ornithological perspective. *Journal of Archaeological Science Reports* 26: 101875.

井上智博・山崎剛史 (2019) 池島・福万寺遺跡で検出された弥生時代前期のコウノトリの足跡. *大阪文化財研究* 52: 21-30.

Kasahara S, Morimoto G, Kitamura W, Imanishi S, Azuma N (2020). Rice fields along the East Asian-Australasian flyway are important habitats for an inland wader's migration. *Scientific Reports* 10(1): 1-9.

小林さやか・加藤 克 (印刷中) 東京帝室博物館旧蔵鳥類標本コレクションの歴史—スミソニアン米国立博物館に由来する標本に注目して—. *タクサ:日本動物分類学会誌*.

Senzaki M, Terui A, Tomita N, Sato F, Fukuda Y, Kataoka Y, Watanuki Y (2019) Long-term declines in common breeding seabirds in Japan. *Bird Conservation International*, [https:// doi:10.1017/S0959270919000352](https://doi.org/10.1017/S0959270919000352)

塚本祥太・西沢文吾・佐藤文男・富田直樹・綿貫豊 (2019) クロアシアホウドリにおける加速度と画像を使った着水・採食行動の検出と精度判定. *日本鳥学会誌* 68: 29-41.

Yuta T, Nomi D (2019) Breeding Biology of the Eurasian Nuthatch *Sitta europaea* in Northern Japan. *Journal of the Yamashina Institute for Ornithology* 51: 62-67.

2. 著書（論文集・分担執筆・翻訳・監修含む）

浅井芝樹 (分担執筆) (2019) 希少猛禽類 2 種の遺伝的多様性を比較する—クマタカとオオタカ. 上田恵介 (編) 遺伝子から解き明かす鳥の不思議な世界. 一色出版, 東京.

長谷川 克 (著)・森本 元 (監修) (2019) ツバメのひみつ. 緑書房, 東京.

岩見恭子ほか (監修) (2020) 文化財防災マニュアルハンドブック・被災自然史標本の処置例と減災対策. 独立行政法人国立文化財機構 文化財防災ネットワーク推進室. 東京.

森本 元 (分担執筆) (2019) 鳥の色彩と遺伝的背景. 上田恵介 (編) 遺伝子から解き明かす鳥の不思議な世界. 一色出版, 東京.

森本 元ほか(分野別監修) (2020) 白敷哲久 (監修) 小学館の子ども図鑑 プレNEO 楽しく遊ぶ学ぶ まである! ふしぎの図鑑. 小学館, 東京.

奥野卓司 (2019) 『鳥と人間の文化誌』, 筑摩書房, 東京.

齋藤武馬 (分担執筆) (2019) DNA・外部形態・音声の違いから明らかとなったメボソムシクイ上種の謎. 上田恵介 (編) 遺伝子から解き明かす鳥の不思議な世界. 一色出版, 東京.

3. 報告その他 (査読なし)

伊勢戸徹・自見直人・山崎剛史・菊地波輝・田中颯・東亮一・鈴木隆仁・神保宇嗣・岡西政典・生野賢司・瀬尾絵理子・堀越彩香・照屋清之介・林亮太・福森啓晶・小林元樹 (2019) 「若手分類学者の集い」の10年. タクサ: 日本動物分類学会誌 47:30-38.

豊田光世・岸本圭子・満尾世志人・江藤毅・油田照秋 (2019) トキ野生復帰から見てきた佐渡における里山保全の今後 (特集: トキ野生復帰の事例から里山を考える). *Wildlife Forum* 24 (1): 14.

油田照秋 (2019) トキ- 保全の歴史と現在の生息状況 (特集: トキ野生復帰の事例から里山を考える). *Wildlife Forum* 24 (1): 4-5.

4. 学会発表等

藤岡健人・森本 元・三上かつら・三上 修 (2019) カラス類による電柱への営巢の傾向と対策: どうすれば停電の発生頻度を下げられるのか. 日本鳥学会 2019 年度大会 (9 月 14 日, 帝京科学大学, 東京都足立区).

平岡 考 (2019) 山階鳥類研究所の活動. 鳥類学を生かせる仕事とは?: NPO で働くという選択 (自由集会, W11). 日本鳥学会 2019 年度大会 (9 月 14 日, 帝京科学大学, 東京都足立区).

平岡 考・坂本文雄・神伴之・黒沢信道 (2019) 上嘴の骨折が自然治癒したと考えられるクサシギ野生個体が一年以上生存した事例. 日本鳥類標識協会 2019 年度 (第 34 回) 全国大会 (12 月 15 日, 我孫子南近隣センター, 我孫子市).

飯島大智・小林 篤・森本 元・長谷川雅美・阿部聖哉・村上正志 (2019) 高山性鳥類群集の季節的な動態とその駆動要因. 日本鳥学会2019年度大会 (9月14日, 帝京科学大学, 東京都足立区).

岩見恭子 (2019) 標本を残すためにできること -山階鳥類研究所の取り組み. 第 3 回収蔵庫は宝の山! -標本の収集と保存を考える- (自由集会, W01). 日本鳥学会 2019 年度大会 (9 月 13 日, 帝京科学大学, 東京都足立区).

岩見恭子・富田直樹・渡辺有希子・齋藤慶輔 (2019) コシジロウミツバメの消化管から発見されたマイクロプラスチック (ポスター発表). 日本鳥学会 2019 年度大会 (9 月 14 日, 帝京科学大学, 東京都足立区).

Kawahara A, Aizawa M, Yamasaki T, Tanaka H (2019) Fabrication of a hummingbird-mimetic flexible flapping wings. 30th 2019 International Symposium on Micro-NanoMechatronics and Human Science (1-4 Dec., Nagoya Univ., Nagoya Japan).

岸根宏明・山崎剛史・田中博人 (2019) ペンギンの胴体の羽を模倣した微小表面構造の抗力低減効果の実験的研究. 日本機械学会第 97 期流体工学部門講演会. (11 月, ホテルアソシア豊橋, 豊橋市)

小林さやか・黒田清子・加藤 克 (2019) 山階鳥研の所蔵標本から見つかったグールド標本とその歴史 (ポスター発表). 日本鳥学会 2019 年度大会 (帝京科学大学, 東京都足立区).

小林さやか・岩見恭子・加藤ゆき (2019) 趣旨説明. 第 3 回収蔵庫は宝の山! -標本の収集と保存を

- 考える—(自由集会, W01). 日本鳥学会 2019 年度大会 (9 月 13 日, 帝京科学大学, 東京都足立区).
- 松丸一郎・富田直樹・澤祐介・佐藤達夫・奴賀俊光・平田和彦・樋口広芳 (2019) 東京都心ビル街屋上でのウミネコの繁殖—営巣場所の移動と個体の行動範囲—. 日本鳥学会 2019 年度大会 (9 月 15 日, 帝京科学大学, 東京都足立区).
- 三上かつら・森本 元・上野祐介・三上 修 (2019) 都市に生息する鳥はどの高さを利用しているのか. 日本鳥学会 2019 年度大会 (9 月 14 日, 帝京科学大学, 東京都足立区)
- 三上 修・森本 元・上野祐介・三上かつら (2019) スズメにとって腕金は快適な営巣環境なのか?. 日本鳥学会 2019 年度大会 (9 月 14 日, 帝京科学大学, 東京都足立区).
- 水田 拓 (2019) 鳥類標識調査への期待—非バンダーの立場から—. 日本鳥類標識協会 2019 年度 (第 34 回) 全国大会 (12 月 15 日, 我孫子南近隣センター, 我孫子市).
- 森本 元・三上かつら・上野祐介・三上 修 (2019) 電柱鳥類学: 止まり木としての電柱・電線の利用状況の種差と季節変化. 日本鳥学会 2019 年度大会 (9 月 14 日, 帝京科学大学, 東京都足立区).
- 森本 元 (2019) バンダーの主導する鳥学研究の分野と傾向 ~標識協会誌と他誌の比較から~. 日本鳥類標識協会 2019 年度 (第 34 回) 全国大会 (12 月 15 日, 我孫子市けやきプラザ, 我孫子市).
- 森さやか・泉 洋江・千葉 悟・西海 功・水田 拓 (2019) マイクロサテライト多型解析で示された絶滅危惧種オオトラツグミの低い遺伝的多様性. 日本鳥学会 2019 年度大会 (帝京科学大学, 東京都足立区).
- 永田尚志・中津弘・油田照秋 (2019) トキによる稲踏みの影響と対策について. 日本鳥学会 2019 年度大会 (帝京科学大学, 東京都足立区).
- Nakao T, Yamasaki T, Ogihara N, Shimada M (2019) Okinawa Rail has relatively larger Wulst in the brain: Relationship between anvil using behavior and brain morphology. American Ornithology Meeting 2019.
- 西海 功・金井 裕・山崎剛史・小田谷嘉弥・亀谷辰朗・齋藤武馬・平岡 考・池長裕史・板谷浩男・大西敏一・梶田 学・先崎理之・高木慎介 (2019) みんなで作ろう! 目録 8 版 (自由集会, W10). 日本鳥学会 2019 年度大会 (帝京科学大学, 東京都足立区).
- 小田谷嘉弥・山崎剛史・齋藤武馬 (2019) チュウジシギの繁殖集団間における地理的変異と分類学的問題の解決 (ポスター発表). 日本鳥学会 2019 年度大会 (帝京科学大学, 東京都足立区).
- 萩野恭伍・佐々木基樹・西海 功, 岩見恭子・川瀬啓祐・齋藤慶輔・坂東 元・池谷優子・中村亮平・佐藤伸高・小野香織・山田一孝・都築 直・北村延夫 (2019) タカ目 3 種の趾可動性に関する比較形態学的解析. 日本獣医学会 (つくば国際会議場, つくば市).
- 大兼 颯・リーキア美海・森本 元・茂田良光・渡久地 豊・萩野 航・三宮一幸・渡邊謙太 (2019) 鳥糞から探る沖縄島の種子散布共生系. 沖縄生物学会第 56 回大会 (5 月 25 日, 名桜大学, 名護市).

- Ozaki K (2019) Ornithological Society of Japan and Yamashina Institute for Ornithology. Meeting of Ornithological Society of Korea (16-17 May, Daegu National Museum, Korea Taegu).
- Ozaki K, Nakamura N (2019) Declining of Yellow-breasted Bunting and other buntings monitored by banding in Japan, China Ornithological Congress (8-11 Aug., Northeast Normal University, China Changchun).
- 尾崎清明・渡久地 豊・玉那覇彰子・向真一郎・中谷裕美子・長嶺 隆 (2019) 野生復帰ヤンバルクイナの野外での繁殖記録 (口頭発表). 日本鳥学会 2019 年度大会 (9 月 15 日, 帝京科学大学, 東京都足立区).
- 齋藤武馬 (2019) オガサワラカワラヒワの系統位置と分類学的再検討. 小笠原で一番ヤバイ鳥:オガサワラカワラヒワを絶滅の淵から救う (自由集会, W08). 日本鳥学会 2019 年度大会 (帝京科学大学, 東京都足立区).
- Tadakuma K, Takahashi, T, Hookabe N, Watanabe M, Ozawa Y, Shimizu T, Takane E, Kajihara H, Yamasaki T, Konyo M, Tadokoro S (2019) Nemertea Proboscis Inspired Extendable Mechanism. 30th 2019 International Symposium on Micro-NanoMechatronics and Human Science. (1-4 Dec., Nagoya Univ., Nagoya Japan).
- 高橋知也・波々伯部夏美・小澤 悠・渡辺将広・柘原 宏・山崎剛史・多田隈建二郎・昆陽雅司・田所 諭 (2019) ヒモムシ物の伸展・湾曲・分岐構造を抽象したトーラス機構. 日本ロボット学会学術講演会 (9 月, 早稲田大学, 東京都新宿区)
- Tanaka I, Falkingham PL, Yamasaki T (2019). The method of estimating bipedally dinosaur's posture from the ground based on walking bird's tarsometatarsus. 67th Symposium on Vertebrate Palaeontology and Comparative Anatomy and the 28th meeting of the Symposium on Palaeontological Preparation and Conservation. (10-13 Sep., Dinosaur Isle Museum, Sandown, UK).
- 田谷昌仁・山崎剛史 (2019) 鳥類の小翼羽形態と生態の関係. 日本鳥学会 2019 年度大会 (帝京科学大学, 東京都足立区).
- 富田直樹・水谷友一・鈴木宏和・成田章 (2019) ウミネコ雛の生存に影響する気温に関連した微気候の変化. 日本鳥学会 2019 年度大会 (9 月 15 日, 帝京科学大学, 東京都足立区).
- 鳥飼久裕・水田 拓 (2019) 標識から明らかになったアマミヤマシギの生存年数と生存に影響を与える要因. 日本鳥類標識協会 2019 年度 (第 34 回) 全国大会 (12 月 15 日, 我孫子南近隣センター, 我孫子市).
- 鶴見みや古・吉田 成 (2019) 写真に遺る失われた伝統狩猟の記録 —その保存の意義を考える—(ポスター発表). 日本鳥学会 2019 年度大会 (帝京科学大学, 東京都足立区).
- 長太伸章・杉田典正・山崎剛史・川上和人・西海功 (2019) メグロの系統的位置. 日本進化学会 (8 月, 北海道大学, 札幌市).
- 山崎剛史・江田真毅・泉洋江・佐藤文男 (2019) アホウドリの隠ぺい種: *Phoebastria albatrus* の名を継ぐのは誰か. 日本鳥学会 2019 年度大会 (帝京科学大学, 東京都足立区).

5. シンポジウム・研究会等講演

- 水田 拓 (2019) 『南西諸島の鳥類学』の面白さ—オオトラツグミを例に—。ジャパンバードフェスティバル2019 第29回鳥学講座「島の鳥類学—南西諸島の鳥をめぐる自然史—」(11月2日, 我孫子市生涯学習センター「アビスタ」, 我孫子市)。
- 水田 拓 (2020) 奄美大島のオオトラツグミを通して, 生物多様性と稀少種の保全について考える。京都動物園・山階鳥類研究所連携記念シンポジウム (1月26日, 京都市動物園, 京都市)。
- 森本 元 (2019) メラニンによる羽毛の発色~茶色・黒色や構造色の青色~。第16回バード&スモールアニマルフェア (8月4日, 東京流通センター, 東京)。
- 仲村 昇 (2019) 2種類の小型記録装置を用いたブッポウソウの渡り追跡。絶滅危惧種の渡り鳥・ブッポウソウの保護について考えるフォーラム。(7月14日, 日本野鳥の会岡山県支部, 岡山県吉備中央町)。
- 西沢文吾・Jean-Baptiste Thiebot・佐藤文男・富田直樹・依田憲・綿貫豊 (2020) アホウドリ類が撮影した海洋ゴミとその分布。海洋生物シンポジウム2020 (3月21日, 東京海洋大学, 東京都)。
- 尾崎清明 (2019) 渡りの解明から絶滅危惧種の現状把握まで—鳥類標識調査の成果—。公開シンポジウム「バンディングでわかること—鳥類標識調査の成果と未来—」, 日本鳥類標識協会2019年度大会 (12月14日, 我孫子市)。
- 尾崎清明 (2019) 沖縄の海を彩るアジサシの謎。山階鳥研関西地区賛助員の集い (12月18日, リーガロイヤルホテル, 大阪市)。
- 尾崎清明・渡久地 豊 (2019) ヤンバルクイナの野生復帰試験と繁殖成功。公開シンポジウム「琉球列島の希少種保全」 (2019年12月21日, 沖縄大学アネックス共創館, 那覇市)。
- 尾崎清明・渡久地 豊 (2019) ヤンバルクイナの野生復帰技術開発。環境省環境研究総合推進費アドバイザリーボード会合 (2019年12月21日, 沖縄大学アネックス共創館, 那覇市)。
- 山階鳥研保全研究室 (2019) 我孫子市鳥の博物館企画展「バンディング」展: 展示協力 (2月1~8月30日, 我孫子市鳥の博物館, 我孫子市)。
- 山崎剛史 (2019) ウの生態について—彼らはどんな鳥なのか—。第23回全国鶴飼サミット (9月, 京都市)。

6. 一般講演・研修会等

- 浅井芝樹 (2019) ♪白い鳥小鳥なぜなぜ白い?。ジャパンバードフェスティバル, 山階鳥研見に来くチャー (11月3日, 山階鳥類研究所, 我孫子市)。
- 平岡 考 (2019) 万国共通な学名が図鑑によって違うわけ~キジやコウノトリはどうなってる? 山階鳥研所員等によるテーマトーク (6月15日, 我孫子市鳥の博物館, 我孫子)。
- 平岡 考 (2019) 撮影する人もしない人も知っておきたい野鳥観察の基礎知識。野鳥撮影講座 スーパーショットの撮り方 (8月25日, 東京環境工科専門学校, 東京都墨田区)。
- 平岡 考 (2019) 正倉院宝物バードウォッチング。我孫子市国際交流協会第21回スピーチ大会 (9月

- 29日, 我孫子市民プラザ多目的ホール, 我孫子市) .
- 平岡 考 (2019) 正倉院宝物バードウォッチング. 山階鳥研見にレクチャー (11月3日, 山階鳥類研究所, 我孫子) .
- 平岡 考 (2020) 万国共通な学名が図鑑によって違うわけ〜キジやコウノトリはどうなってる? 日本野鳥の会千葉県支部2020年総会 (2月11日, 千葉県立中央博物館, 千葉市) .
- 岩見恭子 (2019) 鳥類標本の作り方-いろいろな標本を作ってみよう-. 山階鳥研職員等によるテーマトーク (8月17日, 我孫子市鳥の博物館, 我孫子市).
- 岩見恭子 (2019) 鳥の剥製の中をのぞいてみよう. ジャパンバードフェスティバル, 山階鳥研見にレクチャー (11月3日, 山階鳥類研究所, 我孫子市).
- 岩見恭子 (2019) 鳥類標本作製技術講習会. (11月10日, 福井市自然史博物館, 福井市).
- 岩見恭子 (2019) 鳥類標本作製技術講習会. (12月13日, 山階鳥類研究所, 我孫子市).
- 亀谷辰朗・森本 元 (2020) ハクセキレイの標識調査. 我孫子市鳥の博物館企画展「バンディング展〜足環でわかる鳥の渡り〜」連携企画講演会 (2月23日, 我孫子市鳥の博物館, 我孫子市).
- 小林さやか (2019) 山階鳥研から見つかったジョン・グールド収集標本. ジャパンバードフェスティバル, 山階鳥研見にレクチャー (11月2日, 山階鳥類研究所, 我孫子市).
- 水田 拓 (2019) 世界遺産になる? 奄美大島の生きものたち. ジャパンバードフェスティバル, 山階鳥研見にレクチャー (11月3日, 山階鳥類研究所, 我孫子市).
- 水田 拓 (2020) 奄美大島のオオトラツグミを通して, 生物多様性と稀少種の保全について考える. 鳥ゼミ (1月8日, 日本野鳥の会事務所, 東京都).
- 水田 拓 (2020) 奄美大島の鳥と自然. 日本野鳥の会大阪支部 第21回鳥類学講座 (1月25日, NEXT21, 大阪市).
- 水田 拓 (2020) Conservation of Short-tailed albatross that uses Okhotsk and the possibility of collaborative researches. 日ロ二国間渡り鳥等保護条約会議 (1月29日, 伊豆沼・内沼サンクチュアリセンター, 栗原市).
- 水田 拓 (2020) Decrease in the number of seabirds that breed in Japan and the importance of sharing monitoring results between Russia and Japan. 日ロ二国間渡り鳥等保護条約会議 (1月29日, 伊豆沼・内沼サンクチュアリセンター, 栗原市).
- 森本 元 (2020). 鳥の色彩と構造色. 山階鳥研職員等によるテーマトーク (2月15日, 我孫子市鳥の博物館, 我孫子市).
- 森本 元 (2019) 鳥類標識調査講習会・実技講習 (10月12~14日, 10月30~11月4日, 福島潟ステーション, 新潟市)
- 森本 元 (2019) 鳥類標識調査講習会・実技講師研修会 (10月15~16日, 福島潟ステーション, 新潟市)
- 森本 元・千田万里子 (2019) 山階鳥学セミナー (捕獲技術入門編) 2019・我孫子. 山階鳥学セミナー (11月21日, 山階鳥類研究所, 我孫子市).
- 森本 元 (2019) 鳥類標識調査講習会・講義講習 (12月22~23日, 山階鳥類研究所, 我孫子市)

- 森本 元 (2020). 鳥類標識調査講習会・実技講師研修会 (1月11～12日, 出水ステーション, 出水市)
- 仲村 昇 (2019) 鳥類標識調査講習会・実技講習 (5月28～29日, 6月6～7日, 6月25～26日, 7月10～11日, 7月24～25日, 8月2～3日, 南相馬市, 飯館村).
- 仲村 昇 (2019) 鳥類標識調査講習会・実技講習 (10月11～13日, 風蓮湖ステーション, 根室市).
- 仲村 昇 (2019) 鳥類標識調査講習会・講義講習 (12月22～23日, 山階鳥類研究所, 我孫子市).
- 奥野卓司 (2019) 絵画に描かれた鳥たち…『鳥獣戯画』から伊藤若冲、『火の鳥』まで。「描かれた鳥たち いろとりどり」展ギャラリートーク (8月, 嵯峨嵐山文華館, 京都市).
- 奥野卓司 (2019) 鶺鴒文化の人間動物関係学としての研究により、鶺鴒のハイエンド観光とアニマルウエルフェアの両立をめざして. 全国鶺鴒サミット京都嵐山大会実行委員会 (9月, 京都市).
- 奥野卓司 (2019) 19世紀のジョン・グールド鳥類図譜と同時代の日本の花鳥画との比較から何がわかるか. 玉川大学創立90周年記念特別展「ジョングールドの鳥類図譜」展シンポジウム, (パネリスト) 荒俣宏・奥野卓司・黒田清子 (10月, 東京芸術劇場ギャラリー1, 東京都豊島区).
- 尾崎清明 (2019) 沖縄の海を彩るアジサシ類の渡り. ジャパンバードフェスティバル, 山階鳥研見にレクチャー (11月2日, 山階鳥類研究所, 我孫子市).
- 齋藤武馬 (2020) 絶滅寸前? オガサワラカワラヒワの特徴とその保全. 山階鳥研所員等によるテーマトーク (1月18日, 我孫子市鳥の博物館, 我孫子市).
- 千田万里子 (2019) 2017年標識調査 おいしいとこだけつまみぐい. ジャパンバードフェスティバル, 山階鳥研見にレクチャー (11月3日, 山階鳥類研究所, 我孫子市).
- 千田万里子 (2019) 鳥類標識調査講習会・講義講習 (12月22～23日, 山階鳥類研究所, 我孫子市).
- 富田直樹 (2019) 実は日本のカモメ類が減っています. ジャパンバードフェスティバル, 山階鳥研見にレクチャー (11月2日, 山階鳥類研究所, 我孫子市).
- 富田直樹 (2019) 実は日本のカモメ類が減っています. 山階鳥研職員等によるテーマトーク (12月21日, 我孫子市鳥の博物館, 我孫子市).
- 鶴見みや古 (2019) 研究所所蔵の図書・文化誌資料の概要と整理状況. 山階鳥類研究所意見交換会 (10月3日, 東京大学農学部フードサイエンス棟 中島董一郎記念ホール, 東京都文京区).
- 鶴見みや古 (2019) オガワコマドリ; きみの名は～どうしてそんな名前ですのん?～. 山階鳥研見にレクチャー (11月2日, 山階鳥類研究所, 我孫子市).
- 山崎剛史 (2019) 鳥に学んだものづくりーバイオミメティクス. ジャパンバードフェスティバル, 山階鳥研見にレクチャー (11月2日, 山階鳥類研究所, 我孫子市).
- 山崎剛史 (2020) 特定奨励費成果報告. 令和元年度 (平成31年度) 文部科学省科学研究費補助金 (特定奨励費) による研究事業の研究成果発表会 (1月27日, 六本木アカデミーヒルズ カンファレンスルーム7, 東京都港区).
- 油田照秋 (2019) 一夫一妻から育児放棄?ー鳥たちの多様な繁殖戦略. ジャパンバードフェスティ

バル, 山階鳥研見にレクチャー (11月2日, 山階鳥類研究所, 我孫子市).

7. 一般雑誌・新聞等への執筆

平岡 考 (2019) Q&A 保護飼育したスズメの放鳥について. 山階鳥研NEWS 31(5): 4-5.

平岡 考 (2020) 春、それは変わった声に耳をすます季節！ユリカモメ(773):3. (日本野鳥の会東京).

小林さやか (2019) レッドリストって何だろう？. Birder 33 (7): 17. 文一総合出版, 東京.

水田 拓 (2019) 書評：琉球列島の里山誌. 南日本新聞 (5月12日).

水田 拓 (2019) 書評：揺れうごく鳥と樹々のつながり. 南日本新聞 (7月7日).

水田 拓 (2019) 書評：プラスチック・フリー生活. 南日本新聞 (9月1日).

水田 拓 (2019) 書評：鳥頭なんて誰が言った？ 南日本新聞 (10月27日).

水田 拓 (2019) 書評：大英自然史博物館珍鳥標本盗難事件. 南日本新聞 (12月22日).

水田 拓 (2019) 書評：クモの奇妙な世界. 南日本新聞 (2月23日).

水田 拓 (2019) 元・「幻の鳥」オオトラツグミの暮らし. Birder 34 (1): 30-31.

森本 元 (2019) なぜ青い鳥がいるのか～青い羽の発色や機能～. Birder 33(4): 20-21.

森本 元 (2019) 食物と鳥の色変わりの関係. Birder 33 (5): 20-21.

富田直樹 (2019) 支援先リポート② 日本全国の海鳥の繁殖状況を調査. OUTWARD 85: 27.

富田直樹 (2019) 10. 海鳥 日本で繁殖するカモメ類の数が減っています. モニタリングサイト 1000
ニュースレター 13: 4.

山崎剛史 (2019) 「メグロとメジロは「親戚」なのか？」. Birder 33 (6): 20-21.

山崎剛史 (2019) 鳥なら鳥を“ひとつ飛び”か？. milsil 3 (12): 9-11.

8. 特許・知的所有権等

なし

9. 査読

平岡 考

日本鳥学会『日本鳥学会誌』(1回)

水田 拓

日本鳥学会『Ornithological Science』(1回), 日本鳥学会『日本鳥学会誌』(1回), 『Bird Research』
(1回), 『Journal of Forest Research』(1回), 『Strix』(1回), 『哺乳類科学』(1回), 『European
Journal of Wildlife Research』(1回)

森本 元

日本鳥学会『日本鳥学会誌』(1回), 日本生態学会『Ecological Research』(1回), 『Zoological Letters』
(1回), 日本鳥学会『Ornithological science』(2回), 日本鳥類標識協会『日本鳥類標識協会誌』(4回)

尾崎清明

日本鳥学会 『Ornithological Science』 (1回)

齋藤武馬

日本鳥学会 『日本鳥学会誌』 (1 回), 日本鳥類標識協会 『日本鳥類標識協会誌』 (1 回) , 日本鳥学会
『Ornithological Science』 (1 回), 日本動物学会 『Zoological Science』 (1 回)

山崎剛史

日本鳥学会 『Ornithological Science』 (1 回)

油田照秋

日本鳥学会 『Ornithological Science』 (1 回)

9. 社会的活動（行政、学会などの団体の委員等）

浅井芝樹

- ① 日本鳥学会事務局長
- ② 山階鳥類学雑誌編集委員（庶務幹事）
- ③ 我孫子市景観審議会委員

平岡 考

- ① 日本鳥学会日本産鳥類記録委員
- ② 日本鳥学会鳥類分類委員
- ③ 我孫子市環境審議会委員
- ④ 我孫子市谷津ミュージアム事業推進専門家会議委員
- ⑤ 松戸市緑推進委員
- ⑥ ジャパン・バード・フェスティバル実行委員
- ⑦ 日本鳥類保護連盟全国野生生物保護実績発表大会審査員
- ⑧ 日本鳥類保護連盟愛鳥週間野生生物保護功労者表彰審査員
- ⑨ 東京動物園友の会「どうぶつと動物園」編集委員会

岩見恭子

- ① 日本鳥学会 英文誌『Ornithological Science』編集事務
- ② 日本獣医生命科学大学 非常勤講師
- ③ 早稲田大学 人間科学部 教育コーチ（動物生態学）

小林さやか

- ① 日本鳥類標識協会庶務幹事
- ② 日本鳥学会和文誌編集委員会

水田 拓

- ① 鳥獣の保護管理のあり方検討会検討委員
- ② 奄美希少野生生物保護増殖検討会検討委員
- ③ 鳥インフルエンザ等野鳥対策に係る専門家グループ会合オブザーバー
- ④ 日本鳥学会英文誌編集委員長
- ⑤ 日本鳥学会企画委員会委員
- ⑥ 山階鳥類学雑誌編集委員
- ⑦ マダガスカル研究懇談会世話役

⑧ 日本国際湿地保全連合理事

森本 元

- ① 日本鳥類標識協会評議員
- ② 日本鳥類標識協会役員(編集幹事)
- ③ 日本鳥類標識協会編集委員会委員長
- ④ 日本鳥学会日本鳥学会誌編集委員
- ⑤ 全国鳥類繁殖分布調査解析ワーキンググループ
- ⑥ 東邦大学理学部非常勤講師
- ⑦ 東邦大学理学部客員准教授

仲村 昇

- ① 国土交通省河川水辺の国勢調査 スクリーニング委員会委員
- ② 国土交通省河川水辺の国勢調査 アドバイザー
- ③ 日本鳥類標識協会庶務幹事
- ④ 国交省利根川下流人と自然の調和する川づくり委員会委員
- ⑤ 国交省鳥衝突防止対策検討会委員
- ⑥ 国交省利根川河口周辺の河川改修に関する検討委員会委員
- ⑦ 一般財団法人航空保安協会理事

奥野卓司

- ① 京都市動物園学術顧問
- ② 我孫子市鳥の博物館名誉館長
- ③ 豊岡市コウノトリみらい国際会議実行委員長
- ④ ジャパンボードフェスティバル実行委員長
- ⑤ (一財)千里文化財団(国立民族学博物館運営)理事
- ⑥ (一社)嵐山鶉飼観光文化振興協会理事長
- ⑦ 山階芳麿賞選考委員長
- ⑧ ヒトと動物の関係学会副会長
- ⑨ 生き物文化誌学会理事・「さくら基金」選考委員
- ⑩ 日本鳥学会 2021 年度大会実行委員
- ⑪ 山階鳥類研究所理事
- ⑫ 山階鳥類学雑誌編集委員
- ⑬ 環境省・京都府市 地球環境の殿堂選考委員

尾崎清明

- ① 環境省中央環境審議会自然環境部会臨時委員
- ② 環境省中央環境審議会野生生物小委員会委員
- ③ 環境省絶滅のおそれのある野生生物の選定・評価検討会委員鳥類分科会
- ④ 環境省野生生物保護対策検討会アホウドリ保護増殖検討会委員
- ⑤ 環境省トキ野生復帰検討委員
- ⑥ 環境省ノグチゲラ保護増殖事業ワーキンググループ委員
- ⑦ 環境省ヤンバルクイナ保護増殖事業ワーキンググループ委員
- ⑧ 環境省奄美・琉球世界遺産候補地科学委員会委員
- ⑨ 環境省国内希少野生動植物種の追加指定に関する検討会
- ⑩ 環境省ライチョウ保護増殖事業検討会検討員
- ⑪ (公財)日本動物園協会高碕賞選考委員
- ⑫ 周南市ツル保護協議会委員および専門委員
- ⑬ 日本鳥学会会長・評議員
- ⑭ 山階鳥類研究所理事
- ⑮ 日本鳥類標識協会評議員
- ⑯ 東邦大学大学院理学研究科客員教授
- ⑰ 新潟大学研究推進機構超域学術院 朱鷺・自然再生学研究センター協働研究員

齋藤武馬

- ① 日本鳥学会評議員
- ② 日本鳥学会鳥類分類委員会委員長
- ③ 山階鳥類学雑誌編集委員
- ④ 日本鳥類標識協会評議員
- ⑤ 日本鳥類標識協会 『日本鳥類標識協会誌』編集幹事・編集委員

千田万里子

- ① 日本鳥類標識協会庶務幹事
- ② 日本鳥学会 2019 年度大会実行委員 (託児)

富田直樹

- ① 日本鳥類標識協会庶務幹事
- ② 日本鳥類標識協会 『日本鳥類標識協会誌』編集委員
- ③ 日本鳥学会英文誌 『Ornithological Science』編集委員
- ④ 日本獣医生命科学大学非常勤講師

鶴見みや古

- ① 千葉県環境影響評価審査会委員
- ② ヒトと動物の関係学会評議員

山崎剛史

- ① GBIF 日本ノード運営委員
- ② 日本鳥学会評議員
- ③ 日本鳥学会目録編集委員会副委員長
- ④ 日本鳥学会鳥類分類委員会副委員長
- ⑤ 日本鳥学会英文誌編集委員会副委員長
- ⑥ 日本鳥学会基金運営委員会委員
- ⑦ 日本鳥学会渉外担当(自然史学会連合担当)
- ⑧ 日本鳥学会 2019 年大会実行委員会委員
- ⑨ 日本鳥学会 2020 年大会実行委員会委員
- ⑩ 日本動物分類学会電子化に関する小委員会委員
- ⑪ 山階鳥類学雑誌編集委員会委員
- ⑫ 神戸学院大学非常勤講師

山階鳥類研究所

- ① 国連生物多様性の 10 年日本委員会

油田照秋

- ① 山階鳥類学雑誌編集委員
- ② 日本鳥類標識協会庶務幹事
- ③ 日本鳥類標識協会誌編集委員
- ④ 日本鳥類標識協会 2019 年度大会実行委員
- ⑤ 世界アルバトロスデー実行委員

Ⅲ-6. 所蔵資料の利用実績・その他

1. 標本

標本閲覧者 のべ 196 人
標本貸出 6 件 966 点
画像提供 4 件 12 点

内訳:博物館等 6 館に展示素材として標本 966 点を貸し出した(うち 953 点は前年度から継続)。博物館 2 館、出版社・テレビ局 2 社に対し、12 点の写真・映像資料を提供した。

2. 図書資料

・ 図書資料閲覧者数 のべ 23 人

・ 文献複写 13 件 25 文献

・ 本研究所が所蔵するビデオテープ (U-matic) ビデオ 14 本を、昨年引き続き「NHK アーカイブス番組発掘プロジェクト」への協力として貸出しを行った。

・ 玉川学園創立 90 周年記念特別展「ジョン・グールドの鳥類図譜. 19 世紀 描かれた世界の鳥とその時代」に貴重図書 3 冊 (ジョン・グールドの鳥類図譜; オオハシ科鳥類図譜 (補遺)、キヌバネドリ科鳥類図譜 (補遺)、鳥の図像) およびポジフィルム 28 点を提供した。

・ フジフィルムスクエア写真歴史博物館企画写真展「100 年前にカワセミを撮った男・下村兼史」(本研究所監修) に所蔵する下村兼史撮影のオリジナルプリント等写真関連資料 131 点を提供した。なお、本写真展は 2020 年 4 月 1 日から 6 月 30 日開催の予定であったが、COVID-19 による感染拡大のため延期となった。

・ 折居彪二郎に関する資料について。苫小牧市立中央図書館へ画像 2 点を提供した。

・ 我孫子市鳥の博物館企画展「バンディング展—足環でわかる鳥の渡り—」(2020 年 2 月 1 日から 8 月 30 日開催) に所蔵する堀内讃位撮影の狩猟関連画像 4 点を提供した。

3. 広報

資料提供・貸出し等 1 件

・ 国立台湾科学教育館の生物多様性保全の常設展示のため、山階鳥研のアホウドリ保全活動の画像 13 点を提供。

4. データアクセス数

本年度のアクセス数は標本データベースがのべ 996, 976 人、蔵書検索(OPAC) のべ 174 人であった。

5. 鳥類標識調査データ利用状況

鳥類標識調査データ利用申請書の提出を求め、審査し必要なデータの提供を行っている。

今年度は 44 件の申請があり、目的別にみると研究目的が 28 件、行政資料が 8 件、教育・啓発目的が 6 件、保全保護関係が 1 件、アセスメント関係が 1 件であった。

Ⅲ-7. 新聞・雑誌・メディア記事掲載記録

● 新聞・テレビニュース・ネットニュースでの報道

※ 同じ記事が同じ社の新聞とネットニュースに掲載されているのを知ることができた場合は、新聞を見出しとして「ネットニュースにも掲載」とした。

※ 山階鳥研または所員個人が記事にコメントをした場合はそのことを記した。山階鳥研の関係者名について特に記述が無い場合は、山階鳥研がなにかしら記事や催しに協力した記事であることを示す。

<鳥類標識調査>

- ・ シマフクロウ、知床から国後島に渡る 北海道で着けられた標識リング確認（毎日新聞（ネット）、2019/6/6）
- ・ シマフクロウ国後島に渡る（日本経済新聞、2019/6/8）
- ・ 国後生息 起源は道東、氷河期後に移動 北海道博物館の研究グループ、DNAタイプから判明／北海道（毎日新聞（ネット）2019/6/8）
- ・ シマフクロウが海峡横断 北方領土・国後へ、初確認（日本経済新聞（ネット）、2019/6/9）
- ・ （ユリイカ！）国内最長寿のオオハクチョウ（朝日新聞 2019/8/8、ネットニュースにも掲載）
- ・ 9年続けてシギ2羽飛来 谷津干潟（朝日新聞千葉版 2019/8/26、ネットニュースにも掲載）
- ・ 野鳥に標識 手作業で慎重に 船橋・三番瀬（朝日新聞、2019/11/6）
- ・ ミヤコドリ ロシアから飛来判明（NHK 首都圏 NEWS WEB（ネット）、2019/12/22、千葉 NEWS WEBにも掲載）
- ・ 三番瀬ミヤコドリ カムチャツカから（朝日新聞千葉版、2020/1/9）
- ・ AI（アナログいいね）！鹿児島（4）渡り鳥、足環に秘密（南日本新聞、2020/3/9、水田室長コメント）

<鳥と人間の文化誌関連（奥野所長著書）>

- ・ 書評 鳥と人間の文化誌 奥野卓司著 表象の奥にある物語たどる（日本経済新聞、2019/6/29、ネットニュースにも掲載）
- ・ 「鳥と人間の文化誌」書評 怖れと憧れから不思議の探求へ 好書好日（朝日新聞（ネット）、2019/8/10、朝日新聞デジタルでも紹介）

<いろとりどり 描かれた鳥たち展>

- ・ 若冲や応挙、鳥描いた絵画鳴き声とともに 京都で企画展（京都新聞（ネット）、2019/7/26）

<ヤンバルクイナの保全>

- ・ 「希少なクイナ類の保全を考える」カラヤンクイナとヤンバルクイナの保全に関する情報交換会 (RBC琉球放送 (ネット)、2019/9/23、尾崎副所長講演)
- ・ あわや……。車のまえに飛び出すクイナ撮影 沖縄の山道、「気を付けて」(沖縄タイムス、2019/4/30日、尾崎副所長コメント)
- ・ 危ない！ヤンバルクイナがひかれそう！沖縄本島北部 (琉球新報、2019/5/1、尾崎副所長コメント)

<海鳥の減少 (モニタリングサイト1000海鳥調査) >

- ・ 海鳥の世界的減少、やはり日本でも 北大・山階鳥類研究所の研究 (財經新聞 (ネット) 2019/9/3)
- ・ 消える海辺の風物詩 ウミネコが減る理由は？ (朝日新聞 2020/2/20、ネットニュースにも掲載)

<ブッポウソウの保全>

- ・ ブッポウソウ保護探るフォーラム 繁殖地の吉備中央で開催 (山陽新聞デジタル (ネット) 2019/7/15、仲村研究員参加)

<山階鳥研コメント>

- ・ 台風とともに飛来？アカアシカツオドリ (北日本新聞、2019/7/24、山階鳥研コメント)
- ・ 虫や鳥が見ている世界 自作の紫外線カメラで撮影 我孫子の元高校教師・浅間さん一冊に (朝日新聞千葉、2019/8/19、森本研究員コメント)
- ・ 台風影響か野鳥死骸3000羽 スズメやムクドリ さいたまなど11市町 (読売新聞オンライン (ネット)、2019/9/11、平岡専門員コメント)
- ・ くちばしの脇から骨がひょっこり 新潟の男性が奇形の渡り鳥発見 (新潟日報モア (ネット) 2019/9/25)
- ・ 純白のカムリカイツブリ (神戸新聞、2020/1/20、平岡専門員コメント)
- ・ ヒュルリ・・・まさかの「越冬ツバメ」？ (朝日新聞千葉版、2019/12/6、平岡専門員コメント)
- ・ 千葉) 季節忘れたツバメ？我孫子で巣作り (朝日新聞デジタル、2019/12/6、平岡専門員コメント)
- ・ 我孫子のツバメ5個の卵を産む (朝日新聞千葉版、2019/12/12、平岡専門員コメント)
- ・ 千葉) 季節外れの巣作ったツバメ、5個の卵産む 我孫子 (朝日新聞デジタル (ネット)、2019/12/12、平岡専門員コメント)
- ・ 米国のシンボル、ハクトウワシ 日本本土で初確認、撮影に成功 (毎日新聞 (ネット)、2020/1/28、山階鳥研コメント)
- ・ ハクトウワシ 日本本土初確認 北海道・野付湾 (毎日新聞、2020/1/29、ネットニュースにも掲載、山階鳥研コメント)
- ・ 「見たのは初めて」いわきで茶褐色の『ヤマガラ』確認 (福島民友ニュース：福島民友新聞社 みんゆうNet (ネット)、2020/3/17、山階鳥研協力)

<ジャパンバードフェスティバル>

- ・ ジャパンバードフェスティバル2019 千葉・手賀沼周辺11月2、3日 カメラ・用品各社も出展（週刊カメラタイムズ、2019/10/22・29）

<イセ食品セミナー>

- ・ イセ食品セミナーで「イセの卵」PR（日本食糧新聞、2019/10/25）

<内山春雄特任専門員活動紹介>

- ・ 絶滅危機の鳥 彫刻で残せ 我孫子・内山さん ハワイの固有種「進化の教材に」（朝日新聞千葉版、2019/6/30）

<その他>

- ・ 玉川大学（2020）特集働き方のいま. 全人1月号 No. 845, 玉川大学出版, 東京（齋藤研究員が取材協力）

<テレビ・ラジオへの出演・コメント・協力>

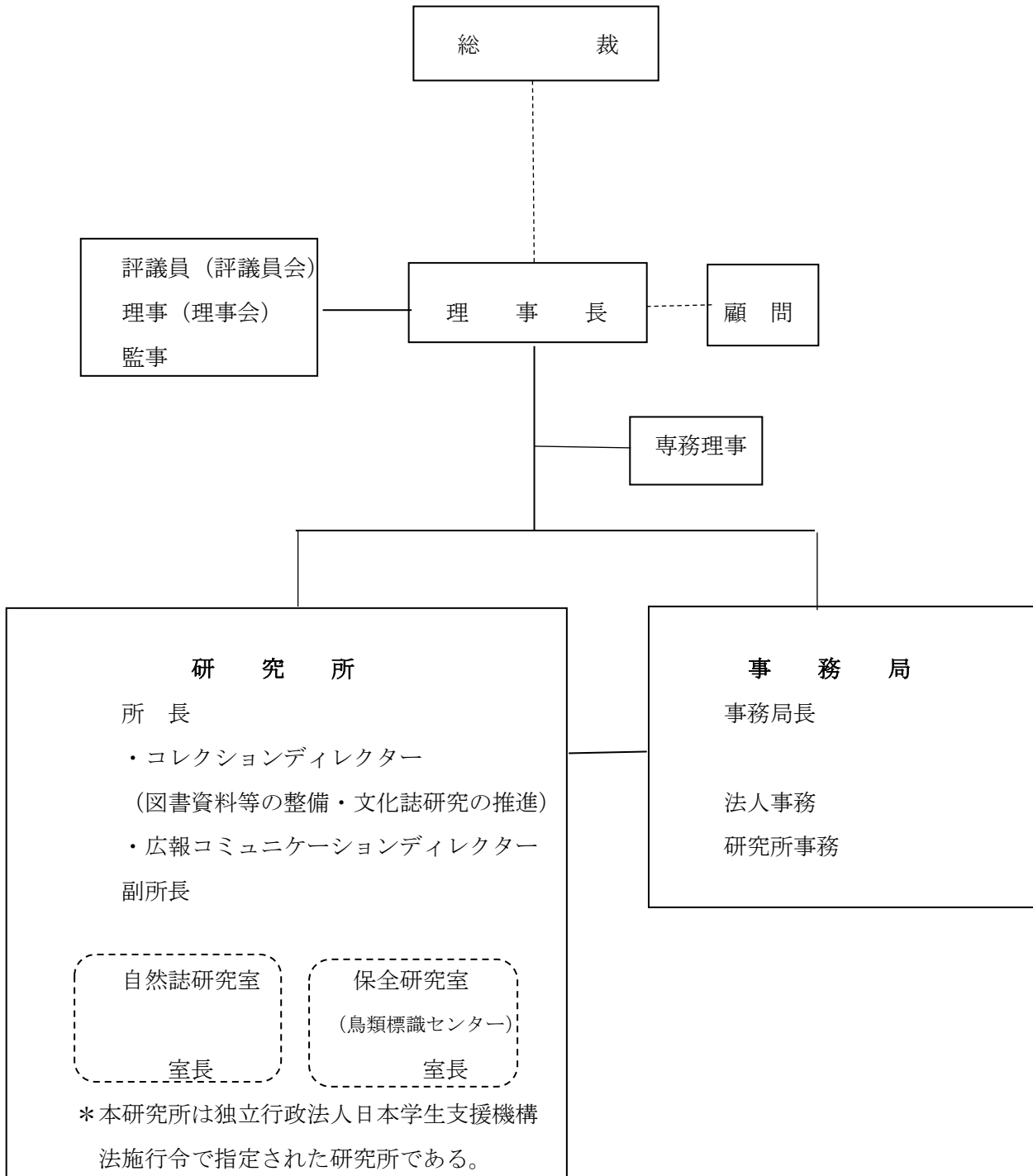
- ・ NHK「ダーウィンが来た！第603回『熱帯のミステリー 踊る！漆黒の人面鳥』」（2019/6/25放送、森本研究員協力）
- ・ NHK沖縄 「ヤンバルクイナ走行車両にみずから近づく様子初確認」（2019/4/30 Newsで放映、尾崎副所長協力）
- ・ 琉球放送テレビ 「車に近づくヤンバルクイナの行動を初確認」（2019/5/2 Newsで放映、尾崎副所長協力）
- ・ 琉球放送「希少なクイナ類の保全を考える」（2019/9/23 Newsで放映、尾崎副所長協力）
- ・ 沖縄テレビ 「アジサシ保全策について意見交換」（2019/6/3 Newsで放映、尾崎副所長協力）
- ・ 琉球朝日放送 QAB NEWS Headline 「アジサシ保全へ 繁殖地・ネガンヌ島で勉強会」（2019/6/3 Newsで放映、尾崎副所長協力）
- ・ NHK「さわやか自然百景『沖縄チービシ』」（2019/9/29放送、尾崎副所長協力）
- ・ NHK BS1 「Cool Japan 『水』」（2019/7/23、虎ノ門ヒルズの鳥、平岡広報 D、鳥の種同定確認）
- ・ NHK「さわやか自然百景」（2019/6/21、秋吉台の鳥、平岡広報 D、鳥の種同定確認）
- ・ NHK「さわやか自然百景」（2019/7/6、岐阜白川郷の鳥、平岡広報 D、鳥の種同定確認）
- ・ NHK「さわやか自然百景」（2019/8/13、渡島半島大平山の鳥、平岡広報 D、鳥の種同定確認）
- ・ NHK「さわやか自然百景」（2019/8/23、早池峰山の鳥、平岡広報 D、鳥の種同定確認）
- ・ NHK「さわやか自然百景」（2019/9/20、山口県寂地山の鳥、平岡広報 D、鳥の種同定確認）
- ・ NHK「さわやか自然百景」（2019/10/30、御嶽山の鳥、平岡広報 D、鳥の種同定確認）
- ・ NHK「さわやか自然百景」（2019/11/28、鹿児島島の鳥、平岡広報 D、鳥の種同定確認）
- ・ NHK「さわやか自然百景」（2020/1/15、奥出雲の鳥、平岡広報 D、鳥の種同定確認）

- ・ NHK 「さわやか自然百景」 (2020/1/28、赤城山の鳥、平岡広報 D、鳥の種同定確認)
- ・ NHK 「さわやか自然百景」 (2020/2/28、渡島半島の鳥、平岡広報 D、鳥の種同定確認)
- ・ NHK 「さわやか自然百景」 (2020/3/9、北海道占冠の鳥、平岡広報 D、鳥の種同定確認)
- ・ NHK 「さわやか自然百景」 (2020/2/28、渡島半島の鳥、平岡広報 D、鳥の種同定確認)
- ・ NHK 「さわやか自然百景」 (2020/3/9、北海道占冠の鳥、平岡広報 D、鳥の種同定確認)
- ・ NHK 「ニッポンの里山」 (2019/7/2、水戸の鳥、平岡広報 D、鳥の種同定確認)
- ・ NHK 「ニッポンの里山」 (2019/7/31、雲南市の鳥、平岡広報 D、鳥の種同定確認)
- ・ NHK 「ニッポンの里山」 (2019/8/27、北海道黒松内の鳥、平岡広報 D、鳥の種同定確認)
- ・ NHK 「ニッポンの里山」 (2019/10/11、秋田県にかほ市の鳥、平岡広報 D、鳥の種同定確認)
- ・ NHK 「ニッポンの里山」 (2019/11/18、福島県阿武隈川の鳥、平岡広報 D、鳥の種同定確認)
- ・ NHK 「ニッポンの里山」 (2019/11/29、長野県鏡池の鳥、平岡広報 D、鳥の種同定確認)
- ・ NHK 「ニッポンの里山」 (2019/12/15、東京都世田谷区の鳥、平岡広報 D、鳥の種同定確認)
- ・ NHK 「ニッポンの里山」 (2020/1/26、前橋の鳥、平岡広報 D、鳥の種同定確認)
- ・ NHK 「ニッポンの里山」 (2020/2/6、奈良の鳥、平岡広報 D、鳥の種同定確認)
- ・ NHK 「ニッポンの里山」 (2020/2/14、宮崎県串間市の鳥、平岡広報 D、鳥の種同定確認)
- ・ NHK 「にっぽん縦断こころ旅」 (2019/6/10、最上川の鳥、平岡広報 D、鳥の種同定確認)
- ・ NHK 「にっぽん縦断こころ旅」 (2019/11/25、北海道の鳥、平岡広報 D、鳥の種同定確認)
- ・ NHK 「にっぽん縦断こころ旅」 (2020/2/7、愛媛県の鳥、平岡広報 D、鳥の種同定確認)
- ・ NHK 「ミミクリーズ」 (2020/1/15、ガチョウとアヒル、平岡広報 D 協力)
- ・ NHK 「お好みワイドひろしま」 (2020/2/12、安来市の鳥、平岡広報 D、鳥の種同定確認)
- ・ NHK 「お好みワイドひろしま」 (2020/3/24、呉市他の鳥、平岡広報 D、鳥の種同定確認)
- ・ NHK (番組名不明) (2019/6/11、甕島の鳥、平岡広報 D、鳥の種同定確認)
- ・ NHK 大河ドラマ「麒麟が来る」 (2020/2/21、室町時代の鳥、平岡広報 D 協力)

IV 資料編

IV-1. 組織図

(令和2年3月31日現在)



IV-2. 人員構成

(令和2年3月31日現在)

総裁	秋篠宮皇嗣殿下 (理学博士)
顧問	島津久永 (非常勤)
理事長	壬生基博 (非常勤、理事)
副理事長	(空席)
専務理事	林 良博 (非常勤、農学博士、理事)
研究所長	奥野卓司 (非常勤、学術博士、理事)
研究所副所長	尾崎清明 (非常勤、理学博士、理事)
事務局長	峰崎善次 (常勤)

●研究所長直屬 (常勤 2名)

平岡 考	広報コミュニケーションディレクター (自然誌研究室専門員 兼務)
鶴見みや古	コレクションディレクター (自然誌研究室専門員 兼務)

●自然誌研究室 (所属員 常勤 5名)

山崎剛史 (室長)	研究員 (理学博士)
浅井芝樹	研究員 (理学博士)
齊藤武馬	研究員 (理学博士)
小林さやか	専門員
岩見恭子	研究員

●保全研究室 (所属員 常勤 7名)

水田 拓 (室長)	研究員 (理学博士)
仲村 昇	研究員
富田直樹	研究員 (理学博士)
千田万里子	専門員
森本 元	研究員 (理学博士)
油田照秋	研究員 (環境科学博士)
谷部百合子	経理担当

●事務局 (所属員 常勤 3名)

峰崎善次	局長
菅原真理	主任 庶務担当
高橋敏之	経理担当

(以下、総裁及び顧問を除く)

●人員数：理事長 1、専務理事 1、所長 1、副所長 1、所員 17 合計 21

●性別：男性 15、女性 6 合計 21

●博士号人員数：専務理事 1、所長 1、副所長 1、所員 7 合計 10

IV-3. 評議員名簿

公益財団法人山階鳥類研究所

令和2年3月31日

現在数9名

	氏名	現職名	常勤/ 非常勤
評議員	徳川 斉正	(公財)徳川ミュージアム理事長	非常勤
〃	鳥井 信吾	サントリーホールディングス(株) 代表取締役副会長	〃
〃	柳澤 紀夫	(本法人評議員)	〃
〃	赤木 攻	大阪外国語大学名誉教授	〃
〃	小宮 輝之	(本法人評議員) (元 恩賜上野動物園園長)	〃
〃	廣居 忠量	(本法人評議員) (元(独行)森林総合研究所理事長)	〃
〃	根津 公一	根津美術館 理事長 館長 (株)東武百貨店 名誉会長	〃
〃	越智 光夫	国立広島大学長	〃
〃	堀内 光一郎	富士急行株式会社代表取締役社長	〃

IV-4. 役員名簿

公益財団法人 山階鳥類研究所

令和2年3月31日

現在数11名

役職名	氏名	現職名	常勤/非常勤
理事長	壬 生 基 博	森アーツセンター副理事長	非常勤
専務理事	林 良 博	(独)国立科学博物館館長(農学博士)	〃
理 事	山 岸 哲	本財団研究所名誉顧問(理学博士)	〃
〃	小 林 隆 成	羽黒山今泉院大聖寺 住職	〃
〃	中 村 浩 志	中村浩志国際鳥類研究所代表理事 信州大学名誉教授(理学博士)	〃
〃	尾 崎 清 明	本財団研究所副所長(理学博士) 社会福祉法人かしわ学園代表理事	〃
〃	進 士 五 十 八	福井県立大学長 東京農業大学名誉教授(農学博士)	〃
〃	山 田 健	サントリーホールディングス(株) エコ戦略部チーフスペシャリスト 兼 水科学研究所主席研究員	〃
〃	黒 田 玲 子	東京理科大学教授(理学博士) 東京大学名誉教授	〃
〃	奥 野 卓 司	本財団研究所長(学術博士) 関西学院大学先端社会研究所長 関西学院大学大学院社会学研究科教授	〃
〃	高 橋 進	TBS テレビ総務局CSR推進部 東京農大「食と博物館」運営委員 「生き物文化誌学会」常任理事	〃

現在数2名

	氏 名	現職名	常勤/ 非常勤
監 事	小 宮 宗 太 郎	公認会計士	非常勤
〃	筒 井 眞	当法人監事	〃

IV-5. 特任研究員・特任専門員・客員研究員・フェロー名簿

特任研究員(五十音順)

令和2年3月31日

	氏名	職名	研究テーマ
1	上田 恵介	立教大学名誉教授	鳥類の行動生態学・進化生態学に関する研究
2	上塚 浩司	茨城大学農学部食生命科学科 動物保健衛生学研究室 准教授	野鳥の腸内細菌叢の研究
3	遠藤 秀紀	東京大学総合研究博物館教授	鳥類の運動機能に関する比較機能形態学 的研究
4	岡島 秀治	東京農業大学名誉教授	鳥類と昆虫の関係に関する研究
5	小川 博	東京農業大学農学部生物資源開発学科 教授	鳥類の繁殖生物学に関する研究
6	小城 春雄	北海道大学名誉教授	海鳥類と水産資源の研究
7	加藤 克	北海道大学北方生物圏フィールド科学セ ンター助教	標本史および博物学的資料の調査研究
8	佐藤 克文	東京大学大気海洋研究所教授	水棲動物の生体力学研究
9	高木 昌興	北海道大学大学院理学研究院 生物科学部門教授	鳥類の行動生態学・系統地理学に関する 研究
10	高田 勝	(有)今帰仁アグー 代表	地域固有文化と鳥類の多面的関係の研 究
11	中島 功	東海大学医学部医学科客員教授	鳥インフルエンザ感染個体の スクリーニングに関する共同研究
12	中村 浩志	(一財)中村浩志国際鳥類研究所代表理 事 信州大学名誉教授	野生鳥類の生態に関する研究
13	西海 功	(独)国立科学博物館 動物研究部研究主幹	鳥類の分子系統地理学・DNAバーコー ディング事業に関する共同研究
14	長谷川 政美	統計数理研究所名誉教授	鳥類の系統に関する研究
15	福田 勝洋	名古屋大学名誉教授	1. 鳥類羽毛の微細形態データの集積と 利用法の検討 2. 鳥類血管系の解析
16	藤巻 裕蔵	帯広畜産大学名誉教授	日本・ロシア産鳥類の鳥相、分類、系統 地理学に関する研究
17	真鍋 真	(独)国立科学博物館 標本資料センター コレクションディレク ター	古生物学に関する研究
18	綿貫 豊	北海道大学水産科学研究院教授	海洋性鳥類の生態研究
19	吉田 成	東京工芸大学芸術学部教授	写真資料の保存とその史科学的研究

特任専門員

	氏名	職名	研究テーマ
1	内山 春雄	厚生労働省 卓越技能者 現代の名工 千 葉県指定伝統工芸品 楽堂象嵌 我孫子 市名誉市民 ほか	バードカービング作成技術の普及及び保 全研究・教育への応用
2	北條 政利	元(公財)山階鳥類研究所事務局長	事務局長の経験、ビジネス英語力・交渉 力を生かした研究者へのサポート

客員研究員

	氏名	職名	研究テーマ
1	茂田良光	元(公財)山階鳥類研究所研究員	鳥類の渡り・識別・分類
2	蘇雲山	(一財)環境文化創造研究所主席 研究員	①人とトキが共生できる自然環境・社会環境に関する研究 ②大陸におけるコウノトリ繁殖地・越冬地の情報研究
3	園部浩一郎	自営	日本の鳥学に係わる鳥類画の調査・整理および研究

フェロー

	氏名	職名	研究テーマ等
1	黒田清子	玉川大学教育博物館 外来研究員	カワセミの生態行動調査 グールド鳥類図譜調査
2	米田重玄	元(公財)山階鳥類研究所研究員	
3	岡奈理子	元(公財)山階鳥類研究所研究員	
4	佐藤文男	元(公財)山階鳥類研究所研究員	
5	吉安京子	元(公財)山階鳥類研究所専門員	

IV-6. 意見交換会 記録

鳥研事 31 第 10 号

令和元年 9 月 9 日

公益財団法人山階鳥類研究所

特任研究員 及び 特定奨励費総括班メンバー各位

公益財団法人山階鳥類研究所

所長 奥野卓司

意見交換会（開催のお知らせ）

拝啓

日頃より当研究所の活動にご支援を賜り、厚く御礼申し上げます。

当研究所は平成 23 年度以降、毎年秋に特任研究員とのカジュアルな意見交換会を開催してまいりました。当研究所全体の研究成果をご報告し研究所の活動に対するご理解を深めていただくとともに、研究の方向性について検討することが目的です。平成 27 年度からは科学研究費補助金（特定奨励費）総括班メンバーにもご出席をいただいております。私どもにとって大変有意義な会合でありますので本年も同様に実施したいと考えております。

本年度の発表は全体テーマを「(仮題) 研究所所蔵の図書・文化誌資料の学術貢献の可能性を探る」と題し、山階鳥類研究所コレクションディレクター鶴見みや古より発表ののち、北海道大学農学部博物館加藤克助教、東京農業大学「食と農」の博物館西嶋優学芸員、理化学研究所美濃導彦理事にご講演いただく予定です。演題は最終案が固まり次第お知らせいたします。

ご多忙中とは存じますが、是非ご出席の程よろしくお願い申し上げます。ささやかな懇親会も準備いたしますので、あわせてご参加ください。

なお、意見交換会及び懇親会には当法人総裁秋篠宮殿下もご臨席の予定です。

敬具

記

【意見交換会】

日 時：令和元年 10 月 3 日（木）14：00～17：05

場 所：東京大学農学部 フードサイエンス棟 1 階 102 講義室

【懇親会】

時 間：17：30～18：30

場 所：アブルボア（農学部弥生キャンパス内）

会 費：@2,000 円

以上

意見交換会

日 時：令和元年（2019）10月3日（木）14：00～17：05

場 所：東京大学農学部フードサイエンス棟 中島董一郎記念ホール

プログラム

- 14：00 開会のご挨拶 及び 趣旨説明 所長 奥野 卓司
- 14：05～14：25 発表（1）
「研究所所蔵の図書・文化誌資料の概要と整理状況」
コレクションディレクター 鶴見 みや古
- 14：30～14：50 発表（2）
「アーカイブが標本にもたらす情報 ～生物学と資料管理学～」
特任研究員・北海道大学助教 加藤 克
- 14：55～15：05 休憩（10分）
- 15：05～15：25 発表（3）
「東京農大所蔵コレクション群の目録化とデータベース構築の取り組み
～東京農業大学「食と農」の博物館と大学図書館での事例紹介～」
東京農業大学「食と農」の博物館学芸員 西嶋 優
- 15：30～15：50 発表（4）
「資料・標本と情報」 科研総括班・理化学研究所理事 美濃 導彦
- 15：55～16：05 休憩（10分）
- 16：05～17：00 総合討論 司会 所長 奥野卓司
- 17：00～17：05 閉会のご挨拶 理事長 壬生基博

（各発表の持ち時間 20 分ののち、5 分間の質疑応答の時間を設定しています。）

※懇親会（@アブルボア）17：30～18：30

IV-7. 研究成果発表会 記録

令和元年度（平成 31 年度）

文部科学省科学研究費補助金（特定奨励費）による研究事業の
研究成果発表会

資料集

プログラム

日時：令和2年1月27日（月）14:00～16:30

会場：六本木アカデミーヒルズ カンファレンスルーム7
（六本木ヒルズ森タワー49F）

- | | |
|-------------|---|
| 14:00～14:05 | 開会挨拶
秋篠宮文仁（山階鳥類研究所総裁） |
| 14:05～14:10 | 趣旨説明
奥野卓司（山階鳥類研究所所長） |
| 14:10～14:20 | 特定奨励費成果報告
山崎剛史（山階鳥類研究所自然誌研究室室長） |
| 14:20～14:40 | 資料活用事例報告（1）
「山階鳥研所蔵鳥類関連資料群を利用した考古学資料の研究」
江田真毅（北海道大学准教授） |
| 14:40～15:00 | 資料活用事例報告（2）
「ジョン・グールドの鳥類図譜—19世紀に描かれた世界の鳥」
黒田清子（山階鳥類研究所フェロー） |
| 15:00～15:10 | 特定奨励費 総括班方針
美濃導彦（特定奨励費総括班・理化学研究所理事） |
| 15:10～15:30 | —— 休憩（20分） —— |
| 15:30～16:15 | 総合討論（45分）
司会：奥野卓司（山階鳥類研究所所長） |
| 16:15～16:20 | ご感想
文部科学省 |
| 16:20～16:25 | ご感想
環境省 |
| 16:25～16:30 | 閉会挨拶
壬生基博（山階鳥類研究所理事長） |

研究成果発表会の趣旨説明

本会は、公益財団法人山階鳥類研究所が文部科学省から交付を受けた科学研究費補助金特定奨励費による「日本最大の鳥学関連資料の維持管理・拡充・公開に関する研究事業」の令和元年度（平成31年度）の進捗状況を自己点検するとともに、その成果を支援者に報告することを目的としています。

この自己点検は、当研究所所長を班長とする総括班によって行われます。本会では最初に、総括班による自己点検の材料として、実務を担当している当研究所自然誌研究室室長が事業の進捗を報告します（令和元年度成果報告）。

続いて、本事業によって拡充・保存されている資料、標本を活用して、他の研究・展示機関で実施された成果実例のうちから2件、ご報告いただきます。ともに狭義の「鳥類学」の分野からは枠外での活用事例で、この事業のより広範な学術・文化への寄与を今後も追求していきたいと考えます。

その後、総括班による自己点検の結果が、総括班からの代表により報告されます。ここでは、本年度の事業の指導報告とともに、今後、本研究事業がめざすべき標本・資料の収集・保存とデータ蓄積、公開のあり方についての方針が提案されます。

以上を受けて、休憩時間を挟んだ後の総合討論では、総括班の他の研究者の意見を紹介し、それらをもとに、自己点検の当事者（総括班、当研究所職員、当研究所特任研究員）と、ご出席いただく当研究所役員及び評議員によって、今年度の事業の検討と今後の進め方について議論します。

最後に本研究所の研究・事業に研究補助、業務委託をいただいている文部科学省、環境省からのご感想をいただき、今後の事業のより良好なありようについてご指導をいただきます。

本会にご出席いただく皆様、本事業をご支援いただいている皆様に、あらためて御礼を申し上げます。本会は、本事業の全体像を見ていただくのによい機会でありますし、当研究所が日々真摯に事業の推進に取り組んでいることをご理解いただけるものと期待しています。

公益財団法人山階鳥類研究所
所長 奥野 卓司

資料1 研究事業の目的

【文部科学省提出事業計画調書からの抜粋】

山階鳥類研究所は、創設者である故・山階芳麿博士が皇籍を離脱した後、1932（昭和7）年に設立した山階家鳥類標本館を前身とする、アジアで最も古い鳥学専門の学術研究機関である。85年にわたるその歴史の中、当研究所は一貫して鳥学関連資料の収集に取り組み、鳥学およびその関連分野の発展を支えてきた。

標本資料については、現在、国内最大・約7万点を有するが、これは約1万種を数える世界の鳥種のほぼ半数をカバーする充実したコレクションで、とくに日本・韓国・台湾・太平洋地域の標本に富んでいる（同地域産の標本の保有数は世界最大である）。絶滅種や希少種の標本も多数含み、ミヤコショウビンの標本、カンムリツクシガモの雄標本は、世界で唯一、当研究所のみが保有している。また、新種や新亜

種の報告の際の証拠とされ、動物の学名に関する規定集『国際動物命名規約』により、永続的な保管が求められるタイプ標本についても、上記の地域のものを中心に、230点もの資料を有している。

4万冊を数える図書資料についても世界的な稀覯書が含まれている。例えば、下図は19世紀のイギリスで活躍したジョン・グールドの鳥類図譜である。石版印刷で刷られたモノクロの図に職人が1点1点色を塗ることで、カラーの図譜に仕上げられている。

このように、当研究所は、鳥学とその関連分野の発展を支える基盤として、国内はもとより、世界的にも第一級の重要性を持つ資料を保有している。このため、当研究所は、この分野を専門とする日本の研究者、あるいは、東アジア・太平洋地域の鳥類に興味を持つ外国人研究者にとって、欠くことのできない



研究の拠点となってきた。しかし、当研究所が保有する資料には、例えば剥製標本のように、適切な管理を怠ると、昆虫による食害やカビの発生等により、その価値がすぐに失われるものが多数含まれている。

そこで本研究事業の第一の目的は、(1) 維持管理のための適切な処置を資料に施し、それを次代に受け継ぐことに置かれる。また、本研究事業では、(2) 資料の拡充にも注力する。人間の経済活動の影響を受け、鳥類の住む世界が急速に変わりつつある現代の資料を収集し、次代に託すことは、資料の作成と長期保管のノウハウを持つ当研究所が果たすべき責務である。さらに、本研究事業では、当研究所が保有する資料の一層の活用の促進、当研究所が蓄積してきた知識・技術の社会への還元を企図し、(3) 情報公開とネットワーク構築にも取り組む。



絶滅鳥カンムリツクシガモの標本（雌雄）。手前が世界に1つだけの雄標本

資料2 研究事業期間を通して行う研究事業の内容

【文部科学省提出事業計画調書からの抜粋】

「研究事業の目的」に対応する3つの研究項目(1)資料の維持管理班、(2)資料の拡充班、(3)情報公開とネットワーク構築班を設ける。また、(0)総括班を組織し、進捗状況の自己点検と全体の統括にあたらせる。(1)～(3)の具体的な事業内容は以下の通りである。

(1) **資料の維持管理班**：研究所が保有する(a)標本、(b)遺伝解析用組織サンプル(肉片・血液等)、(c)図書資料の品質劣化を防ぐために日常的に必要な保守業務、整理業務に従事する。また、これらの資料の利用を希望する国内外の研究者をサポートし、資料の品質維持と研究への活用を両立させる。

(2) **資料の拡充班**：野外採集、寄贈受け入れ、国内外の博物館等との交換、購入等により、(a)標本、(b)組織サンプル、(c)図書資料の在庫を増やす。また、保有する資料と人材の活用により、学術的重要性と社会的ニーズが高いが、当研究所でなければ作成の難しい各種データの作成を進める((d)鳥体内部構造のX線CT画像、(e)羽毛の走査電子顕微鏡画像、(f)羽色の紫外線画像、(g)DNAバーコード)。これらのデータは、研究活動の振興のため、速やかにインターネット上に公開され、広く一般の利用に供される(下記(3)参照)。

(3) **情報公開とネットワーク構築班**：当研究所が保有する資料、データの活用促進のため、情報公開を進める。具体的には、当研究所が運営するウェブサイト『標本データベース』^{*1}、『組織サンプルの利用』^{*2}、『蔵書検索システム』^{*3}において、(a)標本、(b)組織サンプル、(c)図書資料の在庫状況を公開する。標本については、標本の写真、標本ラベルの写真をあわせて配信する。また、(2)で作成した(d)X線CT画像、(e)走査電子顕微鏡画像、(f)紫外線画像を上記『標本データベース』にて公開し、誰もが自由にダウンロードし、研究に利用できるようにする。(g)DNAバーコードデータについては、Consortium for Barcode of Lifeが運営するデータベース『Barcode of Life Data System (BOLD)』^{*4}から公開を行う。

^{*1} <http://decochan.net>; ^{*2} http://www.yamashina.or.jp/hp/hyohon_tosho/soshiki_sample.html;

^{*3} http://www.yamashina.or.jp/hp/hyohon_tosho/toshoDB/toshoDB_toppage.html; ^{*4} <http://www.boldsystems.org>

また、当研究所に蓄積された鳥学の知識・技術を社会に還元するため、以下の事業を行う。(h)学術雑誌『山階鳥類学雑誌』の年2回刊行。(i)一般からの質問を受け付ける窓口の開設。(j)鳥学を一般向けにやさしく解説するセミナー、(k)鳥類を対象にした野外調査のプロフェッショナルを育成するための講習会・実習、(l)博物館・動物園等の関係者や生物系の学生に鳥類標本の作製技術を伝える実習の開催。(m)『世界鳥類和名辞典』(山階, 1986)の改訂作業。『世界鳥類和名辞典』は、現生のすべての鳥種について和名を整備した大著で、広く一用いられてきたが、近年の分類学的研究の進展により、種の学名が変更になったり、多くの新種が報告されたりした結果、内容の古さが目立つようになってきた。平成27～29年度の特典奨励費事業にて作成し、意見の公募が行われた素案をもとに新和名を考案し、山階鳥類学雑誌上にて公表する。

さらに、当研究所は(n)地方博物館とのネットワークの強化に取り組む計画を立てた。地方博物館には、鳥類標本コレクションを持つものの、予算の制約から、その在庫状況について十分な情報発信を行っていない機関も少なくない。将来的にこれらの博物館と当研究所がコンソーシアムを作り、標本コレクションの情報発信を共同で行うことを視野に入れた活動を開始する。具体的には、これまでに特典奨励費の支援を受けて構築してきたウェブサイト『標本データベース』のソースコードをもとにして、これらの博物館の情報発信が行えるデータベースの開発を進める。平成30～32年度は、パイロットケースとして、我孫子市鳥の博物館の標本コレクションを対象にこの作業を進める。

資料3 研究事業を行う組織

【文部科学省提出事業計画調書からの抜粋】

研究事業の内容	研究責任者	研究者及び補助者
(0) 総括班	奥野卓司（所長）	遠藤秀紀（東京大学教授） 小川博（東京農業大学教授） 真鍋真（国立科学博物館標本資料センターコレクションディレクター） 美濃導彦（理化学研究所理事） 綿貫豊（北海道大学教授） 高橋敏之（所員・事務担当）
(1) 資料の維持管理班	鶴見みや古（コレクションディレクター・図書担当）	山崎剛史（自然誌研究室室長・標本担当） 浅井芝樹（研究員・組織サンプル担当） 齋藤武馬（研究員・組織サンプル担当）
(2) 資料の拡充班	山崎剛史（自然誌研究室室長・CT/紫外線画像担当）	岩見恭子（研究員・標本/CT担当） 小林さやか（専門員・標本担当） 鶴見みや古（コレクションディレクター・図書担当） 浅井芝樹（研究員・組織サンプル担当） 齋藤武馬（研究員・組織サンプル/DNAバーコード担当） 森本元（研究員・電顕担当）
(3) 情報公開とネットワーク構築班	平岡考（広報コミュニケーションディレクター・質問対応/セミナー担当）	山崎剛史（自然誌研究室室長・標本データベース/和名整備/コンソーシアム担当） 鶴見みや古（コレクションディレクター・蔵書検索システム担当） 浅井芝樹（研究員・雑誌編集担当） 仲村昇（研究員・野外調査実習（陸鳥）担当） 富田直樹（研究員・野外調査実習（海鳥）担当） 千田万里子（専門員・質問対応/野外調査講習会担当） 森本元（研究員・野外調査講習会担当） 岩見恭子（研究員・標本作製実習担当）

資料 4**事業計画調書の抜粋（上段）と今年度成果（下段）****(1) 資料の維持管理班****【事業計画における平成 31 年度（令和元年度）事業の内容】**

資料の保守業務：標本庫・書庫について、(a) 温湿度管理、(b) 害虫・カビの発生状況のモニタリングと発生時の速やかな除去、(c) 清掃、(d) 破損資料の探索と修理を行う。

資料の整理業務：未整理の標本、組織サンプル、図書資料について、(e) ～ (i) の作業を進める。(e) 資料に管理番号を与える。(f) 管理に必要な情報をデジタル化する。(g) 標本と、古文書・古写真・書籍原画等の図書資料については、写真撮影を行い、資料の状態を記録する。(h) 図書資料のうち、書籍については、既存資料との重複品の処分を行う。(i) これら一連の作業を終えた資料を保管庫に配架する。平成 31 年度には、標本 400 点、組織サンプル 400 点、図書資料 1,000 点について、これらの作業を行う。

利用者対応：(k) 国内外の研究者からの資料利用申請を随時受け付け（閲覧・貸出等）、速やかに計画を審査し、適切と判断される場合には、利用の許可を与える。また、(l) 資料の利用に伴う諸業務も本班が担う。

【事業の進展状況及び主な成果】（12月末現在）

資料の保守業務：すべての課題を計画通り実施した。図書資料6点の修復を行った。

資料の整理業務：標本については目標通り400点の処理を済ませた。組織サンプルについては542点を整理した。図書資料については、未登録図書566冊の登録を済ませ、重複図書1,198冊の廃棄等処分を行った。また、日本伝統狩猟に関する写真類4,300点のデジタル化を行った。

利用者対応：すべての課題を計画通り実施した。標本については、のべ 173 人の閲覧者を受け入れた。博物館等 6 館に展示素材として標本 966 点を貸し出した（うち 953 点は前年度から継続）。博物館 2 館、出版社・テレビ局 2 社に対し、12 点の写真・映像資料を提供した。図書については、のべ 19 人の閲覧者を受け入れると共に文献複写 7 件（13 文献）について対応した。玉川大学教育博物館特別展に鳥類図譜 3 冊（貴重図書）を貸出すと共に、同図譜の画像データ 28 点を提供した。組織サンプルについては 4 件の提供依頼があり、提供した。

資料4 事業計画調書の抜粋（上段）と今年度成果（下段）

(2) 資料の拡充班

【事業計画における平成31年度（令和元年度）事業の内容】

以下の(a)～(g)の資料点数を増やす活動を行う。

- (a) 標本：380点の増加を目指す。
- (b) 組織サンプル：400点の増加を目指す。
- (c) 図書資料：80点の増加を目指す。
- (d) 鳥体内部構造のX線CT画像データ：150点作成する。
- (e) 羽毛の走査電子顕微鏡画像データ：75点作成する。
- (f) 羽色の紫外線画像データ：50点作成する。
- (g) DNAバーコードデータ：日本産鳥類について70点作成する。

【事業の進展状況及び主な成果】（12月末現在）

詳細は以下の通りである。

- (a) 標本・(b) 組織サンプル：標本については、収集した遺体・卵殻からの新規作成と寄贈受け入れにより、1,313点を入手した。組織サンプルについては、野外採集、冷凍保管遺体からの採取、寄贈受け入れにより、542点を入手した。
- (c) 図書資料：購入・寄贈・交換により、89冊を入手した。アマチュア写真家（故）伊東誠氏の写真資料（ネガおよびプリント）段ボール箱5箱の寄贈を受けた。
- (d) X線CT画像データ・(e) 電子顕微鏡画像データ：いずれも年度末までに目標を達成できる見込みである。
- (f) 羽色の紫外線画像データ：目標通り50点を作成した。
- (g) DNAバーコードデータ：目標通り70点のデータを作成した。

資料4 事業計画調書の抜粋（上段）と今年度成果（下段）

(3) 情報公開とネットワーク構築班

【事業計画における平成31年度（令和元年度）事業の内容】

インターネットによる情報公開：(a)『標本データベース』を運営し、400点の標本データを追加する。(b)組織サンプルの在庫状況を示すエクセルファイルをアップロードする（更新頻度年1回）。(c)『蔵書検索システム』を運営し、1,000点の書誌情報を追加する。(d) X線CT画像、(e) 電子顕微鏡画像、(f) 紫外線画像を『標本データベース』にそれぞれ150点、75点、50点のデータを追加する。(g)『Barcode of Life Data System (BOLD)』に70点のDNAバーコードデータを追加する。

その他の情報公開：(h)学術雑誌『山階鳥類学雑誌』を刊行する（1巻2号）。(i)一般からの質問受付窓口を開設する。(j)一般向けの鳥学セミナーを、我孫子市鳥の博物館にて、年8回開催する。また、我孫子市が中心となって11月上旬に開かれるジャパンバードフェスティバルでも同様のセミナーを当研究所（千葉県）で行う。(k)野外調査のプロを育成する講習会を2回開催する。また別に野外調査実習を陸鳥を対象として福島県で6回、海鳥を対象として青森県で1回開催する。これらは平成27～29年度の特典奨励費事業で実施された繁殖モニタリングデータ収集と同じ方法で行うため、繁殖モニタリングの継続としての価値も持つ。

(l)鳥類標本作製の実習を1回開催する。(m)目または科を単位とした新和名の整備を行い、『山階鳥類学雑誌』で公開する。**ネットワーク構築**：(n)我孫子市鳥の博物館が保有する約3,000点の標本のうち、約1,000点について標本写真・標本ラベル写真を撮影し、同博物館が保有するデータと合わせて『標本データベース』のフォーマットに合うデータを作成する。また、『標本データベース』のソースコードをもとに、コンソーシアムのデータベース作成を進める。

【事業の進展状況及び主な成果】（12月末現在）

インターネットによる情報公開：(a)『標本データベース』を計画通り運営し、閲覧者数はのべ734,413人であった。年度末までに予定点数の標本データを追加できる見込みである。(b)年度末までに組織サンプルの在庫リストをアップロードできる見込みである。(c)『蔵書検索システム』を計画通り運営し、閲覧者数はのべ132人であった。公開データ（OPAC）は年度末までに目標点数のアップロードを終える見込みである。(d) X線CT画像データ・(e) 電子顕微鏡画像データ・(f) 紫外線画像データは、年度末までに予定した点数のアップロードを終える見込みである。(g) DNAバーコードデータは『Barcode of Life Data System (BOLD)』上で、年度内までに計画通り、70点のデータを配信開始予定である。

その他の情報公開：(h)『山階鳥類学雑誌』の第51巻1号と2号を発行した。(i)一般からの質問約400件に対応した。(j)9月と11月以外の毎月7回開催した。2020年1月開催も予定済みである。11月には、ジャパンバードフェスティバルで同様のセミナーを実施した。(k)野外調査のプロを育成する講習会を当研究所（11/21）で開催し、12名が受講した。2回目の講習会は、野外調査のプロの育成が急務だと思われる地方を対象として3月に実施予定である。陸鳥を対象とした野外調査実習は、福島県で5月～8月に6回開催し、のべ17人が受講した。海鳥を対象とした野外調査実習は、青森県で5～6月に当初計画を超える2回開催し、のべ7人が受講した。これらの実習は、平成27～29年度の特典奨励費事業で実施された繁殖モニタリングデータ収集と同じ方法で実施された。この他に、ミャンマー・ヤンゴン大学の教職員1名を日本に招致し、DNAバーコーディング実験の実技講習と新潟県福島潟バンディングステーションにおいて鳥類の捕獲調査の実習を行った（10/19～29）。(l)標本作製講習会は、福井市自然史博物館（11/10）にて実施した。対象は、博物館職員およびボランティアで、合わせて10名が受講した。内容は、標本収集の意義についての講義および標本製作の実習であった。その他、山階鳥類研究所で標本製作実習を鳥類標識バンダー2名に対して行った（12/13）。(m)現生鳥類の目レベル・科レベルの和名の約半分を整理した報文『鳥類の目と科の新しい和名（2）鳴禽類』の原稿を準備中である。年度内に『山階鳥類学雑誌』に投稿する。

資料4 事業計画調書の抜粋（上段）と今年度成果（下段）

ネットワーク構築：(n)470点の標本を処理した。データベースのデザインについて検討した。

資料5 科研費事業の効果

【資料の維持管理・拡充・公開により今年度発表された研究業績等一覧】

【論文】

1. Eda M, Kikuchi H, Sun G, Matsui A (2019) Were chickens exploited in the Neolithic early rice cultivation society of the lower Yangtze River? *Archaeological and Anthropological Sciences* 11: 6423-6430.
2. Eda M, Yamasaki T, Sasaki M (2019) Identifying the bird figures of the Nasca pampas: An ornithological perspective. *Journal of Archaeological Science Reports* 26: 101875.
3. 福田道雄 (2019) 日本で最初に飼育されたペンギンに関する追加記録. *山階鳥学誌* 51: 53-61.
4. 久井貴世 (2019) 江戸時代におけるツルとコウノトリの識別の実態：博物誌史料による検証. *山階鳥学誌* 50: 89-123.
5. 井上智博・山崎剛史 (2019) 池島・福万寺遺跡で検出された弥生時代前期のコウノトリの足跡. *大阪文化財研究* 52: 21-30.
6. 伊藤圭子・上野あや・所崎 聡 (2019) 鹿児島県で初めて観察された2例のフルマカモメ *Fulmarus glacialis*. *鹿児島県立博物館研究報告* 38: 61-63.
7. 松田 清・益満まを (2019) 神田佐野文庫所蔵 宇田川榕菴・辻蘭室筆「彩色ジャワ植物図譜」について. *神田外語大学日本研究所紀要* 11: 250-210.
8. Salvador RB, Tomotani BM, Miskelly CM, Waugh SM (2019) Historical distribution data of New Zealand endemic families Callaeidae and Notiomystidae (Aves, Passeriformes). *Check List* 15: 701-727.
9. 田中博人 (2019) やわらかさが生み出す飛翔と遊泳の運動. *日本機械学会誌* 122: 18-20.
10. 山崎剛史・亀谷辰朗 (2019) 鳥類の目と科の新しい和名(1)非スズメ目・イワサザイ類・亜鳴禽類. *山階鳥学誌* 50: 141-151.

【一般向け解説記事(雑誌など)】

11. 平岡 考 (2019) 正倉院宝物でバードウォッチング. *野鳥* 84(9): 32-33.
12. 小林さやか (2019) レッドリストって何だろう?. *BIRDER* 33(7): 16-17. 文一総合出版, 東京.
13. 山崎剛史 (2019) メグロとメジロは「親戚」なのか?. *BIRDER* 33(6). 文一総合出版, 東京.
14. 山崎剛史 (2019) 鳥なら島を“ひとつ飛び”か? *milsil* 3(12): 9-11. 国立科学博物館, 東京.

【書籍】

15. 奥野卓司 (2019) 鳥と人間の文化誌. 筑摩書房, 東京.
16. 玉川大学教育博物館 (2019) 玉川学園創立90周年記念特別展「ジョン・グールドの鳥類図譜 —19世紀 描かれた世界の鳥とその時代」図録. 玉川大学教育博物館, 東京.
17. 上田恵介 (編) (2019) 遺伝子から解き明かす鳥の不思議な世界. 一色出版, 東京.

資料5 科研費事業の効果

【学会発表等】

18. 平岡 考 (2019) 山階鳥類研究所の活動. 日本鳥学会 2019 年度大会 自由集会(W11), 帝京科学大学.
19. 平岡 考 (2019) 正倉院宝物バードウォッチング. JBF 山階鳥研見にレクチャー (2019 年 11 月 3 日), 山階鳥類研究所.
20. 岩見恭子 (2019) 標本を残すためにできること —山階鳥類研究所の取り組み. 日本鳥学会 2019 年度大会 自由集会(W01), 帝京科学大学.

資料5 科研費事業の効果

21. 岩見恭子 (2019) コシジロウミツバメの消化管から発見されたマイクロプラスチック. 日本鳥学会 2019 年度大会 ポスター発表, 帝京科学大学.
22. 岩見恭子 (2019) 鳥の剥製の中をのぞいてみよう. JBF 山階鳥研見にレクチャー (2019 年 11 月 3 日), 山階鳥類研究所.
23. Kawahara A, Aizawa M, Yamasaki T, Tanaka H (2019) Fabrication of a hummingbird-mimetic flexible flapping wings. 30th 2019 International Symposium on Micro-Nano Mechatronics and Human Science. Nagoya Univ., Nagoya Japan. December 1-4.
24. 岸根宏明・山崎剛史・田中博人 (2019) ペンギンの胴体の羽を模倣した微小表面構造の抗力低減効果の実験的研究. 日本機械学会第 97 期流体工学部門講演会, ホテルアソシア豊橋.
25. 小林さやか・黒田清子 (2019) 山階鳥研の所蔵標本から見つかったグールド標本とその歴史. 日本鳥学会 2019 年度大会 ポスター発表, 帝京科学大学.
26. 小林さやか・岩見恭子・加藤ゆき (2019) 第 3 回 収蔵庫は宝の山! —標本の収集と保存を考える— 日本鳥学会 2019 年度大会 自由集会(W01), 帝京科学大学.
27. 小林さやか (2019) 山階鳥研から見つかったジョン・グールド収集標本. JBF 山階鳥研見にレクチャー (2019 年 11 月 2 日), 山階鳥類研究所.
28. Nakao T, Yamasaki T, Ogihara N, Shimada M (2019) Okinawa Rail has relatively larger Wulst in the brain: Relationship between anvil using behavior and brain morphology. American Ornithology Meeting 2019.
29. 中尾達郎ほか (2019) クイナ科鳥類の脳におけるウルストの発達具合の定量的分析. 日本鳥学会 2019 年度大会 ポスター発表, 帝京科学大学.
30. 西海ほか (2019) みんなで作ろう! 目録 8 版. 日本鳥学会 2019 年度大会 自由集会(W10), 帝京科学大学.
31. 小田谷嘉弥・山崎剛史・齋藤武馬 (2019) チュウジンギの繁殖集団間における地理的変異と分類学的問題の解決. 日本鳥学会 2019 年度大会 ポスター発表, 帝京科学大学.
32. 長太伸章・杉田典正・山崎剛史・川上和人・西海 功 (2019) メグロの系統的位置. 日本進化学会, 北海道大学.
33. 齋藤武馬 (2019) オガサワラカワラヒワの系統位置と分類学的再検討. 日本鳥学会 2019 年度大会 自由集会(W08), 帝京科学大学.
34. 茂田良光ほか (2019) 沖縄島のリュウキュウキビタキについて. 日本鳥学会 2019 年度大会 口頭発表, 帝京科学大学.
35. 高木昌興・澤田 明・齋藤武馬 (2019) 琉球列島のリュウキュウコノハズクは多型種か二種か. 日本鳥学会 2019 年度大会 口頭発表, 帝京科学大学.
36. Tanaka I, Falkingham PL, Yamasaki T (2019) The method of estimating bipedally dinosaur's posture from the ground based on walking bird's tarsometatarsus. 67th Symposium on Vertebrate Palaeontology and Comparative Anatomy and the 28th meeting of the Symposium on Palaeontological Preparation and Conservation. Dinosaur Isle Museum, Sandown, UK.
37. 富田直樹ほか (2019) ウミネコ雛の生存に影響する気温に関連した微気候の変化. 日本鳥学会 2019 年度大会 ポスター発表, 帝京科学大学.
38. 富田直樹 (2019) 実は日本のカモメ類が減っています. JBF 山階鳥研見にレクチャー (2019 年 11 月 2 日), 山階鳥類研究所.
39. 田谷昌仁ほか (2019) 鳥類の小翼羽形態と生態の関係. 日本鳥学会 2019 年度大会 ポスター発表, 帝

資料 5

科研費事業の効果

京科学大学.

40. 鶴見みや古・吉田 成 (2019) 写真に遺る失われた伝統狩猟の記録 —その保存の意義を考える—. 日本鳥学会 2019 年度大会 ポスター発表, 帝京科学大学.
41. 鶴見みや古 (2019) オガワコマドリ;きみの名は~どうしてそんな名前ですのん?~. JBF 山階鳥研見にレクチャー (2019 年 11 月 2 日), 山階鳥類研究所.
42. 山崎剛史・江田真毅・泉 洋江・佐藤文男 (2019) アホウドリの隠ぺい種: *Phoebastria albatrus* の名を継ぐのは誰か. 日本鳥学会 2019 年度大会 口頭発表, 帝京科学大学.
43. 山崎剛史 (2019) 鳥に学んだものづくり —鳥のバイオミメティクス. JBF 山階鳥研見にレクチャー (2019 年 11 月 2 日), 山階鳥類研究所.

【展示会への協力】

44. 我孫子市鳥の博物館 (2019) 第 84 回企画展「世界からみた日本の鳥」(2019 年 7 月 13 日~11 月 24 日, 我孫子市鳥の博物館).
45. 奥野卓司 (2019) 全国鶴飼サミット京都大会, 京都嵐山.
46. 玉川学園創立 90 周年記念特別展「ジョン・グールドの鳥類図譜 —19 世紀 描かれた世界の鳥とその時代」(2019 年 10 月 5~13 日 東京芸術劇場; 10 月 28 日~2020 年 2 月 2 日, 玉川大学教育博物館).

別紙

平成30年度科学研究費助成事業「特定奨励費」
進捗状況の確認に係る所見

団 体 名：公益財団法人山階鳥類研究所

研究事業名：日本最大の鳥学関連資料の維持管理・拡充・公開に関する研究事業

本研究事業については、鳥学関連資料の維持管理、拡充、情報公開・ネットワーク構築が着実に行われるなど、状況報告書により、事業計画が十分に実施されていることを確認したが、経費の使用状況に関しては、人件費や謝金等の項目において「給料」や「臨時職員謝金」としか記載がなく、どのような職務の人を何人雇用したのか等が不明であるため、今後は具体的に記載すべきである。

事業計画のうち、特に、全国の鳥類資料を有する施設とのネットワーク構築については、その第一歩として我孫子市博物館との連携をスタートさせており、また、将来に向けた人材育成への努力も見受けられる。今後は、ネットワーク化の更なる拡充・加速と、人材育成の着実な進展を期待する。

一方で、情報公開とネットワーク支援の効果については、経時的な自己評価や分析が必要である。

科学技術・学術審議会学術分科会
科学研究費補助金審査部会

山階鳥研所蔵鳥類関連資料群を利用した考古学資料の研究

江田真毅（北海道大学准教授）

考古学は遺跡でみつかった「モノ」から過去の人類の活動を復元する学問である。遺跡からみつける鳥類に関連した「モノ」には、骨や羽のほか、鳥類を模した図像なども含まれる。これらの資料の分析の第一歩は、その由来の解明である。そのためには現生の標本・資料との比較が欠かせない。発表者は、これまで骨標本を中心に山階鳥研所蔵の文献史料や組織標本などを利用していただき考古学資料を研究してきた。骨標本の観察・撮影・計測に基づく知見は、国内外の約 60 遺跡から出土した鳥骨の同定に活用されている。また、幾何学的形態測定法によるカモ科の同定基準の作成や「世界最古のニワトリ」の再検討、弥生時代のニワトリの性比の解明などの研究にも大きく貢献している。さらにナスカの地上絵に描かれた鳥の同定では、多様な文献史料を活用させていただいた。一方、考古学資料の分析から明らかになったアホウドリの種内の 2 集団間の関係性の解明のために、同種の組織標本を提供いただき解析している。発表では、山階鳥研所蔵鳥類関連資料群を利用した考古学資料の分析から明らかになった人と鳥類の関係史について、また鳥類の過去の生態についていくつかの事例を紹介する。

ジョン・グールドの鳥類図譜—19世紀に描かれた世界の鳥

黒田清子（山階鳥類研究所フェロー）

博物学の黄金時代とも称される19世紀のイギリスで出版されたジョン・グールドの鳥類図譜は、学術的な解説文を伴った石版手彩色の美しい大判図版が人々を魅了し、現在でも世界的に貴重な資料として高く評価されている。図譜に描かれた鳥類は、アフリカ大陸を除く全大陸に及び、2年近く現地に滞在、調査した成果をまとめた『オーストラリア鳥類図譜』は新大陸の鳥類に関する世界初の包括的な学術書となった。

この図譜の日本における最初の大型コレクションは、鷹司信輔博士により戦前に収集された7作品23巻で、博士の没後、山階鳥類研究所に寄贈された。また玉川学園教育博物館では1992年から収集を始め10作品40巻というコレクションを有している。

図譜の概要と描かれている鳥類やその描写について、その一端を紹介すると共に、昨年、山階鳥研の協力を得て開催された玉川学園創立90周年記念『ジョン・グールドの鳥類図譜—19世紀 描かれた世界の鳥類とその時代』展についても言及したい。

令和元年度（平成31年度）

文部科学省科学研究費補助金（特定奨励費）による研究事業の

研究成果発表会

資料集

令和2年1月27日

公益財団法人 山階鳥類研究所

〒270-1145 千葉県我孫子市高野山115

<http://www.yamashina.or.jp/>

V 平成 31（2019）年度決算資料

V-1. 正味財産増減計算書

平成31年度 正味財産増減計算書内訳表（前年度比） 公益財団法人 山階鳥類研究所

令和2年3月31日現在
(単位：円)

科 目	当 年 度 計	前 年 度 計	増 減
【一般正味財産増減の部】			
〔経常増減の部〕			
〔経常収益〕			
【基本財産運用益】			
基本財産運用益	16,961,006	16,946,873	14,133
【受取会費】			
受取会費	12,210,000	14,732,000	△ 2,522,000
【事業収益】			
受託・請負事業収益	87,512,800	90,310,242	△ 2,797,442
不動産賃貸事業収益	14,520,000	14,520,000	0
不動産契約更新料収益	680,000	0	680,000
【補助金等収益】			
国庫補助金	56,000,000	56,000,000	0
独行・大学法人補助金	3,243,500	5,076,500	△ 1,833,000
民間助成金	5,230,000	7,408,000	△ 2,178,000
【受取寄附金】			
受取寄附金	70,477,035	65,793,938	4,683,097
募金収益	12,000	13,000	△ 1,000
【受取利息】			
受取利息	1,819	1,648	171
【雑収益】			
有価証券運用益	8,200	0	8,200
雑収益	4,202,933	4,910,166	△ 707,233
経常収益計	271,059,293	275,712,367	△ 4,653,074
〔経常費用〕			
【事業費】			
役員報酬	1,404,000	1,404,000	0
通勤費(役員)	44,389	39,116	5,273
人件費	103,011,113	109,117,242	△ 6,106,129
業務費	82,936,852	97,840,961	△ 14,904,109
物品費	16,858,508	18,856,019	△ 1,997,511
修繕積立金	1,900,800	1,900,800	0
減価償却費	15,563,974	15,653,407	△ 89,433
賞与引当金繰入額	2,815,356	2,697,965	117,391
退職共済掛金	2,750,004	3,270,004	△ 520,000
退職給与積立金	2,189,776	1,899,922	289,854
管理費(賃貸)	1,320,000	1,320,000	0
支払助成金	1,916,985	1,951,639	△ 34,654
支払負担金	165,500	31,600	133,900
事業費計	232,877,257	255,982,675	△ 23,105,418
【管理費】			
役員報酬	156,000	156,000	0
通勤費(役員)	4,933	4,346	587
人件費	2,880,175	2,618,062	262,113
業務費	2,416,043	2,776,870	△ 360,827
物品費	214,265	243,344	△ 29,079
減価償却費	1,089,025	1,084,920	4,105
賞与引当金繰入額	95,094	89,546	5,548
退職共済掛金	109,996	129,996	△ 20,000
支払負担金	121,500	139,940	△ 18,440
管理費計	7,087,031	7,243,024	△ 155,993
経常費用計	239,964,288	263,225,699	△ 23,261,411
当期経常増減額	31,095,005	12,486,668	18,608,337
〔経常外増減の部〕			
〔経常外収益〕			
その他経常外収益	0	743	△ 743
経常外収益計	0	743	△ 743

科 目	当 年 度 計	前 年 度 計	増 減
〔経常外費用〕			
固定資産除去損	51,633	805,624	△ 753,991
図書評価損	199,568	306,679	△ 107,111
標本評価損	387,027	0	387,027
経常外費用計	638,228	1,112,303	△ 474,075
当期経常外増減額	△ 638,228	△ 1,111,560	473,332
税引き前当期一般正味財産増減額	30,456,777	11,375,108	19,081,669
法人税・住民税及び事業税	727,400	670,200	57,200
当期一般正味財産増減額	29,729,377	10,704,908	19,024,469
一般正味財産期首残高	1,441,072,323	1,430,367,415	10,704,908
一般正味財産期末残高	1,470,801,700	1,441,072,323	29,729,377
〔指定正味財産増減の部〕			0
受取寄附金	500,000	500,000	0
受取寄附金利息	36	31	5
〔一般正味財産への振替額〕			0
当期指定正味財産増減額	500,036	500,031	5
指定正味財産期首残高	3,608,053	3,108,022	500,031
指定正味財産期末残高	4,108,089	3,608,053	500,036
〔正味財産期末残高〕	1,474,909,789	1,444,680,376	30,229,413

※人件費内訳：給与手当、賃金、賞与、法定福利費、福利厚生費

※業務費内訳：委託費、旅費、交通費、通信運搬費、修繕費、印刷製本費、光熱水料費、借料及び損料
保険料、諸謝金、租税公課、会議費、交際費、雑費

V-2. 貸借対照表

令和2年3月31日現在
(単位：円)

科 目	当年度	前年度	増減
I 資産の部			
1. 流動資産			
現金	2,911,568	3,128,369	△ 216,801
普通預金	144,766,375	135,497,317	9,269,058
郵便振替	1,930,056	2,619,711	△ 689,655
郵便貯金	1,334,135	561,031	773,104
有価証券	1,000,000	1,000,000	0
未収金	40,853,858	40,875,550	△ 21,692
前払金(図書)	1,220,824	1,216,674	4,150
前払費用	275,339	277,954	△ 2,615
流動資産合計	194,292,155	185,176,606	9,115,549
2. 固定資産			
(1) 基本財産			
普通預金	3,249,349	1,878,331	1,371,018
有価証券	571,778,098	573,466,627	△ 1,688,529
土地	134,000,000	134,000,000	0
建物	182,108,579	192,787,045	△ 10,678,466
構築物	10,296	222,079	△ 211,783
貴重図書	128	128	0
標本(1点1円備忘価額)	70,575	65,614	4,961
標本(取得価額)	0	391,988	△ 391,988
基本財産合計	891,217,025	902,811,812	△ 11,594,787
(2) 特定資産			
退職給付引当資産	7,102,352	10,037,790	△ 2,935,438
大規模修繕積立資産	33,146,695	9,146,609	24,000,086
その他積立資産(アホトリ保護資金)	4,108,089	3,608,053	500,036
特定資産合計	44,357,136	22,792,452	21,564,684
(3) その他固定資産			
土地	352,000,000	352,000,000	0
建物	13,701,901	14,692,927	△ 991,026
建物附属設備	2,452,551	2,658,584	△ 206,033
車両運搬具	706,821	1,059,701	△ 352,880
図書(1点1円備忘価額)	61,051	59,352	1,699
図書(取得価額)	331,505	201,267	130,238
什器備品	8,995,756	11,047,096	△ 2,051,340
什器備品(リース)	16,763,542	0	16,763,542
預託金	9,550	9,550	0
長期前払費用	0	69,859	△ 69,859
ソフトウェア	1	137,215	△ 137,214
その他固定資産合計	395,022,678	381,935,551	13,087,127
固定資産合計	1,330,596,839	1,307,539,815	23,057,024
資産合計	1,524,888,994	1,492,716,421	32,172,573
I I 負債の部			
1. 流動負債			
預り金(源泉所得税)	717,087	613,179	103,908
預り金(個人住民税)	242,700	361,200	△ 118,500
未払金(旅費)	0	10,970	△ 10,970
前受金	83,600	825,200	△ 741,600
未払費用(社会保険料)	3,256,684	5,025,300	△ 1,768,616
未払費用(輸入消費税)	0	48,500	△ 48,500
未払消費税等	3,437,400	2,614,700	822,700
未払法人税等	727,400	670,200	57,200
賞与引当金	2,910,450	2,787,511	122,939
流動負債合計	11,375,321	12,956,760	△ 1,581,439
2. 固定負債			
リース債務	6,270,000	0	6,270,000
退職給付引当金	28,913,884	31,659,285	△ 2,745,401
預り敷金	3,420,000	3,420,000	0
固定負債合計	38,603,884	35,079,285	3,524,599
負債合計	49,979,205	48,036,045	1,943,160
I I I 正味財産の部			
1. 指定正味財産			
寄附金	4,108,089	3,608,053	500,036
指定正味財産合計	4,108,089	3,608,053	500,036
(うち特定資産への充当額)	4,108,089	3,608,053	500,036
2. 一般正味財産			
(うち基本財産への充当額)	1,470,801,700	1,441,072,323	29,729,377
(うち特定資産への充当額)	891,217,025	902,354,210	△ 11,137,185
(うち特定資産への充当額)	40,249,047	19,184,399	21,064,648
正味財産合計	1,474,909,789	1,444,680,376	30,229,413
負債及び正味財産合計	1,524,888,994	1,492,716,421	32,172,573

V-3. 財産目録

平成31年度 財産目録

令和2年3月31日現在

科 目	金	額
〔資産の部〕		
【流動資産】		
現金	2,911,568	
普通預金	144,766,375	
定期預金	0	
郵便振替	1,930,056	
郵便貯金	1,334,135	
有価証券	1,000,000	
未収金	40,853,858	
前払金（図書）	1,220,824	
前払費用	275,339	
流動資産合計		194,292,155
【固定資産】		
（基本財産）		
普通預金	3,249,349	
有価証券	571,778,098	
土地	134,000,000	
建物	182,108,579	
構築物	10,296	
貴重図書	128	
標本（1点1円備忘価額）	70,575	
標本（取得価額）	0	
基本財産合計	891,217,025	
（特定資産）		
退職給付引当資産	7,102,352	
大規模修繕積立資産	33,146,695	
指定正味財産用	4,108,089	
特定資産合計	44,357,136	
（その他固定資産）		
土地	352,000,000	
建物	13,701,901	
建物附属設備	2,452,551	
車両運搬具	706,821	
図書（1点1円備忘価額）	61,051	
図書（取得価額）	331,505	
什器備品	8,995,756	
什器備品（リース）	16,763,542	
預託金	9,550	
長期前払費用（長期火災保険料）	0	
ソフトウェア	1	
その他固定資産合計	395,022,678	
固定資産合計		1,330,596,839
資産合計		1,524,888,994
〔負債の部〕		
【流動負債】		
預り金（源泉所得税）	717,087	
預り金（個人住民税）	242,700	
前受金	83,600	
未払費用（社会保険料）	3,256,684	
未払消費税等	3,437,400	
未払法人税等	727,400	
賞与引当金	2,910,450	
流動負債合計		11,375,321
【固定負債】		
退職給付引当金	28,913,884	
リース債務	6,270,000	
預り敷金	3,420,000	
固定負債合計		38,603,884
負債合計		49,979,205
正味財産		1,474,909,789

注1：什器備品は公益目的事業分¥8,553,656、収益事業分¥442,100

VI ご寄附・賛助等に関する資料

平成30年度・平成31年度 寄附金及び賛助会員増減数一覧

種別	平成30年度		平成31年度		比較増減額 金額(円)	対30年度 増減率 % 比率(%)	比較増減数		備考
	金額(円)	件数	金額(円)	件数			件数	件数	
寄附金(法人)	6,248,000	11	12,650,000	8	6,402,000	102%	△3	(平成30年度大口) (一社) 霞会館 1,500,000円、大和証券(株) 1,000,000円、(株) 帝国ホテル 1,000,000円、(株) 横浜銀行 綱島支店 1,000,000円、(平成31年度大口) (一社) 東京倶楽部 10,000,000円、(一社) 霞会館 1,500,000円	
寄附金(個人)	9,372,938	34	15,117,035	36	5,744,097	61%	2	(平成30年度大口) 佐藤洋一 5,000,000円、徳原榮輔 1,000,000円、南場智子 1,000,000円	
計	15,620,938	45	27,767,035	44	12,146,097	78%	△1	(平成31年度大口) 高井尚子 10,000,000円、伊東誠 1,000,000円	

<賛助会員>

種別	平成30年度		平成31年度		比較増減額 金額(円)	対30年度 増減率 % 比率(%)	比較増減数		備考
	金額(円)	員数	金額(円)	員数			件数	件数	
法人賛助会員	42,810,000	228	41,710,000	212	△1,100,000	△2.5%	△16	平成31年度入会 7件、平成31年度 未継続・退会 23件	
地方自治体	2,750,000	13	2,800,000	14	50,000	1.8%	1	平成31年度 再入会 50,000円(稲敷市)	
団体賛助会員	514,000	14	529,000	15	15,000	3%	1	平成31年度 入会 15,000円(我孫子市鳥の博物館友の会)	
個人賛助会員	8,860,000	752	7,635,000	650	△1,225,000	△13.8%	△102	平成31年度入会 27人、平成31年度 未継続・退会129人	
計	54,934,000	1,007	52,674,000	891	△2,260,000	△4.1%	△116		
寄附金・賛助会費 合計	70,554,938		80,441,035						
賛助会員の集い 会費	1,608,000	134	0	0				東日本・中部日本地区	
アホウドリの保護活動	0		0	0				保全研究室	
アルハトロス募金	13,000	4	12,000	4				サントリーホールディングス(株)	
懇親会 寄附金・会費	18,000	1	246,000	41				特定賛助法人懇親会(H30年度寄附金扱い、H31年度会費扱い)	
下村兼史写真展 寄附	345,000	5	0	0					
ハワイミツスイ	6,000,000	1	0	0				内山春雄	
保全研究室委託・請負事業 特別会計	2,000,000	1	0	0					
ジョン・ゲルト 展 寄附	0	0	2,000,000	1				玉川大学教育博物館	
総計	80,538,938		82,699,035						

* 金額は年度合計額。賛助会員数は期末時点における員数。

* 法人賛助会員はP/L上寄附金扱いとなっている(除くサントリー1,000,000円。サントリーからの申出により賛助会費扱いとなっている。)

公益財団法人山階鳥類研究所

平成30年度・平成31年度 県別 賛助会員数一覧

(各年度末 3月31日現在)

	法人		地方自治体		団体		個人	
	平成30年度	平成31年度	平成30年度	平成31年度	平成30年度	平成31年度	平成30年度	平成31年度
北海道							15	16
青森県							4	4
岩手県							3	2
宮城県	1	1					6	4
秋田県							5	4
山形県							1	2
福島県							5	5
茨城県	12	9	2	3			55	53
栃木県	1	1					3	3
群馬県							3	1
埼玉県	2	2					23	22
千葉県	8	7	6	6	10	11	96	88
東京都	72	70			2	2	146	121
神奈川県	4	4					47	39
新潟県			1	1	1	1	10	12
富山県							1	1
石川県							5	4
福井県	1	1					0	0
山梨県							2	1
長野県	4	3	2	2			24	18
岐阜県	1	1					9	8
静岡県							3	3
愛知県	5	4					53	40
三重県							3	3
滋賀県							3	3
京都府	17	17					5	6
大阪府	32	32					19	20
兵庫県	4	4	1	1			16	19
奈良県	2	2					1	1
和歌山県							2	2
鳥取県					1	1	3	3
島根県	2	2					5	4
岡山県	1	1					4	3
広島県	7	7					83	65
山口県							9	8
徳島県	1	1					1	1
香川県							4	3
愛媛県	21	18					29	22
高知県	2	1					4	2
福岡県	1	1					4	5
佐賀県							0	0
長崎県	1	1					2	3
熊本県	20	17					22	15
大分県	1	1					4	3
宮崎県							1	1
鹿児島県	5	4	1	1			4	3
沖縄県							5	4
合計	228	212	13	14	14	15	752	650

賛助会員の集い 地区別・年度別 開催状況一覧

	東日本 (東京)	東日本・中部 (東京)	中部・名古屋 (名古屋)	関西 (大阪・京都)	四国 (愛媛)	中国 (広島)	九州 (熊本)	中 部 (長野)	中国・四国 拡大 (広島・岐阜 他)	中国・四国
平成21年度				—	—		22.2.9		—	
平成22年度	22.6.23			—	—			23.2.14	—	22.12.7(広島)
平成23年度			23.12.1	23.7.4	—		24.2.7		—	
平成24年度	24.7.3				—				25.1.23	
平成25年度			25.11.8	25.7.10	—		25.3.5			
平成26年度	26.7.15				27.2.18					
平成27年度			28.1.20	27.7.2		27.4.6				
平成28年度	28.7.13				29.2.1					
平成29年度				29.7.3		29.4.12				
平成30年度		30.7.2								31.3.6(愛媛)
平成31年度				元年.12.18						

平成31年度 (公財) 山階鳥類研究所 公共機関賛助金一覧

令和2年3月31日現在

(縣市町村名)	(賛助員入会年度)	(賛助金) 円	(担当課)
我孫子市 (千葉県)	S. 60年度	1, 150, 000	鳥の博物館
柏市 (")	H. 4年度	400, 000	文化課
松戸市 (")	H. 4年度	500, 000	みどりと花の課
千葉県 (")	H. 2年度	200, 000	自然保護課
野田市 (")	H. 4年度	100, 000	社会教育課
成田市 (")	H. 12年度	50, 000	環境計画課
稲敷市 (茨城県)	H. 20年度	50, 000	生活環境課
牛久市 (")	H. 5年度	50, 000	都市計画課
利根町 (")	H. 6年度	50, 000	企画財政課
軽井沢町 (長野県)	H. 17年度	50, 000	観光経済課
中野市 (")	H. 18年度	50, 000	教育委員会
新潟市 (新潟県)	H. 4年度	50, 000	福島潟みらい連合
豊岡市 (兵庫県)	H. 5年度	50, 000	コトリ共生推進課
出水市 (鹿児島県)	H. 5年度	50, 000	出水市ツル博物館
	合 計	2, 800, 000	

平成31年度 賛助法人リスト（五十音順） ※ 法人賛助員及び継続寄附法人を含む

令和2年3月31日現在

(有) アート企画
 アインズ商事(有)
 (公財) 旭硝子財団
 (株) 旭屋書店
 麻布大学附属学術情報センター
 アジア航測(株)
 (株) あつまるホールディングス
 穴吹興産(株)
 (一社) 我孫子ゴルフ倶楽部
 我孫子市
 我孫子市国際交流協会
 我孫子野鳥を守る会
 アブダビ石油(株)
 嵐山通船(株)
 嵐山保勝会
 アルファクラブ武蔵野(株)
 安穩寺
 (宗) 安養院
 (宗) 安養寺
 (株) イーストネットワーク
 (株) イープレス
 イカリ消毒(株)
 (有) 池田製茶
 出水市
 (株) イズミヤ
 (株) 泉屋商店
 出雲大社
 厳島神社
 (株) 一保堂
 (株) いとや
 稲敷市
 岩谷産業(株)
 上野製菓(株)
 (有) 上野剥製所
 牛久市
 ANAホールディングス(株)
 (株) えがお
 (株) NHKエンタープライズ
 (株) NYK西日本
 (株) 江ノ島マリンコーポレーション
 (株) 愛媛銀行
 愛媛パッケージ(株)
 エレコム(株)
 (株) 応用生物
 大阪ガス(株)
 大崎電気工業(株)
 (株) 大塚商会
 (株) 大林組大阪本店
 (株) 大林組東京本店
 (株) オービックビジネスコンサルタント
 小笠原海運(株)
 オカモト(株)
 小川香料(株)
 オザキエンタープライズ(株)
 おべ工業(株)
 鹿島建設(株)
 鹿島神宮
 柏市
 (一社) 霞会館
 香取神宮
 加納屋運送(株)

賀茂鶴酒造(株)
 賀茂別雷神社
 軽井沢町
 川北化学(株)
 関西電力(株)
 キッコーマン(株)
 キヤノン(株)
 (株) キューネット
 キョーラク(株)
 (宗) 清澄寺
 近鉄グループホールディングス(株)
 (株) 熊谷組名古屋支店
 熊本朝日放送(株)
 (株) 熊本県民テレビ
 熊本交通運輸(株)
 (株) クリーンサービス
 桑原運輸(株)
 月桂冠(株)
 ケネディクス(株)
 (株) 建設環境研究所
 (一財) 建設経済研究所
 鴻池運輸(株)
 (株) 亘徳 東京支店
 (株) コーエーテックモホールディングス
 (株) コーセー
 (株) 国際文献社
 コクヨ(株)
 黒龍酒造(株)
 小島慶嗣公認会計士事務所
 寿精版印刷(株)
 佐藤製菓(株)
 サラヤ(株)
 山九(株)
 (株) サンクゼール
 (株) SUNデザイン研究所
 三徳電機(株)
 三宝電機(株)
 (株) シアーズホーム
 (株) シー・アイ・シー
 (株) シグナル交通
 四国建設コンサルタント(株)
 (株) 資生堂
 (株) 七光
 信濃毎日新聞(株)
 澁谷工業(株) 関西営業部
 (株) 島津興業
 清水建設(株)
 (学) 修道学園
 (株) ジュニアシダ
 (株) 聖護院八ツ橋総本店
 (宗) 如宝寺
 (一社) 昭和会館
 新和印刷(株)
 (株) 親和技術コンサルタント
 (一財) 水源地環境センター
 住友化学(株)
 (有) セイフティーテクノス
 (株) セキュリティエヒメ
 (株) セルモ
 セレモアホールディングス(株)
 セイコーホールディングス(株)

全国農業協同組合連合会
 (学) 洗足学園
 (株) 仙波工業
 総合警備保障 (株)
 (学) 君が淵学園 崇城大学
 ソニー (株)
 ソニー生命保険 (株)
 (株) 第一製版
 ダイキン工業 (株)
 (株) 大正クエスト
 (宗) 大聖寺
 (株) 大宣
 大日本印刷 (株)
 (株) 大任建設
 大和ハウス工業 (株)
 宝ホールディングス (株)
 (株) 竹中工務店
 (株) 田中伊雅佛具店
 (株) 玉越
 (株) 地域情報センター
 千葉県
 中央学院大学
 (株) 中国新聞社
 鶴崎商事 (株)
 (株) ティーワイリミテッド
 (公財) 摘水軒記念文化財団
 テラル (株)
 (株) テレビ熊本
 (一財) 電力中央研究所
 東映 (株)
 東京エレクトロン (株)
 (公財) 東京動物園協会
 東京リボン (株)
 東西化学産業 (株)
 (株) 東伸
 (宗) 東大寺
 東レ (株)
 (株) トーセ
 常磐神社
 (株) トサトーヨー
 凸版印刷 (株)
 利根町
 (株) 友清白蟻
 豊岡市
 豊安工業 (株)
 長野朝日放送 (株)
 中野市
 (株) 長野ホテル犀北館
 成田市
 NISSHA (株)
 (株) 日清製粉グループ本社
 日本航空 (株)
 日本生命保険 (相)

日本たばこ産業 (株)
 日本鳩対策センター (株)
 (一社) 日本鳩レース協会
 日本ファイリング (株)
 日本野鳥の会 茨城県
 日本山村硝子 (株)
 ネットトヨタ京都 (株)
 野田市
 野村證券 (株) 本店営業部
 パナソニック (株)
 (株) 樋口松之助商店
 (株) ヒライ
 広島信用金庫
 (株) ひろ写真
 (有) 廣瀬石材店
 福岡ソフトバンクホークス (株)
 福島潟みらい連合
 (株) 藤交通
 (株) フジシール
 不二熱学工業 (株)
 (株) フジワラテクノアート
 星企画 (株)
 (公財) ホシザキグリーン財団
 (株) 堀場製作所
 松戸市
 (株) 円クリエーション
 (独) 水資源機構
 (株) 三井住友銀行
 三ツ浜汽船 (株)
 三菱商事 (株)
 (医) 天真会南高井病院
 (株) 南日本銀行
 村田機械 (株)
 (宗) 明治神宮
 (株) メモリード
 森ビル (株)
 (株) 森ビルホスピタリティコーポレーション
 (株) 安井建築設計事務所
 山科電気工業 (株)
 (学) 山野学苑
 (株) 山本精工所
 (株) ユー花園
 (株) ユーシン精機
 (株) ユニオン
 吉田機電 (株)
 (一財) 住環境財団
 (株) 鈴
 (株) レイメイ藤井
 レンゴー (株)
 (株) YSトレーディング
 (株) ワコール
 和多田印刷 (株)
 渡辺パイプ (株)

令和2（2020）年8月31日発行

編集・発行 公益財団法人 山階鳥類研究所

〒270-1145 千葉県我孫子市高野山115

TEL: 04-7182-1101

FAX: 04-7182-1106

URL: <http://www.yamashina.or.jp>